

児玉町文化財調査報告書 第19集

# 辻堂遺跡 I

県営水田農業確立排水対策特別事業(やはり川地区)に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書

埼玉県児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第19集

つじ どう  
辻 堂 遺 跡 I

県営水田農業確立排水対策特別事業(やほり川地区)に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書

1996

埼玉県児玉町教育委員会



## 序

埼玉県の北部に位置する児玉町は、町の南側半分を上武山地の山々が占め、北側にそれらの山々から流れ出す女堀川等の小河川によって開析された低地帯が広がる、真に自然と緑に恵まれた町であります。このような豊富な自然環境を有する当町は、古くより農業を主体とする第1次産業を主要産業として発展してきました。しかしながら、戦後の高度経済成長期以降、全国的に労働人口の主体が製造業やサービス業などの第2次・第3次産業に移行するに従い、農業も機械化が促進され、省力化と合理化による経営の安定を目的として、道水路の整備された近代的なほ場への大規模な土地改良が進められてきました。

当町の北側に広がる共和地区の水田地帯も、10年にわたってほ場整備のための土地改良事業が実施され、その景観も大きく様変わりいたしました。この事業に伴い多くの遺跡が現状変更を余儀なくされましたが、これらの遺跡の破壊される箇所については、やむを得ず事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとってまいりました。

我々の遠い祖先達の歴史の痕跡である遺跡を保護して行かなければならないことは、改めて言うまでもありませんが、発掘調査によって得た多くの貴重な成果を、郷土の歴史の中に正しく位置付け、将来の町づくりに役立させて行くことも、我々の重要な課題であると言えるでしょう。

今回報告する辻堂遺跡のB地点は、県営水田農業確立排水対策特別事業のやほり川地区に伴い、児玉町教育委員会が平成2年度に発掘調査を実施したものです。現地の発掘調査から本書刊行に至るまで、埼玉県本庄土地改良事務所や地元関係者をはじめとする多くの方々や機関より、様々なご協力やご教示を賜りました。ここに改めて厚くお礼申し上げます。

最後に、本書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史や遺跡に対する理解を深めるために、広く活用いただければ幸甚の至りに存じます。

平成8年2月10日

児玉町教育委員会  
教育長 富丘文雄

## 例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字蛭川字辻堂に所在する辻堂遺跡B地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営水田農業確立排水対策特別事業(やはり川地区)の用水路改修事に伴う事前の記録保存を目的として、児玉町教育委員会が平成2年度に実施したもので、その調査担当には恋河内昭彦が当たった。
3. 遺構番号は、A～D地点で通し番号になっているため、本書で欠番の遺構については、他地点の報告を行っている『辻堂Ⅱ』(恋河内1996)を参照していただきたい。
4. 本書刊行に要した経費は、県費委託金である。
5. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
6. 本書に使用した写真は、遺構を恋河内が、遺物を小林節子と中里広子が撮影した。
7. 本書中の地図は、第1図～第3図が国土地理院発行の5万分の1及び2万5千分の1を使用し、第4図と第5図は児玉町役場発行の2千5百分の1と児玉町教育委員会作成の児玉条里現況測量図を基にしている。
8. 発掘調査及び本書刊行にあたって、下記の方々や機関よりご助言・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

赤熊浩一、 浅野一郎、 荒川正夫、 磯崎 一、 伊丹 徹、  
市川 修、 出縄康行、 井上高明、 井上 肇、 岩瀬 誠、  
岩田明広、 梅沢太久夫、 太田博之、 岡本幸男、 金子彰男、  
駒宮史朗、 昆 彭生、 坂本和俊、 佐々木幹雄、 佐藤好司、  
篠崎 潔、 鈴木敏昭、 須田英一、 外尾常人、 高橋一夫、  
瀧瀬芳之、 田村 誠、 富田和夫、 中島 宏、 中村倉司、  
長瀧歳康、 藤川繁彦、 丸山 修、 丸山陽一、 水村孝行、  
増田一裕、 増田逸朗、 矢内 勲

埼玉県教育局文化財保護課、 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、  
埼玉県本庄土地改良事務所、

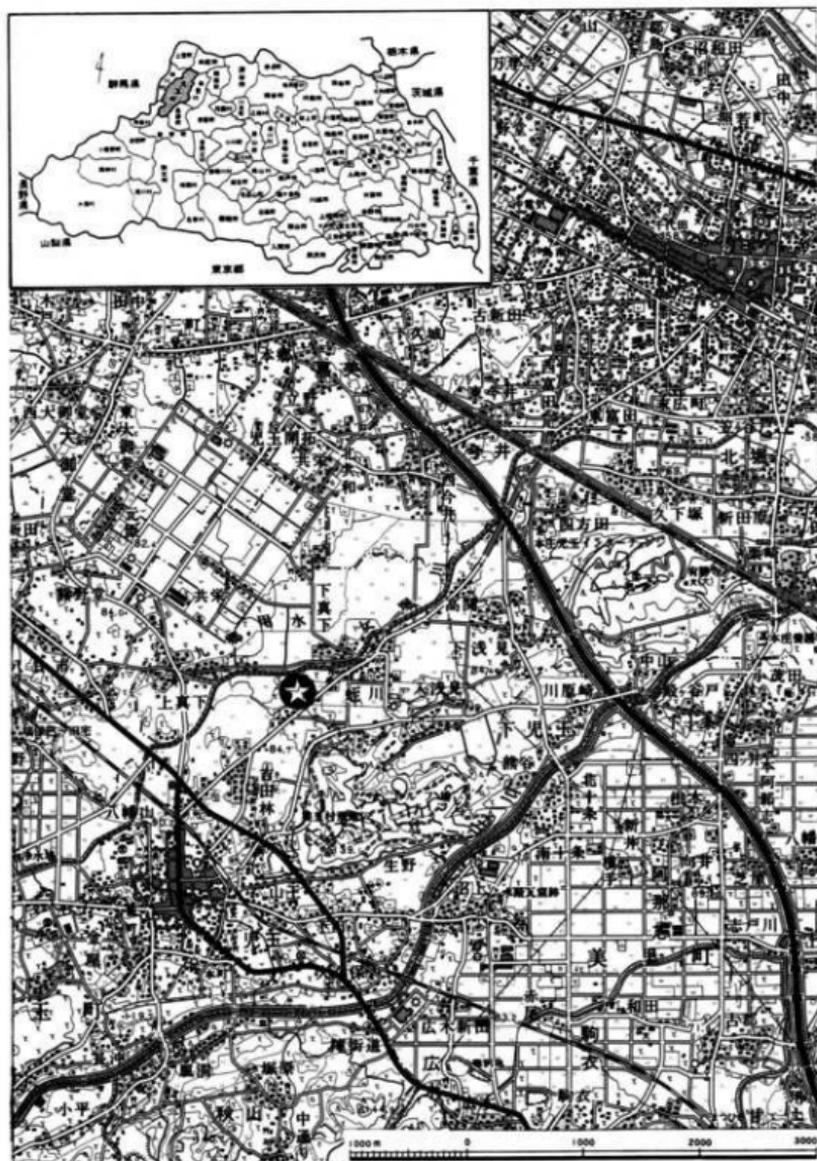
9. 本書刊行のための整理作業には、下記の者が参加した。  
飯島満江、 池田芳野、 梅沢トモ子、 小島森平、 小林節子、  
篠原和美、 鈴木利一、 戸沢ミチ子、 中里広子、 山田松枝、  
渡辺裕子

# 目 次

序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の歴史的環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	5
第Ⅳ章	検出された遺構と遺物	11
第1節	竪穴式住居跡	11
第2節	掘立柱建物跡	40
第3節	土        壙	41
第4節	溝        跡	45
第5節	河    川    跡	58
第Ⅴ章	ま    と    め	63
第1節	辻堂・南街道遺跡出土の古墳時代土器の様相	63
第2節	辻堂・南街道遺跡の古墳時代集落の変遷	80
参 考 文 献		89
写 真 図 版		



第1図 辻堂遺跡位置図

## 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

県営水田農業確立排水対策特別事業(やほり川地区)は、農地の排水改良を行うことにより、水田の汎用性を高め農業経営の安定化に資することを目的とするもので、児玉町大字吉田林・蛭川・入浅見・下浅見の水田の一部を灌漑している現用水路(やほり川)を対象とした事業である。

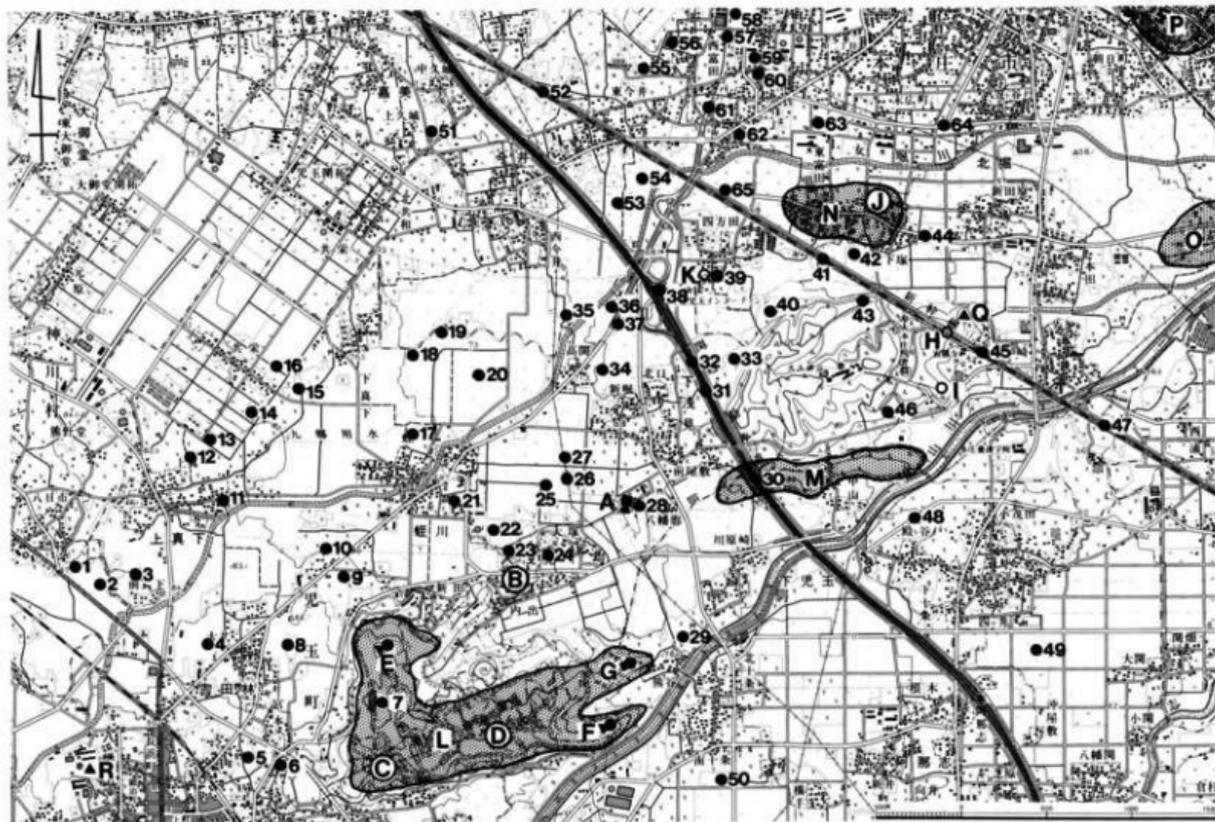
やほり川は、神川町大字新宿字寄島で神流川より引水される九郷用水を源とし、神川町大字八日市の熊野堂堰で九郷用水から分水される比較的規模の小さな素掘りの人工水路である。流路は、上流の吉田林地内では地形に沿ってかなり大きく蛇行しながら東流し、中流の蛭川地内では共和小学校の南側を条里水田内の東西方向の条里坪線に合って直線的に流れ、下流の下浅見地内では鷺山の残丘を南側に大きく迂回して、美里町の下児玉で塚本山の残丘下を東流しながら小山川(旧身馴川)に合流している。この用水は、地域によって名称が異なっており、上流の蛭川地内では「地藏畑」や「大堀(川)」と呼ばれ、下流の入浅見や下浅見地区では「矢堀(川)」と呼ばれているが、本書では便宜的に事業名をとって「やほり川」の名称を使用している。

平成元年の春頃、埼玉県土地改良調査事務所より事業計画の説明と計画路線内における文化財の所在について協議があった。それによると、やほり川の改修工事は蛭川字辻堂から下浅見字矢地に至る総延長約3,000mを対象に行うものであったが、上流にあたる国道462号線より西側では、路線が現水路とは大幅に変更される部分があり、そこは周知の埋蔵文化財包蔵地(№54-033)の範囲内であり、辻堂遺跡が所在していた。その後、その取り扱いについて事業を担当する埼玉県本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会と事前協議を重ね、平成元年12月に行われた県文化財保護課・県耕地課・本庄土地改良事務所・児玉町教育委員会の4者による調整会議で、現状変更により遺跡が破壊される部分については、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになり、発掘調査は県文化財保護課の指導により児玉町教育委員会が実施することになった。

かくして、本庄土地改良事務所より平成2年6月11日付け本地第1214号による「埋蔵文化財発掘の通知」が、児玉町教育委員会より平成2年6月11日付け児教社第214-2号による「埋蔵文化財発掘調査の通知」がそれぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出され、発掘調査に係わる事業は平成2年8月6日から実施された。なお、文化庁からは平成3年4月3日付け委保記第5-6543号による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは平成2年11月20日付け教文第3-221号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知されている。



第2図 やほり川改修路線と辻堂遺跡



第3図 女堀川中流域周辺の古墳時代遺跡

## 第Ⅱ章 遺跡の歴史的環境

本遺跡が所在する女堀川中流域では、現在までに大小様々な開発に伴う発掘調査により、部分的ではあるが多くの遺跡が明らかにされている。古くは先土器時代から遺物が見られるが(増田1992)、当流域において急激に遺跡が増加するのは古墳時代になってからであり、古墳時代の遺跡の多さは県内でも屈指の地域と言われている。当流域の古墳時代の特徴は、弥生時代まではあまり開発の対象にされていなかった沖積低地内やその周縁部に多くの集落が形成され、水路等を掘削して沖積低地の本格的な開発が行われるようになったことであり、首長墓級の古墳の継続的な築造に見られるように、沖積低地の開発を基盤とした新たな政治的な社会関係が確立された時代と言える。

児玉地方の古墳時代の幕開けは、いわゆる「外来系土器」の出現と定着に象徴される。当地域と小山川を挟んで隣接する志渡川流域では、庄内式(纏向2~3式)並行期の美里町志渡川遺跡第3号住居跡(坂本1984)のように、外来系土器を多量にもつ集落が早くから低地内に進出するが、女堀川流域ではこの段階にはまだ低地内への集落の進出は認められず、神川町前組羽根倉遺跡(柿沼他1986)や児玉町真鏡寺後遺跡F地点(忍河内1991)など、上流域の丘陵上に立地する弥生時代後期からの伝統的集落に外来系土器が伴出する状況が見られる。女堀川流域では、布留式古段階(纏向4式)並行期になって、中流域の低地内に叩き甕やS字甕C類を伴う小規模な川越田遺跡(忍河内1993)が出現する。その後この集落は、同じ自然堤防上の北東側に集落の中心を移動させ、前期後葉頃には後張遺跡の大規模集落を形成し、中流域の中心的集落として発展する。そして、低地内の自然堤防上や西側の本庄台地縁部及び東側の残丘下の台地上にも小規模な集落が形成されるようになり、沖積低地東側の残丘上には全長60mを測る前方後方墳の鷺山古墳が築造されている。

中期(5世紀)前半では、前期と同様に後張遺跡を中心とした集落展開が見られるが、当地域の各住居にカマドが普及する中期後半になると、後張遺跡はやや衰退して、集落の中心を南側の梅沢遺跡の方に移動させるようである。そして、それに変わるように中流域北側の本庄台地縁部に位置し、二本松遺跡・夏目遺跡・夏目西遺跡・西富田新田遺跡・南大通り線内遺跡・社具路遺跡・西富田本郷遺跡などが密集する西富田遺跡群が形成され、さらにその周辺には諏訪遺跡や離濠遺跡などが展開して盛興する。この西富田遺跡群とその近隣に展開する遺跡は、布留式系甕や把手付大形甕をはじめとする畿内系の影響を強く受けた土器が多く見られる特徴がある。また、本遺跡も隣接する南街道遺跡とともに中期前半より集落が形成され、中流域南部の中心的集落として発展する。そして、この中期には格子目叩きの埴輪を伴うことで有名な公御塚古墳・金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳のいずれも直径60mを測る首長墓級の円墳が当地域に築造され、当地域東側の残丘上には後期にかけて継続的に古墳が形成されるようになる。

後期(6世紀~7世紀前半)になると、中期の中心的集落はそのまま継続するものが多く、周辺の小規模集落もさらに展開する。東側の残丘上には生野山銚子塚古墳と生野山16号墳の前方後円墳が築造されるが、その後これらの残丘上には小円墳を主体とする群集墳が形成される。低地内の集落は7世紀中葉を境に衰退し、かわって沖積低地周辺部の本庄台地東側縁部や残丘西側斜面下の低台地上に移動して、沖積低地を取り囲むように画一的な居住域を形成する。

女堀川中流域周辺の古墳時代遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	備考	番号	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
1	八咫神南遺跡	相河	集落	後	篠崎1995	43	浅見山1遺跡	本庄市	墓	前	本庄市1986
2	反り町遺跡	〃	〃	後	篠崎1995	44	久下東遺跡	〃	集落	前、中、後	増田1985
3	金佐奈遺跡	笠野	〃	後	1992年に発掘調査	45	東谷遺跡	〃	〃	中、後	小久保1978
4	高縄田遺跡	〃	〃	中	恋河内1995	46	大久保山遺跡	〃	〃	後	藤川他1995
5	女池遺跡	〃	〃	後	1995年に発掘調査	47	古川端遺跡	〃	〃	中、後	小久保1978
6	御林下遺跡	〃	墓?	前	1992年に発掘調査	48	村後遺跡	美野町	墓	前、中、後	細田1984
7	生野山遺跡	〃	墓	前	山川1984	49	日の森遺跡	〃	〃	前、後	菅谷1978
8	宮田遺跡	〃	集落	中	恋河内1996	50	樋之口遺跡	〃	集落	中、後	菅谷1976
9	南街道遺跡	〃	〃	中、後	恋河内1996	51	往来北遺跡	上野町	〃	後	丸山1991
10	辻堂遺跡	〃	〃	中、後	本報告、恋河内1996	52	源訪遺跡	本庄市	墓	前、中、後	柿沼1979
11	上真下東遺跡	〃	〃	後	1986年に確認調査	53	今井桑里遺跡	〃	集落	前	(注2)
12	辻ノ内遺跡	〃	〃	後	鈴木他1991	54	地神遺跡	〃	〃	前	(注2)
13	新宮遺跡	〃	〃	中、後	1991年に発掘調査	55	西富田新田遺跡	〃	〃	中	本庄市1976
14	塚島遺跡	〃	〃	前、中、後	鈴木他1991	56	夏目西遺跡	〃	〃	中	(注3)
15	平塚遺跡	〃	〃	中	徳山他1994	57	夏目遺跡	〃	〃	中、後	長谷川1985
16	古井戸南遺跡	〃	〃	中	井上1986	58	二本松遺跡	〃	〃	中	長谷川1983
17	左口遺跡	〃	墓	前、後	徳山他1994	59	兼師遺跡	〃	〃	後	本庄市1976
18	堀向遺跡	〃	集落	前、中	徳山他1995	60	南大通り蔵内遺跡	〃	〃	中、後	増田1987-91
19	藤塚遺跡	〃	〃	前、中	徳山他1995	61	社具路遺跡	〃	〃	前、中、後	長谷川1987
20	柿島遺跡	〃	〃	前、後	徳山他1995	62	西富田本郷遺跡	〃	〃	中、後	本庄市1976
21	共和小学校校庭遺跡	〃	〃	後	恋河内1989	63	雄藩遺跡	〃	〃	中	本庄市1986
22	日延遺跡	〃	〃	前	1991年に発掘調査	64	笠ヶ谷戸遺跡	〃	〃	中	長谷川1979
23	城の内遺跡	〃	〃	中	1991年に発掘調査	65	丸反田遺跡	〃	〃	中	増田1989
24	新屋敷遺跡	〃	〃	中	1989年に発掘調査						
25	東田遺跡	〃	〃	後	1992年に発掘調査	A	鷲山古墳	美野町	古墳	前	坂本他1986
26	浅見境遺跡	〃	〃	後	1986年に発掘調査	B	金鑽神社古墳	〃	円墳	中	坂本他1986
27	浅見境北遺跡	〃	〃	前、中、後	1992年に発掘調査	C	物見塚古墳	美野町	円墳	中	菅谷1984
28	鷲山南遺跡	〃	〃	後	1983年に発掘調査	D	生野山將軍塚古墳	〃	〃	中	柿沼1964
29	宮ヶ谷戸遺跡	美野町	〃	前	1983年に発掘調査	E	生野山鏡子塚古墳	美野町	古墳	後	菅谷1984
30	塚本山遺跡	〃	墓	前	増田1977	F	生野山16号古墳	美野町	〃	後	菅谷1984
31	雷電下遺跡	美野町	集落	前、後	駒宮1979	G	熊谷1号墳	〃	横立貝		美里町1986
32	飯玉東遺跡	〃	墓	前	駒宮1979	H	前山2号墳	本庄市	円墳	中	小久保1978
33	根田遺跡	〃	集落	中	恋河内1990	I	東谷古墳	〃	〃	後	本庄市1986
34	東牧西分遺跡	〃	〃	前、中、後	恋河内1995	J	公御塚古墳	〃	〃	中	坂本他1986
35	今井川越田遺跡	本庄市	〃	後	(注1)	K	四方田古墳	〃	〃	後	増田1989
36	川越田遺跡	美野町	〃	前、中、後	富田・赤熊1985	L	生野山古墳群	美野町	古墳群	中、後	菅谷他1973
37	梅沢遺跡	〃	〃	中、後	富田・赤熊1985	M	塚本山古墳群	〃	〃	中、後	増田1977
38	後張遺跡	〃	〃	前、中、後	立石1982・83	N	東富田古墳群	本庄市	〃	中、後	本庄市1986
39	四方田遺跡	本庄市	〃	前、中、後	増田1989	O	西五十子古墳群	〃	〃	後	本庄市1986
40	山根遺跡	〃	〃	中、後	増田1990	P	落合古墳群	〃	〃	後	菅谷1969
41	下田遺跡	〃	〃	前、中、後	柿沼1979	Q	雷勝寺北裏輪倉遺跡	〃	竪穴	後	橋本他1980
42	七色塚遺跡	〃	〃	前、中、後	増田1987	R	八幡山埴輪倉遺跡	美野町	〃	後	柿沼1961

(注1) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施。調査担当者の磯崎一・井上高明両氏の御教示による。

(注2) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施。調査担当者の岩瀬謙・瀧瀬芳之・岩田明広各氏の御教示による。

(注3) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を実施。調査担当者的中村倉司氏の御教示による。

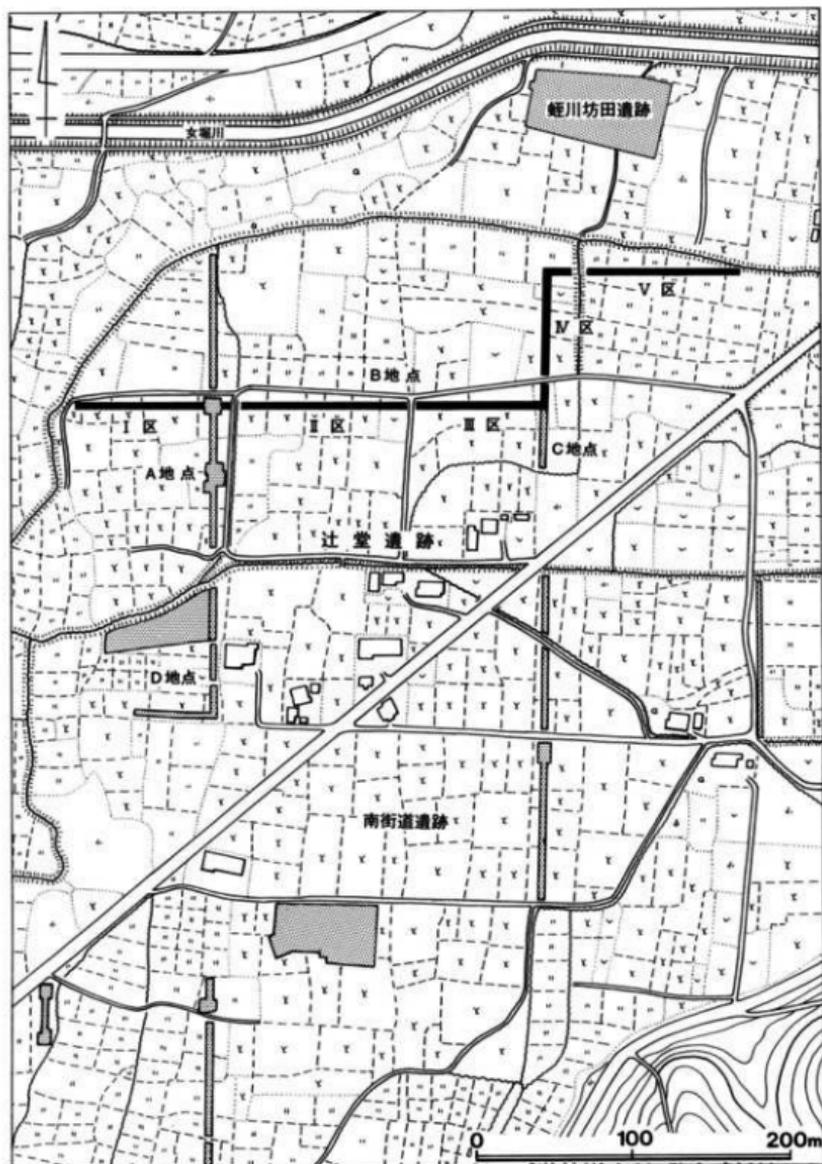
### 第三章 遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字蛭川字辻堂に所在する古墳時代中期～後期を主体とする集落跡である。遺跡は、児玉町の北半部に広がる沖積低地内の女堀川中流域南部の右岸に位置し、標高82mを測る比較的広く平坦で起伏のない微高地上に立地している。本遺跡の南側には国道462号線を挟んで県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴って発掘調査された南街道遺跡(恋河内1996)が隣接しているが、両遺跡は連続する同一遺跡と考えられ、古墳時代中期から後期終末まで継続する女堀川中流域南部の中心的な大規模集落として位置付けられる。これらの遺跡が立地するこの微高地上には、そのほぼ全域にわたって一町四方の連続する条里形地割りの痕跡が認められる。現在までの発掘調査の成果では、この微高地上の条里形地割りが古代に施工された痕跡は認められないが、中世には確実に施工されていたことが、南街道遺跡A地点や周辺遺跡の調査で明らかになっている。

本遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴って平成2年度に発掘調査されたA・C・D地点(恋河内1996)と、本報告のB地点の4地点が現在までに調査されている。いずれも幅数mの水路部分を対象とした小規模な調査で、遺跡にトレンチを十文字に入れたようなものであり、検出された遺構もその一部しか調査できなかったものがほとんどであるため、個々の遺構や集落の具体的な様相は未だ明確ではない。また、本遺跡内では、過去に瓦粘土の採掘が行われており、A地点北側の水田やB地点のⅡ区中央部の畑地は、その採掘によってすでに遺構が破壊されていた。

A～D地点の調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡57軒・掘立柱建物跡2棟・円形溝遺構1基・土塀19基・溝跡26条と小規模な河川跡である。これらの遺構は、掘立柱建物跡や土塀及び溝跡に一部中世以降の時期のものがあるが、大半は古墳時代中期～後期のものである。古墳時代の遺構は、中期前半(5世紀前半)～後期終末(7世紀後半)まで比較的長期間にわたって継続的に形成されており、そのためか遺構の密度はかなり高く、特に住居跡は重複が著しい。

今回調査したB地点は、本遺跡の北側を東西に走る細長い調査区で、遺構は調査区中央部のⅠ区東側からⅢ区に集中し、西端のⅠ区西側と北東側のⅣ区～Ⅴ区では、遺構の密度が極端に低くなっている。B地点で検出された遺構は、住居跡17軒・掘立柱建物跡2棟・土塀10基・溝跡15条と小規模な河川跡である。住居跡は、5世紀前半の和泉期から7世紀後半の真間期にわたるものがあり、その多くは住居跡同志の重複が著しい。遺物は、各時期の住居跡とも比較的少ないが、古墳時代中期の第24号住居跡からは線刻をもつ石製紡錘車が、第26号住居跡からは鉄製鎌が出土している。掘立柱建物跡は、古墳時代後期の所産と推測されるものと中世以降のものであるが、いずれも建物の全容は不明である。土塀は、古墳時代の可能性が高いものが5基と中世以降のものが5基あり、中世の第16号土塀からは古銭が1枚出土している。溝跡では、古墳時代後期と推測されるものが6条あるが、この中で直線的な流路を取る第16号溝跡は水路と考えられるもので、本遺跡が立地する微高地を等高線に沿って横断するように掘削されている。Ⅲ区の第18～20号溝跡は、自然流路と考えられるもので、おそらく氾濫によって形成されたものと推測される。河川跡は、比較的小規模で浅いものであり、恒常的に水が流れていたようなものではなく、一時的に大水が集まるようなものと思われるが、覆土の砂利層中からは古墳時代後期を主体とする土器片が多量に出土している。

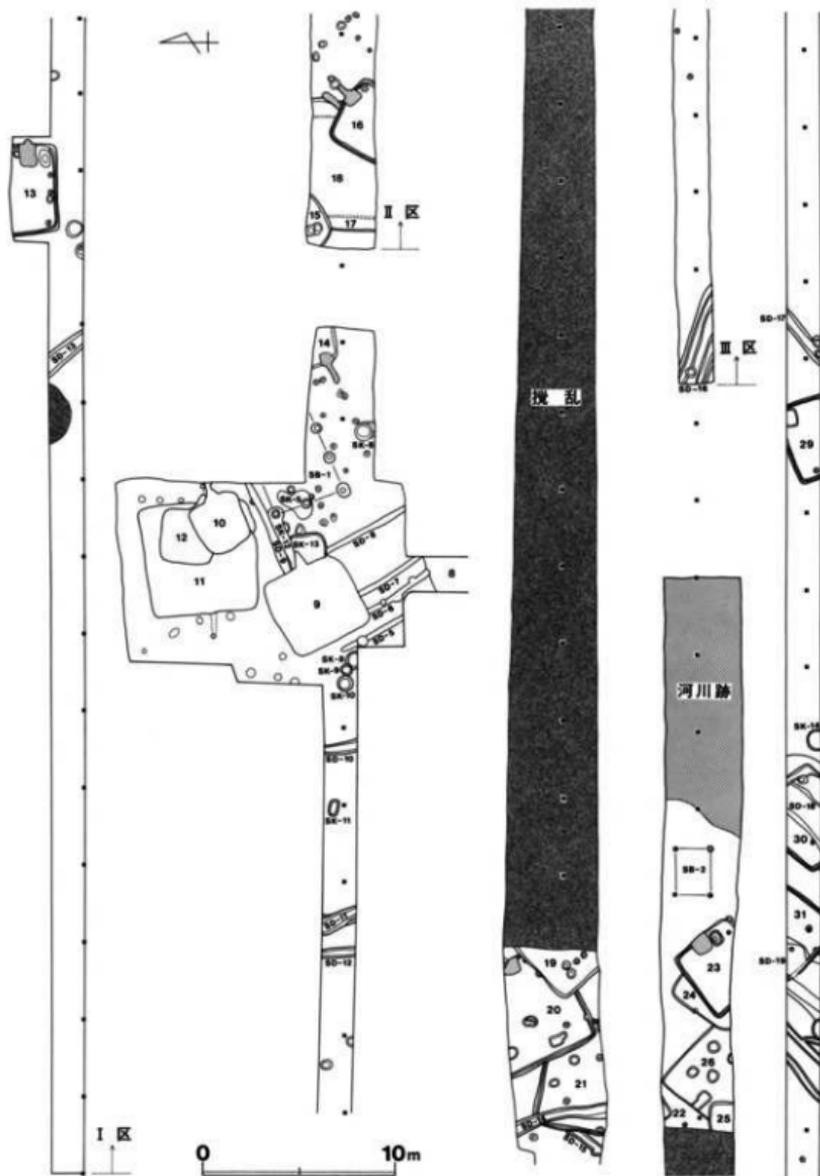


第4図 辻堂遺跡B地点調査位置図

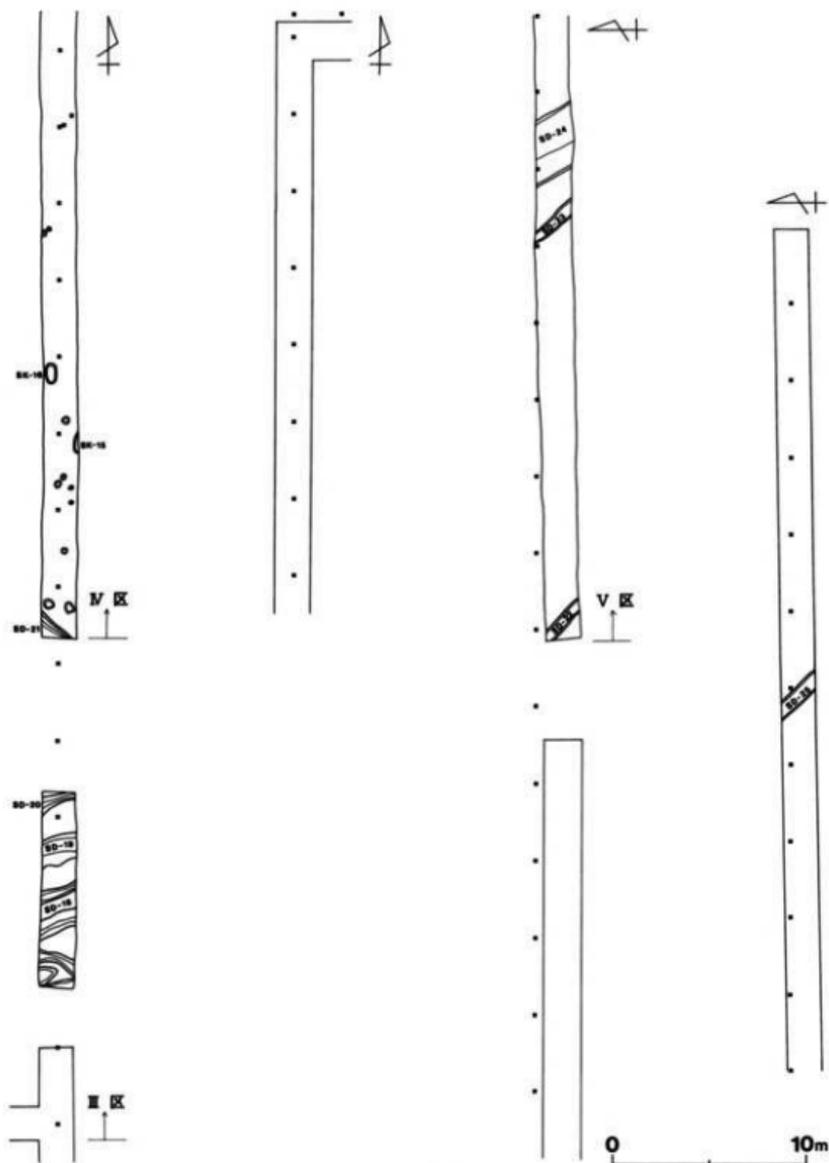


第5图 让堂遗址全体图





第6图 辻堂遺跡B地点I・II・III区全体图



第7图 辻堂遺跡B地点M·V区全体图

## 第IV章 検出された遺構と遺物

### 第1節 竪穴式住居跡

#### 第13号住居跡（第8図、図版2）

調査区西側のI区中央部に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、該期の住居跡に一般的な比較的整った長方形を呈するものと思われ、規模は東西方向4.74m、南北方向は2.52mまで測れる。主軸方位は、N-87°-Eをとる。

壁は、直線的で垂直直みに立ち上がり、確認面からの深さは34cmある。調査区内で検出された住居の各壁下には、幅10cm程度で深さ5cm位のやや狭い壁溝が連続して巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻して比較的平坦に作られている。住居中央部は全体に非常に堅く締まっているが、壁際に近い住居周辺部はやや軟弱である。

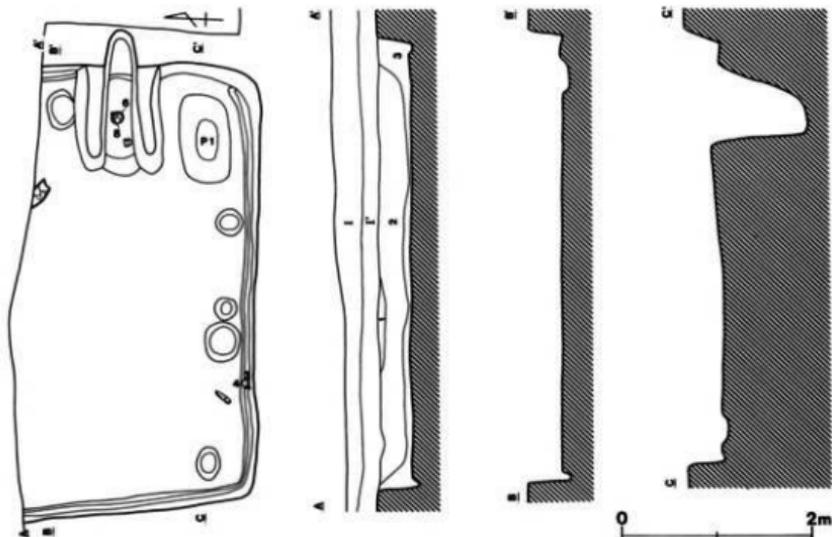
ピットは、カマド北側や住居南側壁際から浅いピットが5箇所検出されているが、それらの性格については不明である。主柱穴は見られない。カマド南側の住居南東コーナー部に位置するP1は、その位置や形態より貯蔵穴とされるものである。平面形はコーナー部の丸みが強い長方形を呈し、床面からの深さは90cmを測る。貯蔵穴内からは何も出土していない。

カマドは、住居東側壁の中央部に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長1.51m・最大幅90cmを測る。袖は、粘性の強いローム土(第6・7層)を住居壁に張り付けて、厚く堅牢に構築している。天井部は、すでに削平されているため不明であるが、その崩壊土はカマド内やカマド周辺にはまったく見られない。燃焼部は、住居壁を掘り込まない比較的幅の狭い形態で、全体に良く焼けている。燃焼面(第3層)は、ほぼ水平をなし、住居床面より高い。中央部には棒状の自然石を使用した支脚が立てられ、その上に坯を2個体重ねて伏せていたようである。煙道部は、その大半がすでに削平されているが、一部住居壁外に延びる部分が若干見られる。

出土遺物は、あまり多くないが、No6とNo8の坯がカマド内の支脚上で重なって出土している。他の土器はすべて覆土中から出土したものである。土器以外では、住居南西コーナー部寄りの壁際床面上より、長さ20cmの棒状の自然石が1個出土している。

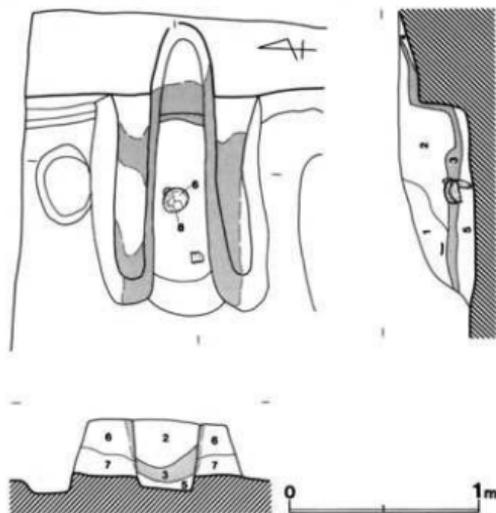
#### 第13号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (17.5cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや長く、緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	片岩粒・赤色粒 外-暗褐色 内-暗橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
2	甕	底部径 (6.6cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は突出し、平底を呈する。	胴部下外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 内外-暗褐色	底部1/2。 覆土中出土。
3	甕	口縁部径 (17.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は比較的短く、緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。



#### 第13号住居跡土層説明

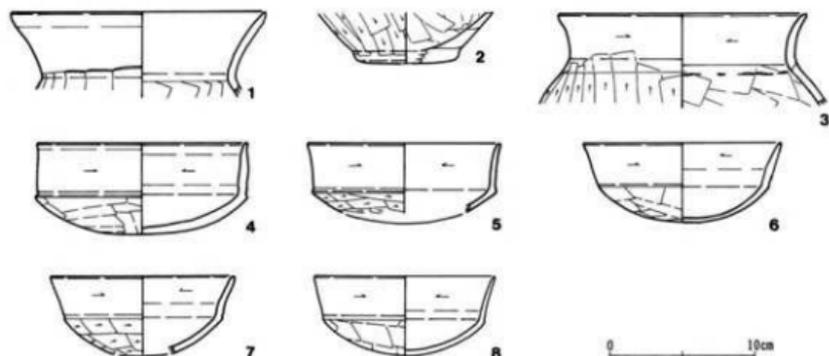
- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



#### 第13号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）  
 第4層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）  
 第5層：黒灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）  
 第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第7層：黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8図 第13号住居跡



第9図 第13号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	坏	口径 14.4 器高 6.3	口縁部は比較的長く直立し、口唇部は若干外傾する。体部はやや深く、丸底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一明橙褐色	約1/2。 覆土中出土。
5	坏	口縁部径 (13.2cm)	口縁部は比較的長く、若干外反する。体部はやや浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
6	坏	口径 13.6 器高 5.5	口縁部は比較的長く、やや外反ぎみに外傾する。体部は深く、底部は丸底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	黒色粒・白色粒 内外一橙褐色	ほぼ完形。 カマド内出土。
7	坏	口径(12.6) 器高(5.6)	口縁部は比較的長く、緩やかに外反する。体部は深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一明橙褐色	1/3。 覆土中出土。
8	坏	口径 12.4 器高 6.5	口縁部は比較的長く、外反ぎみに外傾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一橙褐色	2/3。 カマド内出土。

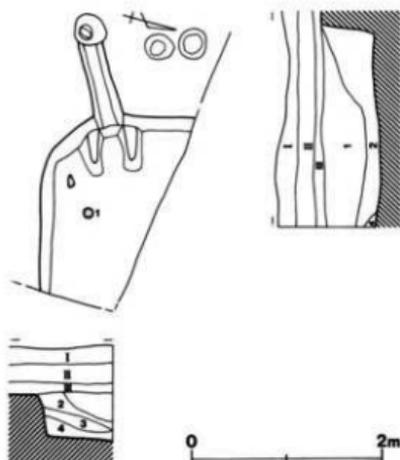
#### 第14号住居跡（第10図、図版3）

調査区西側のI区東端部に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の南西側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は不明であるが、住居コーナー部は丸みが強い形態を呈している。主軸方位は、N-120°-Wをとる。

壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは60cmある。調査区内で検出された住居壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻して作られているが、緩やかな凹凸がある。住居中央部からカマド前面は非常に堅く締まっている。

カマドは、住居西側壁の南西側コーナー部寄りに、壁に対して若干斜めに付設されている。規模は、全長1.42m・最大幅64cmを測り、比較的小規模である。袖は、粘性の強いロームブロックを多量に含む黄褐色土(第6層)を住居壁に直接張り付けて、厚く堅牢に構築している。天井部は、すで

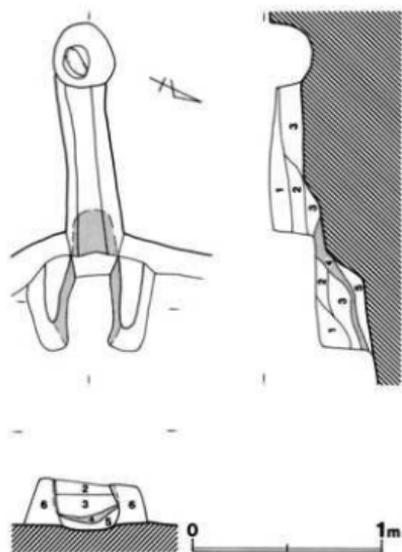


#### 第14号住居跡土層説明

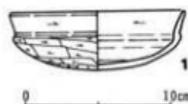
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第14号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第10図 第14号住居跡



第11図 第14号住居跡  
出土遺物

に崩壊しているため不明である。燃焼部は、住居壁を掘り込まない比較的幅の狭い形態で、全体に良く焼けている。燃焼面(第4層)は、住居床面よりやや高く位置し、煙道部に向かってやや傾斜している。煙道部は、燃焼部より一段高く、ほぼ水平に住居壁外に延びているが、その先端部は後世のピットによって切られている。

出土遺物は、比較的少ないが、住居南西側コーナー部付近の床面直上より、No 1の坏と10cm程度のやや偏平な自然石が1個出土している。

第14号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 12.0 器高 4.0	口縁部は比較的短く、直線的に外傾する。体部はやや浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナア。体部外面ケズリ、内面ナア。	白色粒・黒色粒 内外一淡茶褐色	4/5。 床面直上出土。

#### 第15号住居跡(第16図、図版4)

調査区中央部のⅡ区西端部に位置し、重複する第17号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の南側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は不明であるが、住居南側コーナー部はやや丸み強い形態を呈している。主軸方位は不明であるが、住居南東側壁はほぼN-62°-Eを向いている。

壁は、直線的でやや斜めに立ち上がり、確認面からの深さは56cmある。調査区内で検出された住居壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られているが、東に向かってやや傾斜している。調査区内で検出された部分が住居の壁際に近いのか、やや軟弱である。

出土遺物は、鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。

#### 第16号住居跡(第12図、図版5)

調査区中央部のⅡ区西端部に位置し、重複する第17号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の北側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、該期の住居跡に一般的な比較的整った長方形を呈するものと思われ、規模は東西方向3.68m、南北方向は2.70mまで測れる。主軸方位は、N-30°-Eをとる。

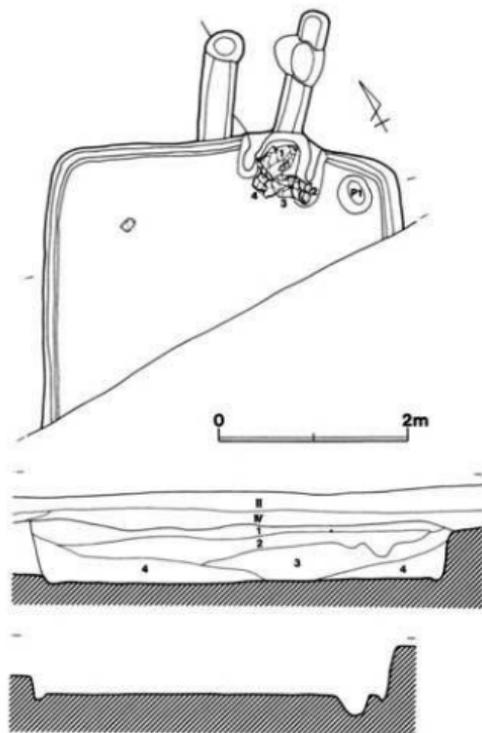
壁は、直線的で若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは66cmある。調査区内で検出された住居壁下には、幅15cm・深さ5cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られている。全体に非常に強く締まっており、床面上には焼土粒子と炭化粒子が顕著に見られる。

ピットは、カマド東側の住居北東コーナー部で1箇所検出されているだけである。P1は、平面

形が40cm×33cmの楕円形に近い形態を呈し、床面からの深さは20cmある。場所的には貯蔵穴の位置であるが、規模が小さく形態も一般的でないことから断定はできない。主柱穴は見られない。

カマドは、住居北側壁の中央やや東側寄りの位置に、壁に対してやや東側に傾いて付設されている。カマド西側の住居北側壁中央部には、住居壁外に延びる旧カマドの煙道部が見られ、本カマドは住居構築当初のものではなく、新しく作り替えられたものであることが解る。規模は、全長2.03m・最大幅90cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む明灰褐色粘質土(第8層)を住居壁に直接張り付けて比較的堅牢に構築している。天井部は、すでに崩壊しているため不明であるが、焚口部に見られるNo 2・3・4の入れ子状に重なった甍は、焚口天井部の補強に使用されていたものと思われる。燃焼部は、住居壁を掘り込まない形態のもので、全面とも非常に良く焼けている。燃焼面は住居床面とはほぼ同一であるが、若干傾斜している。煙道部は、中央部を後世のピットに切られているが、燃焼部より一段高く、住居壁外に約130cm程直線的に延びている。

出土遺物は、カマド内よりカマドで使用された甍(No 1)とカマド焚口天井部の補強に使われた甍



第12図 第16号住居跡

#### 第16号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ロームブロック・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第13図 第16号住居跡カマド

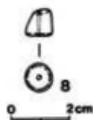
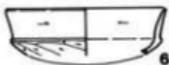
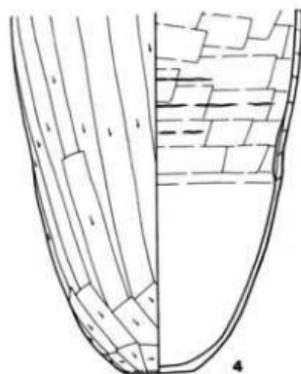
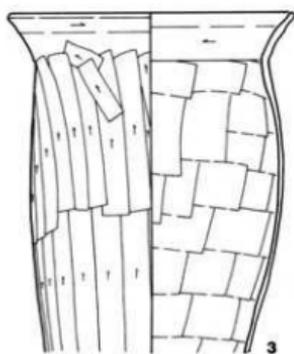
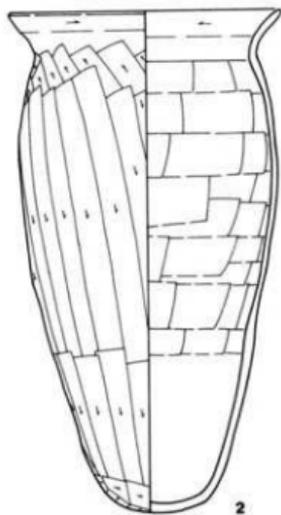
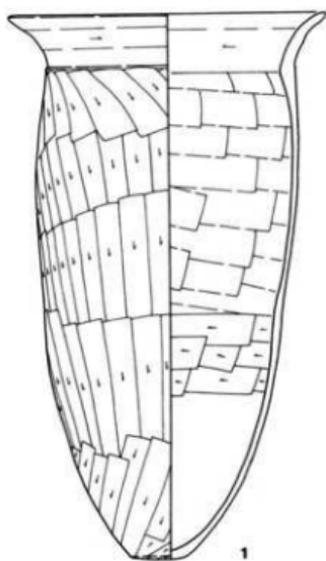
(No 2～4)が出土している。No 5～7の坏は、覆土中より出土した破片である。土器以外では、覆土中より断面が台形に近い形態の土玉 (No 8) が1個出土している。

第16号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：淡灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：淡灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗灰色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：明灰褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第16号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.8 器高 37.6 底径 3.7	粘土組織み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境に段をもつ。胴部は張らず長胴を呈する。底部は小さく不安定な平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のケズリ、内面上半匏ナデ、下半丁寧なナデの後、中位ケズリ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外-淡褐色 内-黒灰褐色	ほぼ完形。 カマド内出土。
2	甕	口縁部径 18.6cm 器高 34.6cm	粘土組織み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず長胴を呈する。底部は不安定で丸底さみである。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のケズリ、内面上半匏ナデ、下半丁寧なナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 片岩粒 内外-明褐色	ほぼ完形。 カマド内出土。
3	甕	口縁部径 19.6cm	粘土組織み上げ成形。口縁部は外反さみに外傾する。胴部は張らず長胴を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のケズリ、内面匏ナデ。	赤色粒・白色粒 片岩粒 内外-明褐色	残存部完形。 カマド内出土。
4	甕	底部径 5.0cm	粘土組織み上げ成形。胴部は張らず、長胴を呈する。底部は小さな平底を呈する。	胴部外面縦方向のケズリ、内面上半匏ナデ、下半丁寧なナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外上半-明褐色 内外下半-淡褐色	残存部はほぼ完形。 カマド内出土。



第14图 第16号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	坏	口縁部径 (11.2cm)	口縁部は短く、緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナテ。体部外面ケズリ、内面ナテ。	白色粒・黒色粒 内外一淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
6	坏	口縁部径 (10.0cm)	口縁部は比較的短く、緩やかに外反する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナテ。体部外面ケズリ、内面ナテ。	赤色粒・白色粒 内外一淡橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
7	坏	口縁部径 (10.0cm)	口縁部は比較的短く、緩やかに外反する。体部は浅く、器内は薄い。	口縁部内外面ヨコナテ。体部外面ケズリ、内面ナテ。	赤色粒・白色粒 内外一淡橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
8	土玉	長さ 0.9 最大幅 0.8	断面は円形を呈す。上下端部とも平坦で、上端面は下端面に比べて小さい。	全面ナテ。穿孔は焼成前で、かなり小さい。	白色粒・黒色粒 外一茶褐色	完形。 覆土中出土。

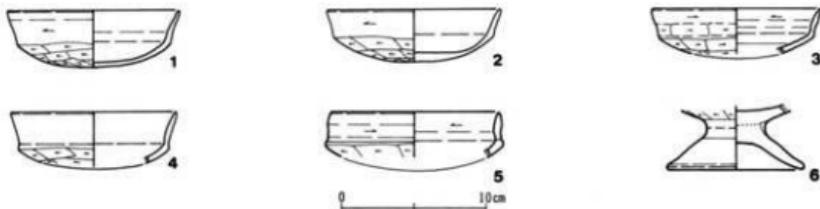
#### 第17号住居跡（第16図、図版4）

調査区中央部のⅡ区西端部に位置し、重複する第15号住居跡と第16号住居跡に切られている。本住居跡の下には第18号住居跡が重複しているが、両住居跡の壁は平行しており、また第18号住居跡の覆土は埋められた形跡が見られることから、本住居跡は第18号住居跡を建て替えたものである可能性が考えられる。調査区内で検出された部分は住居の中央部にあたり、住居の東西両側の壁の一部が分かるだけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

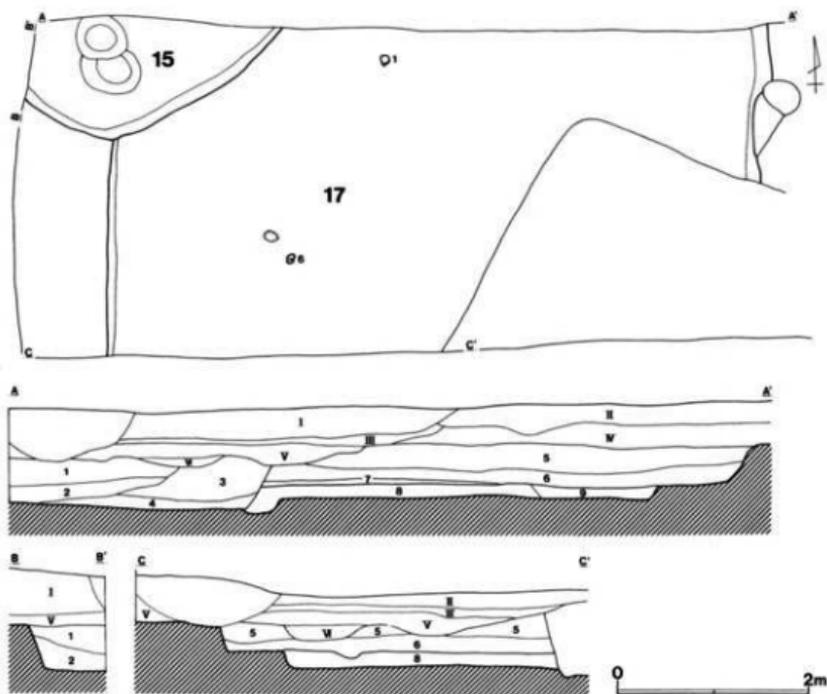
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、規模は東西方向が6.70mを測る。主軸方位は不明であるが、東西両側の壁はほぼN-5°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは56cmある。調査区内で検出された東西両側壁の壁下には壁溝は見られない。床面は、平坦に作られており、全体に堅く締まっている。ピット等の住居内施設はまったく見られない。

出土遺物は、覆土中を主体に土器片が少量出土しただけである。



第15図 第17号住居跡出土遺物



第16図 第15・17号住居跡

**第15・17・18号住居跡土層説明**

<第15号住居跡>

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第17号住居跡>

第5層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗灰色土層（ロームブロック・マンガン塊・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：黒灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

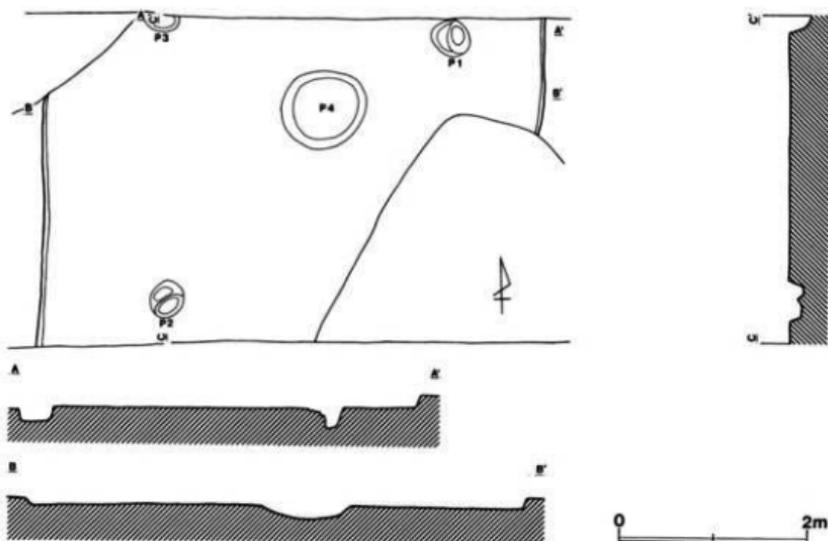
<第18号住居跡>

第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第9層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第17号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径(11.8) 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反し、 口唇部はやや内湾する。体 部は浅く、底部は丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外—淡橙褐色	2/3。 覆土中出土。
2	坏	口径(12.0) 器高 3.6	口縁部は比較的短く、緩や かに外反する。体部は浅く、 底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒・片岩粒 内外—淡橙褐色	1/2。 覆土中出土。
3	坏	口縁部径 (11.4cm)	口縁部は比較的短く、緩や かに外反し、外面下半は若 干窪む。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデの後、 外面匏ナデ。体部外面ケズ リ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 外—淡茶褐色 内—淡褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
4	坏	口縁部径 (11.4cm)	口縁部は緩やかに外反する。 体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外—明橙褐色 内—淡橙褐色	口縁部1/5。 覆土中出土。
5	坏	口縁部径 (11.5cm)	口縁部は直立し、中位は肥 厚する。体部は浅く、器内は 厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—暗茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
6	高坏	脚端部径 (9.4cm)	脚部貼り付け。脚部は低く、 直線的に大きく開く。	体部外面ケズリ、内面ナデ。 脚部内外面ナデ。	赤色粒・黒色粒 内外—淡橙褐色	2/3。 床面付近出土。



第17図 第18号住居跡

### 第18号住居跡 (第17図)

調査区中央部のⅡ区西端部に位置し、重複する第15号住居跡・第16号住居跡・第17号住居跡に切られている。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は東西方向が5.14mを測る。主軸方位は不明であるが、東西両側の壁は重複する第17号住居跡と同じくほぼN-5°-Eを向いている。本住居跡の覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗黄褐色土(第8・9層)を主体にしており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

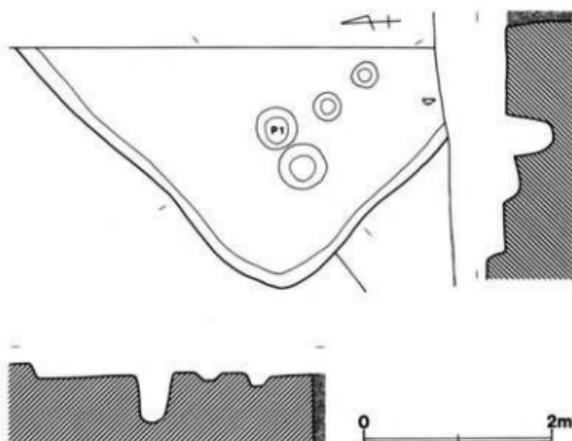
壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、重複する第17号住居跡の床面からの深さは10cm前後ある。調査区内で検出された東西両側壁の壁下には壁溝は見られない。床面は、平坦に作られており、全体に堅く締まっている。

ピットは、住居内から4箇所検出されている。P1~P3は、その配置から主柱穴の可能性が考えられるものであるが、いずれも床面からの深さが15cm程度で比較的浅い。このうちのP1とP2は2段に掘り込まれている。P4は、住居中央部に位置する土壇状の形態のもので、平面形は90cm×80cmの楕円形に近い。床面からの深さは12cmあり、底面は丸みをもっている。覆土は、ローム粒子と焼土粒子を微量含む暗褐色土の単一土層で、覆土中からは何も出土していない。

出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。

### 第19号住居跡 (第18図、図版6)

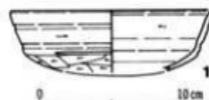
調査区中央部のⅡ区西側に位置し、重複する第20号住居跡と第21号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居の西側だけであり、また住居東側は近年の瓦粘土の採掘による攪乱ですでに破壊されているため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、あまり良好とは言えない。



第18図 第19号住居跡

平面形は不明であるが、住居西側コーナー部はやや丸みの強い形態を呈している。主軸方位も不明であるが、住居北西側壁はN-50°-Eを向いている。

壁は、住居北西側と南西側の両壁とも緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面か



第19図 第19号住居跡  
出土遺物

らの深さは16cmある。調査区内で検出された両壁の壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られているが、全体的に軟弱である。

ピットは、住居内より4箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはP1だけである。P1は、その位置から主柱穴と考えられ、直径42cmの円形を呈し、床面からの深さは50cmを測る。

出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が少量しただけである。

第19号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径 (13.8cm)	口縁部は直線的に外傾し、沈線による段をもつ。口唇部内面は若干窪む。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・黒色粒 白色粒 内外一橙褐色	1/2。 覆土中出土。

### 第20号住居跡（第20図、図版7）

調査区中央部のⅡ区西側に位置し、重複する第19号住居跡に切られ、第21号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は比較的良好であるが、住居東側コーナー部は近年の瓦粘土の探掘により破壊されている。

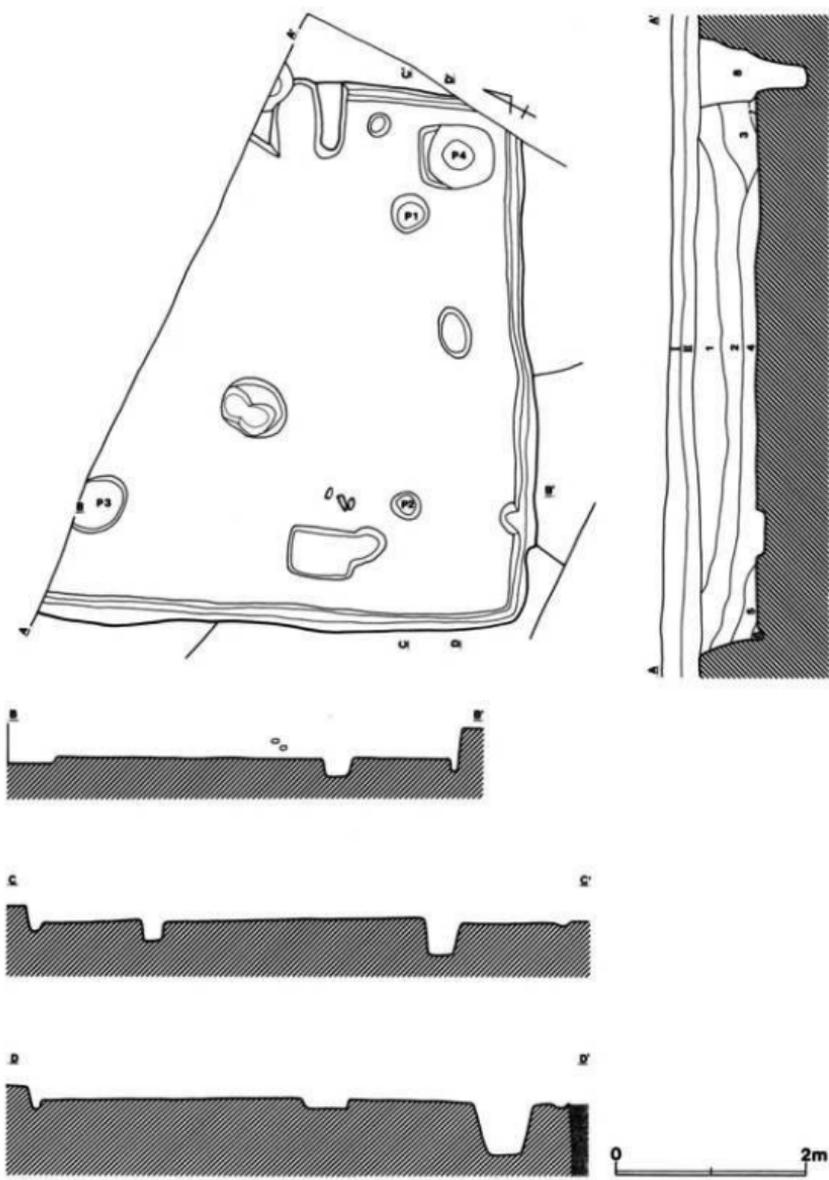
平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われ、規模は南西～北東方向5.72m、南東から北西方向は4.98mまで測れる。主軸方位は、N-62°-Eをとる。

壁は、直線的で垂直直みに立ち上がり、確認面からの深さは北側調査区壁で最高66cmある。調査区内で検出された住居の各壁下には、幅15cm～20cm程度で深さ5cm～10cm位の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻して比較的平坦に作られている。住居中央部は堅く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。

ピットは、住居内より比較的多く検出されているが、深さが5cm～10cmの浅いものが多い。P1とP2は、その位置から主柱穴と考えられるものである。直径30cm～40cmの円形を呈し、深さは38cmと20cmあり、他のピットに比べて深くなっている。P3は、位置的には主柱穴と関連する可能性もあるが、P1やP2と形態や深さが極端に異なっているため不明である。P4は、その位置や形態よりいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。平面形は76cm×66cmの長方形ぎみの形態を呈している。深さは53cmあるが、2段に深くなっている。貯蔵穴内からは何も出土していない。

カマドは、住居北東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長82cm・幅は97cmまで測れる。袖は、左側袖の一部をピットによって切られているが、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第1層)を住居の壁に直接貼り付けて厚く堅牢に構築している。燃焼部は、住居壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けて赤色化している。燃焼面は、住居の床面とはほぼ同一で水平をなしている。天井部や煙道部はすでに削平されているため不明である。

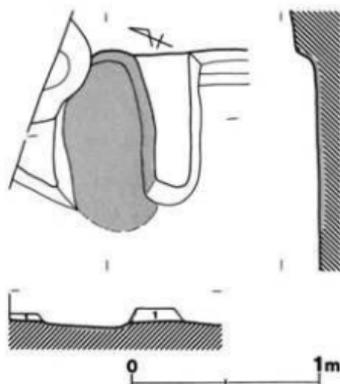
出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土している。土器以外では、P2の北側で床面より10cm程度浮いた状態で、棒状の自然石が3個まとまって出土している。



第20図 第20号住居跡

### 第20号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）  
 第7層：暗黄褐色土層（カマド袖。カマド第1層。）  
 第8層：暗茶褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第21図 第20号住居跡カマド

### 第20号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第22図 第20号住居跡出土遺物

### 第20号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小形甕	口縁部径 (13.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、中位に段をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒 内外一暗茶褐色	1/4。 覆土中出土。
2	坏	口縁部径 (14.4cm)	口縁部は直線的に外傾し、中位に沈線による段をもつ。底部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	白色粒 内外一茶褐色	口縁部1/5。 覆土中出土。
3	坏	口径(13.8) 器高 4.5	口縁部はやや短く、直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡橙褐色	1/4。 覆土中出土。

### 第21号住居跡（第23図、図版8）

調査区中央部のⅡ区西側に位置し、重複する第20号住居跡に住居の北東側を、第14号溝跡と第15号溝跡に住居西側の一部を切られている。調査区内で検出されたのは、住居の北側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向5.85m、南北方向は3.85mまで測れ、主軸方位は、N-103°-Eをとる。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高52cmある。調査区内で検出された住居の各壁下には、幅20cm前後・深さ10cm前後の壁溝が巡っているが、住居東側壁のカマド下にも見られる。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻して比較的平坦に作られているが、住居東側に向かって若干傾斜している。住居中央部は強く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。

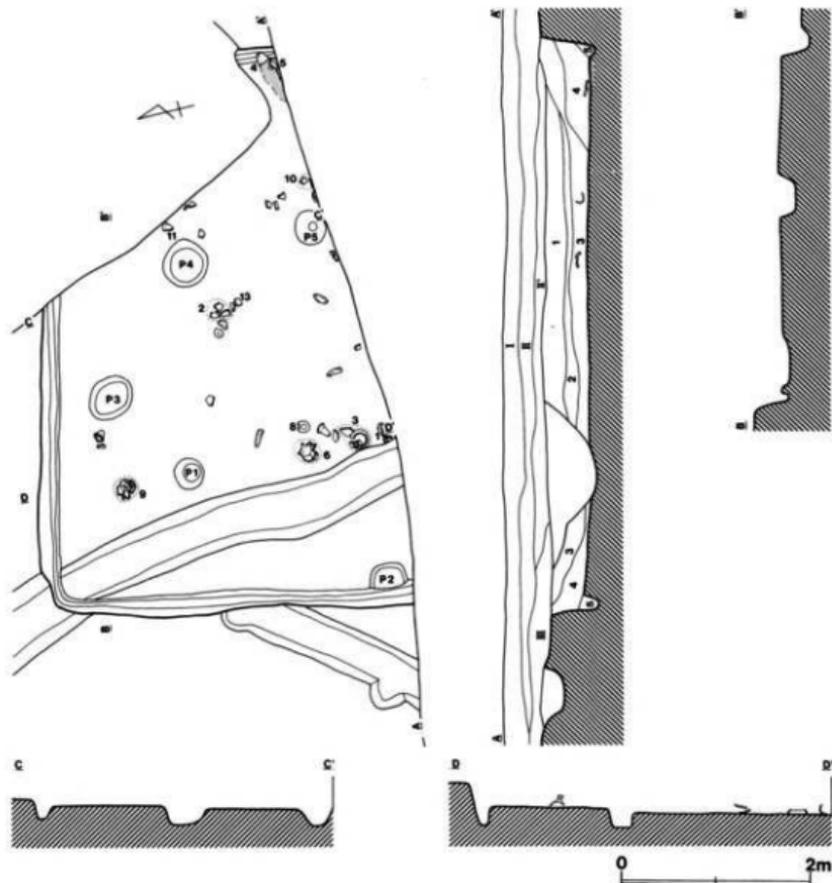
ピットは、住居内より5箇所検出されている。P1は、位置的に主柱穴の可能性が考えられるもので、直径30cmの円形を呈し、深さは21cmある。この他は、直径30cm～50cmの円形を呈し、深さは20cm前後のものであるが、いずれも本住居跡に伴うものか不明である。

カマドは、その形状を止めていないため不明であるが、住居東側壁際の床面の一部に非常に良く焼けて赤色化している部分が見られ、また周辺の床面上にはカマド崩壊土の一部と推測されるロームブロックを含む灰色粘土ブロックが散在していたことから、本来はそこにカマドが付設されていたものと思われる。カマド本体は、周辺に散在していた灰色粘土によって構築されていたものと推測される。住居壁面には焼けた痕跡が見られないことから、おそらく焼面は煙道部に向かって傾斜していたものと思われる。

出土遺物は、床面上や覆土中より比較的多くの土器が出土している。土器以外では、住居中央部の覆土中より棒状の自然石が3個離れて出土している。

第21号住居跡出土遺物観察表

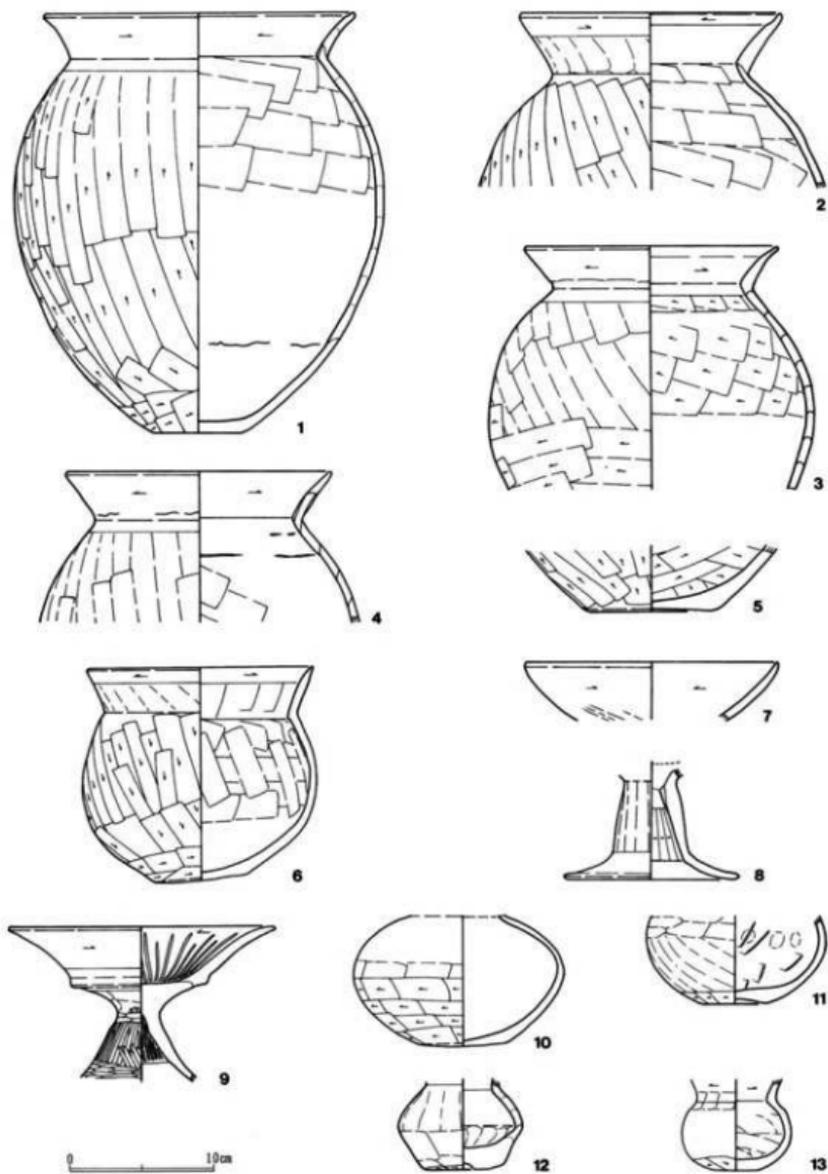
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(21.2) 器高(9.1) 底径 6.0	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面は若干窪む。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出せず平底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面上半匳ナデ下半ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒  内外-淡茶褐色	2/3。 口縁部と胴部は接合しない。 器形は図上による復元。
2	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面は若干窪む。胴部は強く張る。	口縁部外面匳ナデの後上半ヨコナデ、内面ナデの後下半ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面匳ナデ。	片岩粒・白色粒  内外-淡茶褐色	1/3。  床面直上出土。
3	甕	口縁部径 17.4cm	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	1/2。胴部外面に黒灰あり。 床面直上出土。
4	甕	口縁部径 18.2cm	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面匳ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外-淡灰褐色 内-暗灰褐色	1/2。  カマド内。



第23図 第21号住居跡

**第21号住居跡土層説明**

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第24图 第21号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	甕	底部径 (8.2cm)	粘土経積み上げ成形。底部はやや中央部が窪む平底を呈する。	胴部下平内外面ケズリ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外—淡茶褐色	1/3。 カマド内。
6	小形甕	口径(15.4) 器高 14.8 底径 6.2	粘土経積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや張り、底部は平底。	口縁部内外面寛ナデの後ヨコナデ、胴部外面ナデの後ケズリ、内面寛ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外—茶褐色	3/4。 床面直上出土。
7	高 坏	口縁部径 (17.4cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。	口縁部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 外—淡茶褐色 内—暗褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
8	高 坏	脚 端 部 径 12.0cm	粘土経積み上げ成形。脚柱部は短く膨らみをもつ。脚端部は大きく外反する。	脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外—淡茶褐色	脚部のみ。 床面付近出土。
9	高 坏	口縁部径 18.2cm	粘土経積み上げ成形。口縁部は強く外反しながら開く。脚部は柱状をなせず、緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。坏底部内外面ナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面シボリの後下半ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外—暗茶褐色	残存部完形。 口縁部内面に放射状暗文。 床面直上出土。
10	小形甕	底部径 6.0cm	粘土経積み上げ成形。胴部は強く張り偏平をなす。底部は平底を呈する。	胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外—淡茶褐色	3/4。 覆土中出土。
11	小形甕	底部径 4.3cm	粘土経積み上げ成形。胴部は強く張り、底部は中央部が窪む平底を呈する。	胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外—茶褐色	1/2。 床面付近出土。
12	小形丸底甕	底部径 5.6cm	粘土経積み上げ成形。胴部は張り。底部は厚く中央部に窪みをもつ平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面上半ナデ、下半指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外—淡茶褐色	1/2。 覆土中出土。
13	小形丸底甕	底部径 3.0cm	粘土経積み上げ成形。胴部は張り、底部は不安定な平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外—淡茶褐色	2/3。 床面付近出土。

## 第22号住居跡（第28図、図版 8）

調査区中央部のⅡ区東側に位置し、南側に近接して第25号住居跡と第26号住居跡がある。調査区内で検出されたのは、住居跡のごく一部分だけであるため、厳密には住居跡と判断するには困難であるが、底面や壁及び覆土の状況から住居跡の一部の可能性が高いと思われるものである。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られ、壁際のためかやや軟弱である。覆土は、ローム粒子を微量に含む暗褐色土である。出土遺物がないため、時期は不明である。

### 第23号住居跡（第25図、図版9）

調査区中央部のⅡ区東側に位置し、重複する第24号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居の北側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好な方である。

平面形は、比較的整った方形を呈すると思われるが、住居南東側壁はやや張るようである。規模は、南西～北東方向3.87m・北西～南東方向3.68mを測り、主軸方位は、N-56°-Eをとる。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmある。調査区内で検出された各壁のうち、南西側壁から北西側壁と北東側壁のカマド北側にかけて、幅10cm～15cmで深さ5cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻して作られているが、全体に細かな凹凸が見られる。住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。

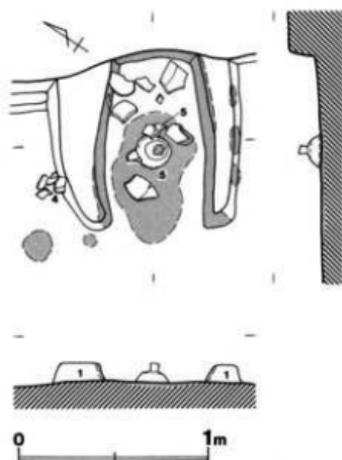
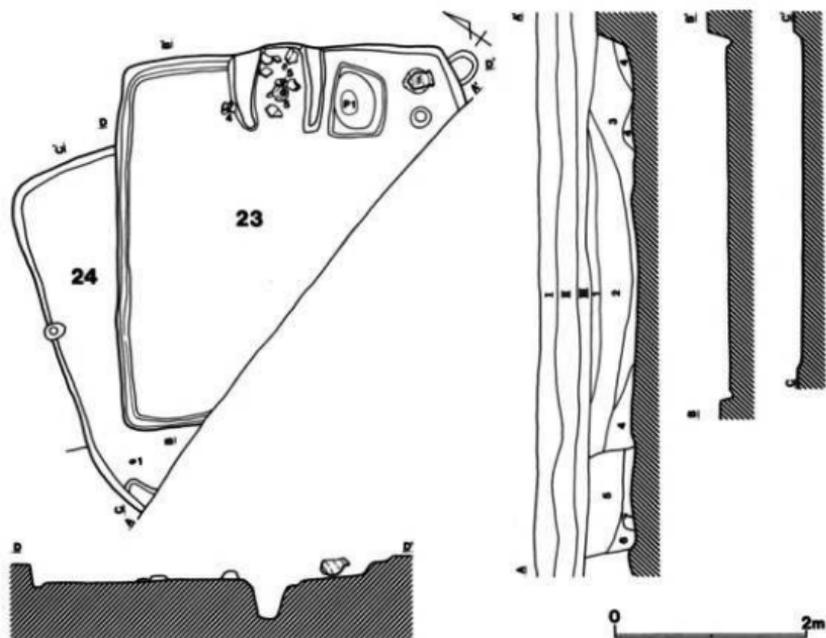
ピットは、カマド南東側の住居東側コーナー付近で2箇所検出されている。P1は、貯蔵穴とされるものである。形態は2段に掘り込まれており、床面から深さ5cm程度までは75cm×56cmの長方形ぎみの平面形を呈するが、その下は楕円形の形態である。床面からの深さは50cmあり、中からは何も出土しなかった。貯蔵穴南東側に位置する小ピットは、直径20cmの円形を呈し、深さ5cmの浅いもので、その性格は不明である。

カマドは、住居北東側壁の中央部に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長94cm・幅100cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土（第1層）を住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず内法が比較的広い形態で、全面良く焼けている。燃焼面は、住居の床面とほぼ同一で水平をなし、中央部に支脚に転用されたNo5の高坏が伏せて据えられている。天井部と煙道部はすでに削平されているため不明である。

出土遺物は、カマド内やその周辺の床面上より土器が出土している。

第23号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 17.0 器高 25.4 底径 8.4	粘土細積み上げ成形。口縁部は比較的短く直線的に外傾し、口唇部は強く外側に向く。胴部は強く張り、底部は突出する平底を呈する。	口縁部内外面寛ナデの後ヨコナデ。胴部外面上半寛ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面上半寛ナデ、下半丁寧なナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒  内外～淡茶褐色	1/2。 外面黒斑あり。  床面付近出土。
2	甕	残存高 7.2cm	粘土細積み上げ成形。底部は丸底を呈する。	胴部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 外～暗茶褐色 内～淡褐色	底部のみ。 外面埋付着。 覆土中出土。
3	碗	口縁部径 (14.0cm)	口縁部は短く外反ぎみに外傾する。体部はやや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外～明茶褐色 内～黒褐色	口縁部1/5。  覆土中出土。
4	碗	口径(12.4) 器高 7.3	口縁部は短く外反ぎみに外傾する。体部は深くやや張り、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。内面寛ナデ。	片岩粒・赤色粒 外～明褐色 内～淡褐色	1/2。  床面直上出土。



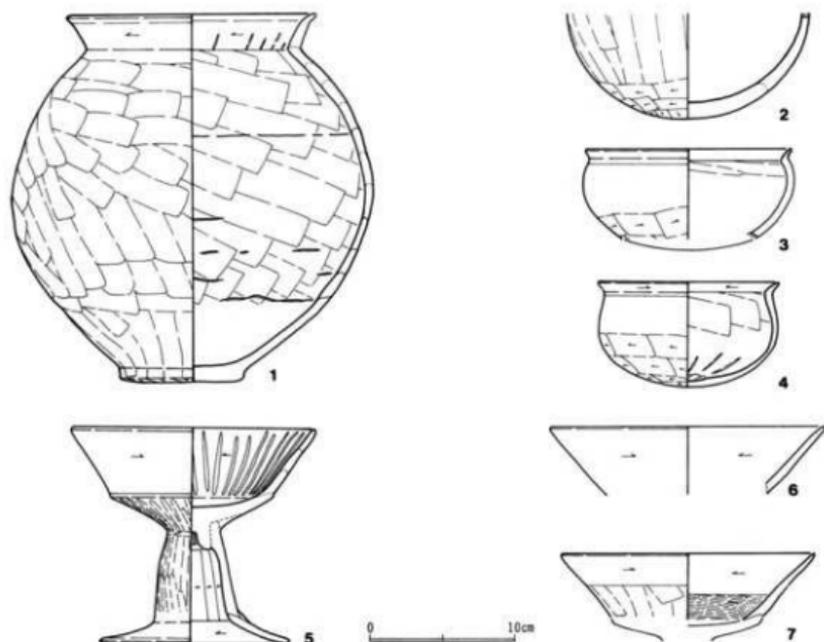
第25図 第23・24号住居跡

#### 第23・24号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第24号住居跡カマド

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第26図 第23号住居跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法的特徴	調整手法的特徴	胎土・色調	備考
5	高坏	口縁部径 16.8cm 器高 15.0cm	粘土経積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開き、口唇部は若干内湾する。脚部は比較的短く、脚柱部は太く膨らむ。脚端部は緩やかに外反しながら開く。	口縁部内外面ヨコナアの後面に放射状暗文を施す。坏部及び脚柱部外面ケズリの後ナデもしくはミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒  内外—淡橙褐色	坏部定形、脚部3/4。  カマド内出土（転用支脚）。
6	高坏	口縁部径 (18.8cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 内外—淡橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
7	高坏	口縁部径 (17.4cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。	口縁部外面ケズリの後ナデ、内面ハケの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外—淡橙褐色	口縁部1/3。 覆土中出土。

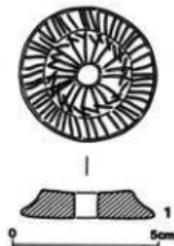
#### 第24号住居跡（第25図、図版9）

調査区中央部のⅡ区東側に位置する。重複する第26号住居跡を切っているが、第23号住居跡によって住居跡の大半を切られているため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、検出された部分から推測すると、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、南西～北東方向は3.68m、南東～北西方向は1.14mまで測れる。主軸方位は不明であるが、住居北西側壁はN-35°-Eを向いている。

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは、住居北側は15cm程度であるが、比較的遺存状態の良い調査区南側の土層断面では最大で40cmある。住居西側コーナー部壁下の一部には幅20cm・深さ10程度の壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第7層)埋め戻してほぼ水平に作られており、全体に良く締まっている。ピット等の施設は、まったく検出されなかった。

出土遺物は、住居西側コーナー部付近の床面上より放射状の線刻をもつ完形の石製紡錘車(No 1)が1個出土しただけである。



第27図 第24号住居跡出土遺物

#### 第24号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	石製紡錘車	最大径 4.6 高さ 1.0 重量 34g	高さは低く偏平で、側面は緩やかに湾曲している。	全面丁寧な研磨。上面と側面に細かな放射状の線刻を施す。	蛇紋岩	完形。 床面直上出土。

#### 第25号住居跡 (第28図、図版10)

調査区中央部のⅡ区東側に位置し、重複する第26号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居の北側の一部であり、また住居の西側を近年の瓦粘土の採掘による攪乱ですでに破壊されているため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は不明であるが、検出された壁やコーナー部より見て比較的整った形態を呈するものと思われる。主軸方位も不明であるが、住居北側壁はN-89°-Eを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。調査区内で検出された各壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第2層)を埋め戻してほぼ平坦に作っており、全体に堅く締まっている。ピット等の施設は、まったく検出されなかった。

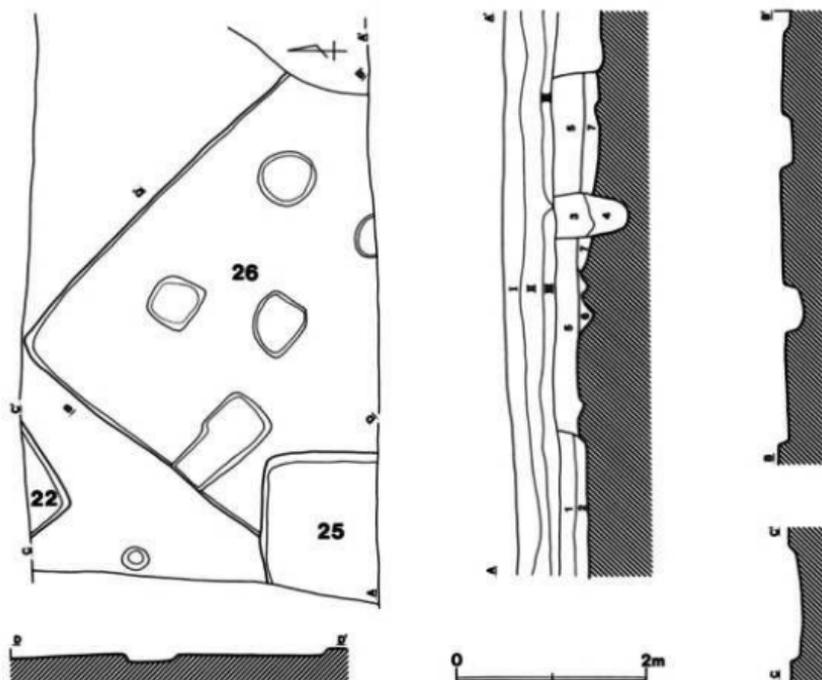
出土遺物は、鬼高式土器の破片が覆土中より数片出土しただけである。

#### 第26号住居跡 (第28図、図版10)

調査区中央部のⅡ区東側に位置し、北西側には第22号住居跡が近接している。重複する第24号住居跡に住居東側を、第25号住居跡に住居西側を切られている。調査区内で検出されたのは、住居の北側半分だけであるため本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向は4.38mまで、北東～南西方向は3.54mまで測れる。主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-39°-Eを向いている。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは北側で10cm前後、南側で25cm程度ある。調査区内で検出された各壁下には、壁溝はまったく見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗



第28図 第22・25・26号住居跡

**第25・26号住居跡土層説明**

<第25号住居跡>

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<ビット>

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

<第26号住居跡>

第5層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

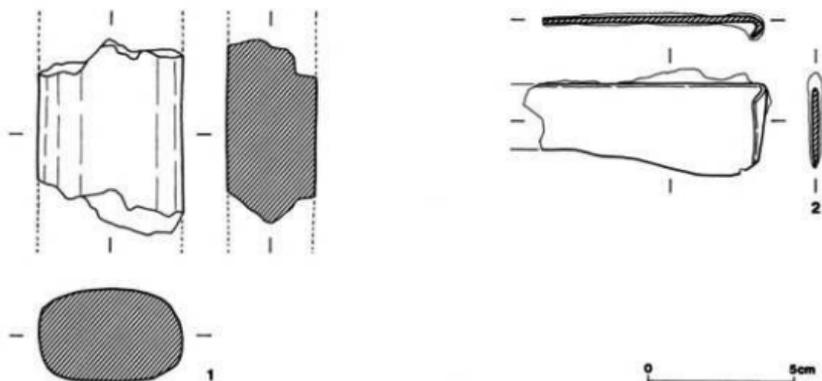
第6層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

黄褐色土(第7層)を一部埋め戻してほぼ平坦に作っており、全体に堅く締まっている。

ピットは、住居内より5箇所検出されているが、これらはいずれも本住居跡に伴うものではなく、住居埋没後に掘削されたものである。

出土遺物は、覆土中より和泉式土器と鬼高式土器の破片が少量混在して出土している。土器以外では、断面が扁平な棒状の土製品の破片(No1)と鉄製鎌(No2)がある。土製品は、カマド支脚の可能性が考えられるものであるが、覆土中からの出土であり、本住居跡に伴うものではなく混入品であろう。鉄製鎌は、住居中央部南側の床面付近から出土している。



第29図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土製品	残存長 6.7 幅 5.7 厚さ 3.1	断面は幅広の楕円形に近い形態を呈する。側縁は直線的で平行する。	表面は全面ナデ。	赤色粒・白色粒 外一茶褐色	両端欠失。 カマド支脚か。 覆土中出土。
2	鉄製鎌	残存長 8.4 最大幅 3.2	背部は直線的で、基部は湾曲ぎみに短く内側に屈曲する。刃部は薄く捲り減って先端に向かって幅が狭くなる。錆は浸透し、地金内部に及んでいる。			先端部欠失。 床面付近出土。

### 第29号住居跡 (第30図、図版10)

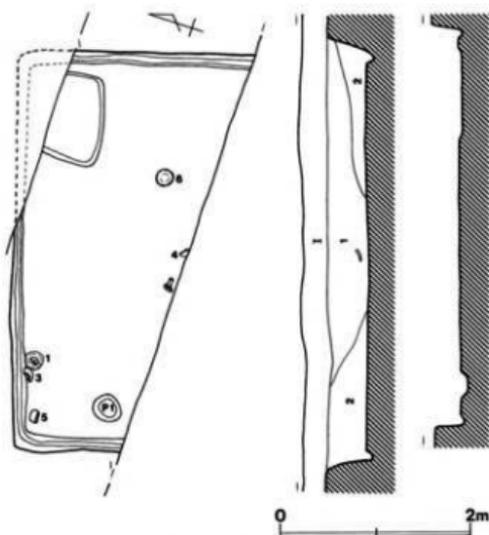
調査区中央部のⅢ区東側に位置する。調査区内で検出されたのは、住居の北側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向4.16m・南北方向は1.88mまで測れる。主軸方位は不明であるが、住居北側壁はN-72°-Eを向いている。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは48cmある。調査区内で検出された

東西両側壁と北側壁の壁下には、幅10cm前後・深さ5cm程度の壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られている。住居中央部は堅く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。住居北東側コーナー部には、規模が大きく長方形ぎみの浅い掘り込みがある。

ピットは、西側壁際で1箇所検出されている。直径30cm程度の円形を呈し、床面からの深さは5

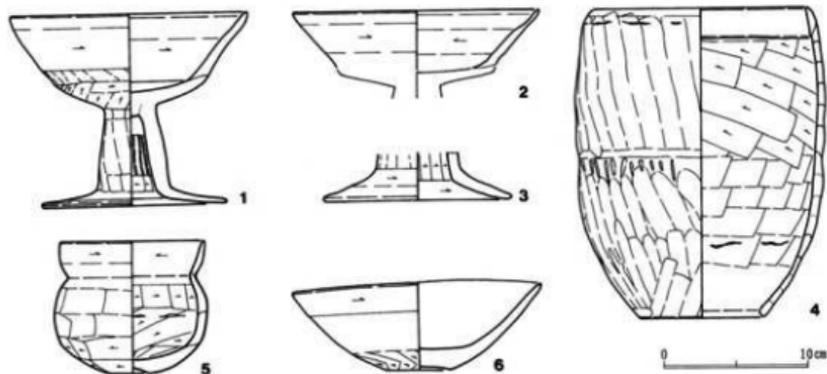


第30図 第29号住居跡

#### 第29号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（小石を多量に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（小石を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第31図 第29号住居跡出土遺物

cmと浅いもので、その性格は不明である。

出土遺物は、住居中央部の床面上より甌(No4)や椀(No6)が、北西側コーナ一部壁際の床面上から高坏(No1・3)・小形広口壺(No5)が出土している。

第29号住居跡出土遺物観形表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口縁部径 16.4cm 器高 13.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開き、口唇部はやや内湾する。脚柱部は短く、脚端部は直線的に低く横に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面シボリの後下半ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡茶褐色	ほぼ完形。 床面直上出土。
2	高坏	口縁部径 (17.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外一茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
3	高坏	脚端部径 (13.0cm)	粘土紐積み上げ成形。脚端部は直線的に開く。	脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外一橙褐色	脚端部1/2。 床面直上出土。
4	甌	口径(14.6) 器高 21.3 底径 8.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は胴部からそのままやや内湾する。胴部は張らない。	外面ナデ。口縁部内面ナデ、胴部内面鈍ナデの後上半ケズリ。	赤色粒・白色粒 小石 内外一明橙褐色	1/3。 床面直上出土。
5	小形広口壺	口径(10.0) 器高 9.1 底径 2.7	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。胴部はやや張り、底部は中央部が窪む小さな平底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ケズリ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一橙褐色	3/4。 床面直上出土。
6	椀	口径 17.2 器高 6.1 底径 4.3	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。底部は中央部が窪む平底を呈す。	口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡橙褐色	完形。 床面直上出土。

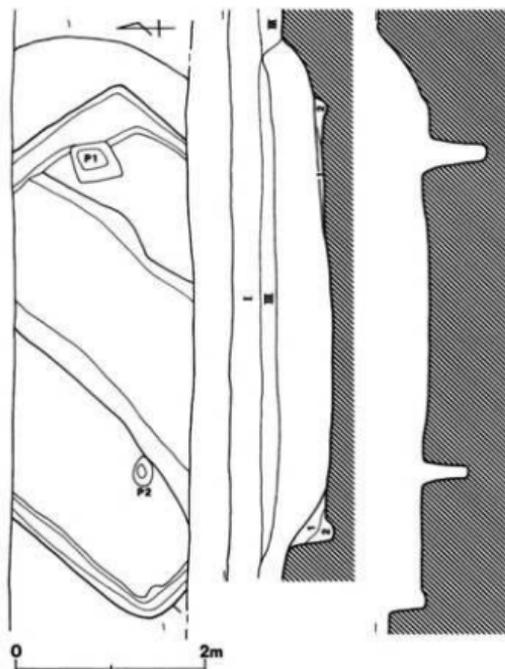
### 第30号住居跡(第32図、図版11)

調査区中央部のⅢ区中央付近に位置し、西側には第31号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の中央部から東西両側のコーナ一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。また、住居跡の大半を第18号溝跡によって切られているため、遺存状態は極めて悪い。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形を呈するものと思われる。規模は、南西～北東方向4.30m、南東～北西方向4.12mを測る。主軸方位は不明であるが、住居北東側壁はN-39°-Eを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、幅20cm前後・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、北東側壁下の壁溝は他に比べて幅が広がっている。床面は、その中央部を第18号溝跡に切られているが、比較的平坦に作られており、全体に堅く締まっている。

ピットは、住居内より2箇所検出されているが、東側の長方形を呈するP1は本住居跡に伴うものではなく、住居埋没後に掘削されたものである。P2は、30cm×20cmの楕円形を呈し、床面からの深さは46cmある。位置的には本住居跡の主柱穴の可能性もあるが明確ではない。



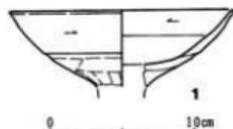
第32図 第30号住居跡

出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片がごく少量出土しただけである。No 1 の高坏の破片も覆土中から出土したものであり、本住居跡に伴うものか不明である。

#### 第30号住居後土層説明

第1層：暗灰色土層（ロームブロック・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第33図 第30号住居跡出土遺物

#### 第30号住居跡出土遺物観察表

№	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口縁部径 (15.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は若干外側に向く。	口縁部内外面ナデの後ヨコナデ。坏部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	坏部1/4。 覆土中出土。

#### 第31号住居跡（第35図、図版11）

調査区中央部のⅢ区中央付近に位置し、東側には第31号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。また、住居跡の西側半部分を第19号溝跡によって切られているため、遺存状態は極めて悪い。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向3.98m・北東～南西方向は3.70mまで測れる。主軸方位は不明であるが、住居の南東側壁はN-38°-Eを向いている。

壁は、直線的で垂直直みに立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。調査区内で検出された住居南西側と南東側の各壁下には、幅20cm弱・床面からの深さ5cm～10cmの壁溝が見られる。床面は、

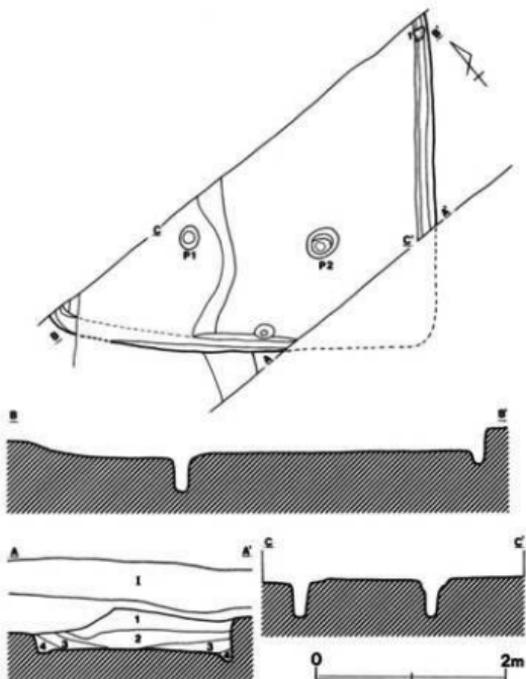
ロームブロックを多量に含む黄褐色土を埋め戻してほぼ平坦に作られており、全体的に堅く締まっている。

ピットは、3箇所検出されている。P1とP2は、その位置から主柱穴の可能性が高いもので、床面からの深さはいずれも40cm程度ある。住居南西側壁際に位置するものは、直径18cm×15cmの楕円形を呈し、深さ15cmの小規模なもので、その性格は不明である。

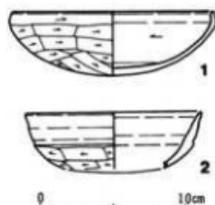
出土遺物は、覆土中より鬼高式土器を主体とする破片が少量出土している。No1の口縁部が内屈する坏は、住居南東側壁際の床面上より出土した破片である。

第31号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径(13.8) 器高 4.4	体部はやや深く、内湾しながら開く。口縁部は短く内屈する。底部は丸底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外一淡茶褐色	1/3。 床面直上出土。
2	坏	口縁部径 (12.0cm)	口縁部は直線的に外傾する。体部は浅く、器内は薄くなっている。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。



第35図 第31号住居跡



第34図 第31号住居跡  
出土遺物

第31号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

## 第2節 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡 (第36図、図版12)

調査区西側のⅠ区東側に位置する。北側にはA地点第10～12号住居跡が、東側にはA地点第9号住居跡が、西側には第14号住居跡が近接している。重複するA地点の第5号土壌と同じくA地点の第12号土壌を切っている。本建物跡の北東側半分は調査区外に位置するため、建物跡の全容は不明である。

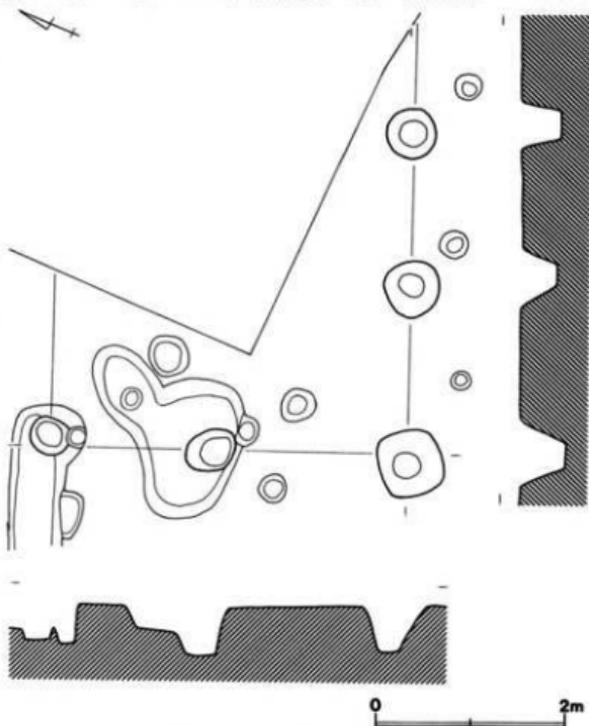
規模は、建物の南北方向が2間で3.60mを測るが、東西方向は2間で3.40mと短く、さらに調査区外に1間以上延びる可能性が大きい。建物跡の東西方向は、 $N-67^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りはいずれも良く、直線上にきれいに並んでいる。南北方向の2間は、柱心間がほぼ1.80m

の等間隔に並んでいる。東西方向は、西側の1間が南北方向と同じく1.80mであるのに対して、東側の1間は1.60mと短く、柱心間が不揃いになっている。

柱穴は、直径50cm～60cmの円形を主体としているが、コーナー部の柱穴は70cm×65cmやや規模の大きな方形ぎみの形態を呈している。確認面からの深さは、いずれも60cm前後を測り、比較的深くしっかりしており、底面は平坦である。柱穴覆土は、ローム粒子を均一に、焼土粒子と炭化粒子を微量に含む黒褐色土で、いずれも柱痕は見られなかった。

出土遺物は、柱穴の覆土中より鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。



第36図 第1号掘立柱建物跡

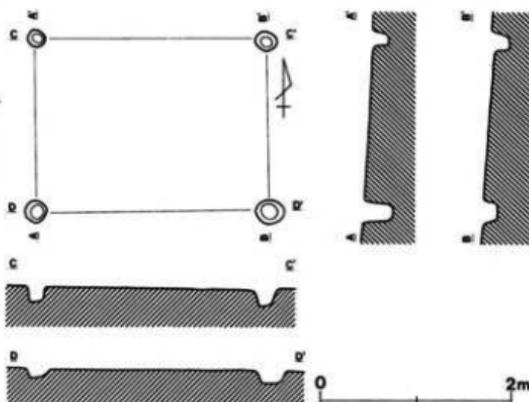
### 第2号掘立柱建物跡 (第37図、図版12)

調査区中央部のⅡ区東側に位置する。本建物跡の西側には第23号住居跡が、東側には古墳時代後期に埋没した小規模な河川跡が近接している。調査区内で検出されたのは南北方向と東西方向とも

1間であるが、南北方向については南北両側の調査区外にさらに延びる可能性もある。

本建物跡の1間×1間の平面形は、東西方向に長い整った長方形を呈しており、南北方向の1間の柱心間は1.80m、東西方向の1間の柱心間は2.40mを測る。建物跡の東西方向はN-90°-Eの真東を向いている。

柱穴は、比較的規模の小さい直径20cm前後の円形を呈している。確認面からの深さは10cm~20cmあり、底面はいずれも平坦である。柱穴覆土は、ロームブロックとB軽石を含む暗灰色粘質土で、遺物は何も出土しなかった。



第37図 第2号掘立柱建物跡

### 第3節 土 壙

#### 第6 A号土壙 (第38図)

調査区西側の第I区東端付近に位置する。北側には第1号掘立柱建物跡が、東側には第14号住居跡が近接している。本土壙は、第6 B号土壙と重複しているが、それを切っている。

平面形は、南側の一部が調査区外に位置するため不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、楕円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が94cmあり、南北方向は92cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、B軽石を均一に含む淡灰褐色土(第1層)の単一土層であるが、遺物は何も出土しなかった。本土壙の時期は、覆土の状態より中世以降の所産と考えられる。

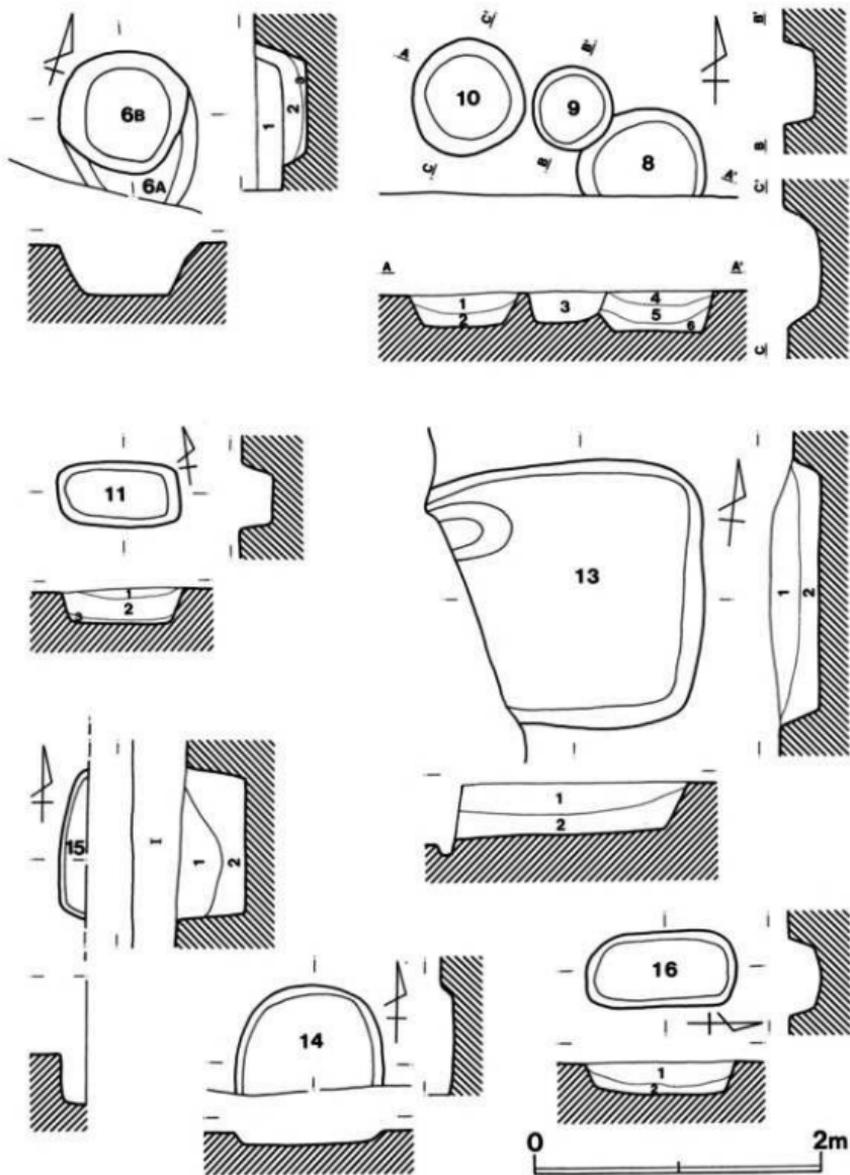
#### 第6 B号土壙 (第38図)

調査区西側の第I区東端付近に位置する。本土壙は、重複する第6 A号土壙に南側の上半を切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、やや不整の円形を呈する。規模は、南北方向86cm・東西方向90cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。底面は、広い平坦面をなしている。遺物は何も出土しなかったが、本土壙の時期はその覆土の状態より、古墳時代の可能性が高いと思われる。

#### 第8号土壙 (第38図)

調査区西側の第I区東側寄りに位置する。西側には第9号土壙と第10号土壙が、東側にはA地点



第38圖 土 壺

の第9号住居跡が近接している。本土壤は、北西側の端部を第9号土壌に切られており、また南側は調査区外に位置しているためその全容は不明であるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が98cmあり、南北方向は60cmまで測れる。壁は、直線的で緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広い平坦面をなしている。出土遺物は、和泉式後半の土器破片が少量出土しただけである。本土壤の時期は、覆土の状態や出土土器より、古墳時代の可能性が高いと思われる。

#### 第6A・6B号土壌土層説明

<第6A号土壌>

第1層：淡灰褐色土層（鉄斑・B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第6B号土壌>

第2層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第8～10号土壌土層説明

<第10号土壌>

第1層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第9号土壌>

第3層：暗灰色土層（鉄斑・B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

<第8号土壌>

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第11号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（B軽石・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第13号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第15号土壌土層説明

第1層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（B軽石・小石を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第16号土壌土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子・焼土粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

### 第9号土壙 (第38図)

調査区西側の第Ⅰ区東側寄りに位置し、西側には第10号土壙が近接している。本土壙は、重複する第8号土壙の一部を切っており、遺構の遺存状態は良好である。

平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、南北方向58cm・東西方向55cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、B軽石を含む暗灰色土(第3層)の単一土層で、遺物は古墳時代の土器破片が少量混入している。本土壙の時期は、覆土の状態より中世以降の所産と考えられる。

### 第10号土壙 (第38図)

調査区西側の第Ⅰ区東側寄りに位置し、西側には第9号土壙が近接している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、やや不整の円形を呈している。規模は、南北方向81cm・東西方向78cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。底面は、広い平坦面をなしている。出土遺物は、和泉式土器の破片が少量出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態や出土土器より、古墳時代の可能性が高いと思われる。

### 第11号土壙 (第38図)

調査区西側の第Ⅰ区東側寄りに位置する。東側約2mには第10号溝跡が、西側約5mには第11号溝跡がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、各コーナー部が丸みをもつ長方形を呈している。規模は、東西方向84cm・南北方向45cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、一部に若干焼けて赤色化した部分が見られる。確認面からの深さは24cmある。底面は平坦で、炭化粒子が薄く貼り付いている(第3層)。覆土中には焼土粒子も顕著に見られ、土壙内で火を焚いていたことが伺える。出土遺物は何も無いが、覆土中にB軽石を含むことから、本土壙の時期は中世以降の所産と考えられる。

### 第13号土壙 (第38図、図版13)

調査区西側の第Ⅰ区東側寄りに位置する。東側には第1号掘立柱建物跡が近接している。本土壙は、重複するA地点の第8号溝跡を切っているが、北側上面をA地点の第12号土壙に、西側をA地点の第9号住居跡に切られているため、土壙の全容は不明であり、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもち、北側壁が若干張っているが、おそらく長方形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が186cmあり、東西方向は190cmまで測れる。壁は、直線的で緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。底面は、広い平坦面をなし、北西側の壁際に深さ10cm程度の浅い楕円形状のピットを伴っている。遺物は、鬼高式土器の破片が若干出土している。本土壙の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態及び出土遺物より、古墳時代後期の所産と考えられる。

#### 第14号土壌 (第38図)

調査区中央部の第Ⅲ区に位置し、西側には重複する第18号溝跡と第30号住居跡が近接している。本土壌の南側半分は調査区外に位置するため、土壌の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、南北方向の長い楕円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が102cmあり、南北方向は73cmまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土の単一土層で、遺物は何も出土しなかった。本土壌の時期は、覆土の状態より古墳時代の可能性が高いと思われる。

#### 第15号土壌 (第38図)

調査区東側の第Ⅳ区南側に位置し、北側約2.5mには第16号土壌がある。本土壌の大半は調査区外に位置するため、土壌の全容は不明である。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、検出された部分から推測すると、長方形もしくは方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向が104cmまで、東西方向が19cmまで測れる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは46cmある。底面は、平坦面をなしている。覆土は、B軽石と小石を含む暗灰色土で、遺物は何も出土しなかった。本土壌の時期は、覆土中にB軽石を含むことから、中世以降の所産と考えられる。

#### 第16号土壌 (第38図、図版13)

調査区東側の第Ⅳ区南側に位置し、南側2.5mには第15号土壌がある。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、各コーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態で、規模は南北方向103cm・東西方向52cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は、広い平坦面をなしているが、やや丸みをもつ。出土遺物は、覆土中より「洪武通寶」の古銭が1枚出土しただけである。本土壌の時期は、出土遺物や覆土中にB軽石を含むことから、中世以降の所産と考えられる。



第39図 第16号土壌出土遺物

## 第4節 溝跡

#### 第10号溝跡 (第46図)

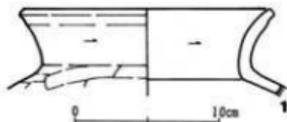
調査区西側のⅠ区東側寄りに位置する。東側約2mには第11号土壌が、西側約3mには第10号土壌がある。流路は、南北方向にとるが、約10°程北西方向に向いている。

形態は、上幅43cm～62cmの比較的均一で直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土であるが、覆土の状態からは水が恒常的に流れていような形跡が見られないため、区画を目的とした性格の溝と推測される。遺物は何も出土しなかったため、明確な時期は不明である。

### 第11号溝跡（第46図）

調査区西側のⅠ区中央部に位置する。東側約8mには第10号溝跡があり、西側約50cmには第12号溝跡が近接している。本溝跡は、その上半を南北方向に流路をとる近世後半以降の溝（第1層）によって切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。流路は、北西方向にとっている。

形態は、上幅約80cmの比較的均一で直線的な形態を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは54cmある。底面は、広く平坦をなしている。本溝跡は、形態や流路の方向から、その南東側延長に位置するA地点の第2号溝跡と同一の排水を目的とした溝と考えられる。出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が少量出土している。本溝跡の時期は、出土遺物より古墳時代後期の所産と考えられる。



第40図 第11号溝跡出土遺物

### 第11号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (17.4cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面薮ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。

### 第12号溝跡（第46図）

調査区西側のⅠ区中央部に位置し、東側約50cmには第11号溝跡が近接している。流路は、ほぼ南北方向を向いている。

形態は、上幅48cmの比較的均一で直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは4cm程度である。底面は丸みをもち、壁との境は不明瞭である。覆土は、A軽石を含む淡褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡は、覆土の状態より近世後半以降のものと考えられ、おそらく東側約1.2mに位置し同じ流路をとる第11号溝跡の上半を切っている溝と同時に併走していたものと思われる。

### 第13号溝跡（第46図）

調査区西側のⅠ区西側寄りに位置し、東側約5mには第13号住居跡がある。流路は、北西方向を向いているが、その南東側延長部分にあたるA地点では、本溝跡と同一と考えられるような溝跡は検出されていない。

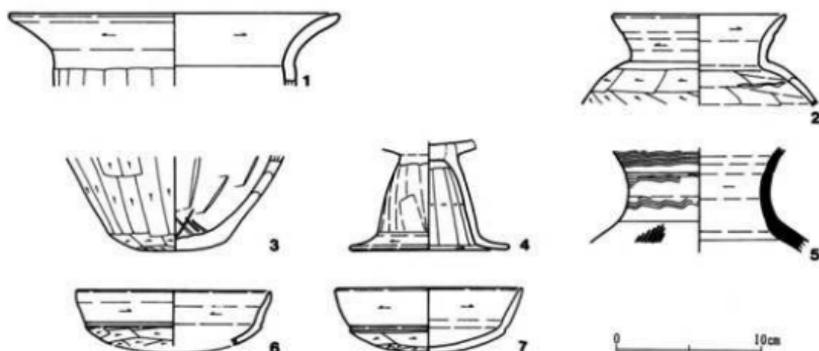
形態は、上幅92cmの比較的均一で直線的な形態を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広く平坦をなしている。遺物は、何も出土しなかったため、時期は不明である。

### 第14号溝跡（第46図）

調査区中央部のⅡ区西側に位置し、重複する第15号溝跡と第21号住居跡を切っている。流路は、

概ね南北方向をとっているが、やや蛇行しながら北端部は若干北西方向に向いている。

形態は、上幅が北側で72cm・南側で123cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。底面は丸みをもち、壁との境は不明瞭である。覆土中には焼土粒子や炭化粒子が見られ、遺物は鬼高式土器を主体とする破片が比較的多く出土している(第41図)。本溝跡の時期は、出土遺物より古墳時代後期の所産と考えられる。



第41図 第14号溝跡出土遺物

第47号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (22.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴は張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡茶褐色	口縁部1/3。 覆土中出土。
2	小形壺	口縁部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、外面中位に凹線をもつ。胴部は強く張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面寛ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡茶褐色	1/2。 覆土中出土。
3	甕	底部径 8.1cm	粘土紐積み上げ成形。底部は不安定な丸底ぎみの形態を呈する。	胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 外一淡茶褐色 内一黒褐色	1/2。 覆土中出土。
4	高坏	脚端部径 11.0cm	粘土紐積み上げ成形。脚柱部は低く太い。脚端部はやや短く、外反ぎみに開く。	坏底部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 外一明茶褐色 内一淡茶褐色	脚部のみ。 覆土中出土。
5	須恵器壺		粘土紐積み上げ成形。頸部は口縁部に向かって緩やかに外反する。	頸部内外面回転ナデの後、外面右回りの櫛歯波状文。胴部外面叩きの後ナデ。	白色粒 内外一暗灰色	1/4。 覆土中出土。
6	坏	口縁部径 (13.4cm)	口縁部は外反ぎみに外傾し、口唇部はやや内湾する。体部は浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一明橙褐色	1/3。 覆土中出土。
7	坏	口径 13.0 器高 4.5	口縁部は直線的に外傾する。体部分的は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一暗橙褐色	3/4。 色覆土中出土。

### 第15号溝跡（第46図）

調査区中央部のⅡ区西側に位置し、重複する第21号住居跡を切り、第14号溝跡に切られている。流路は、ほぼ北東方向に向いているが、重複する第14号溝跡より東側はすでに削平されているため不明である。

形態は、上幅46cmの比較的均一で直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm前後ある。底面は、広いがやや丸みをもっている。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土で、遺物は土器片が数片出土しただけである。本溝跡の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係から古墳時代後期の所産と推測される。

### 第16号溝跡（第46図、図版14）

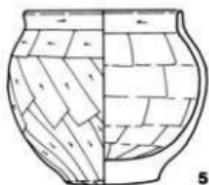
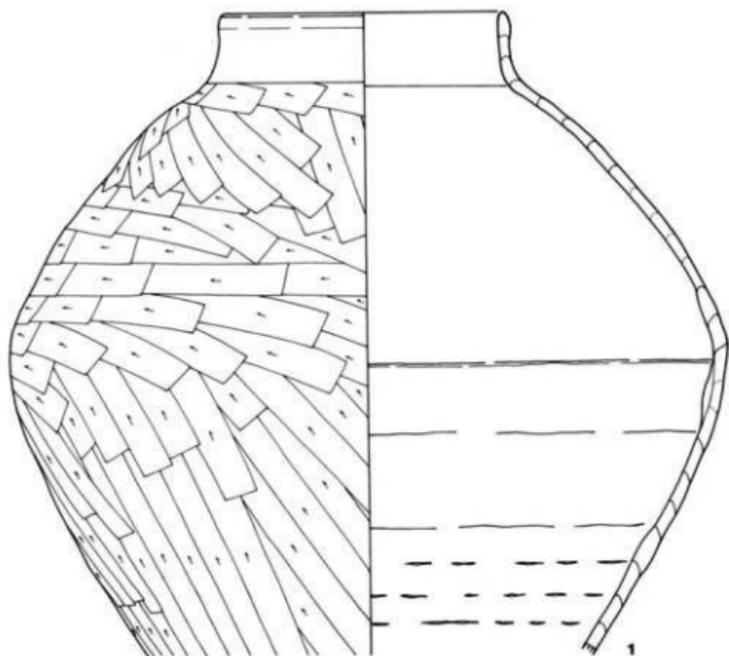
調査区中央部のⅢ区西端に位置し、西側約10mのⅡ区東端には古墳時代後期に埋没した河川跡がある。流路は、北西方向に向いており、その南東側延長にあたるC地点の南端部でも同じ溝跡が同一方向に向いて検出されていることから、ほぼ直線的な流路をとっていたことが推測され、概ね地形の等高線に平行している。

本溝跡は、同一流路による4回の掘り返しが認められる。最初の溝跡は、その形態が不明であるが、確認面からの深さが70cmあり、溝の底面が広い平坦面をなす比較的規模の大きなものであったようである（第8～10層）。この最初に掘削された溝が埋没した後は、溝の上幅が1.70m～1.90m位で確認面からの深さが80cm～90cmあり、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広くやや丸みをもつ2条の同一形態の溝が、併走して直線的に掘られている（第4～7層）。そしてこの2条の溝の埋没後、上幅60cmで確認面からの深さが30cm程度の小規模な溝が、これまでの溝跡とは若干南西側に寄った位置に2回掘り返されている（第1層、第2～3層）。比較的規模の大きな最初の溝と2回目に掘られた2条の併走する溝は、いずれも自然堆積によって埋没しているが、覆土中に小石を顕著に含み、最下層に鉄斑の沈殿層が見られるなど、水が恒常的に流れていた痕跡が認められことから、水路として機能していたことがわかる。

出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が比較的多く出土しているが完形品はない。これらの大半は、最初と2回目に掘削された溝の覆土中から出土したものがほとんどであるが、出土土器による型式差はあまり見られないようである。本溝跡の時期は、覆土の状態や遺構の重複関係から古墳時代後期の所産と考えられる。

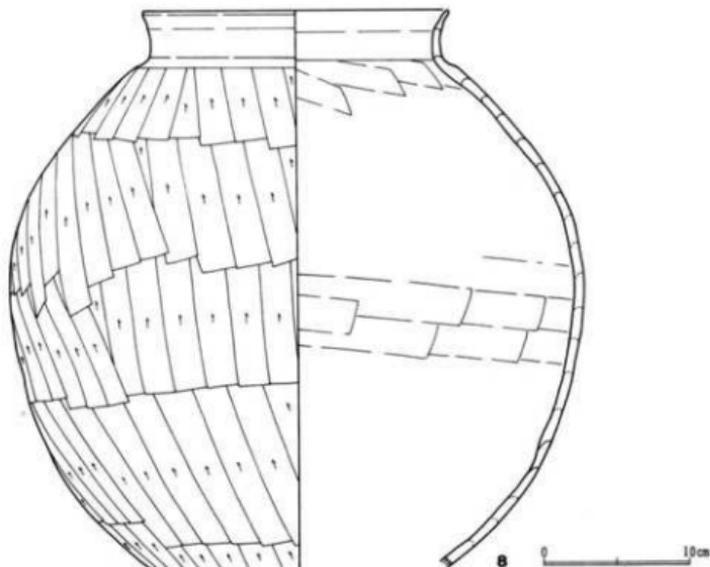
第16号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大形埴輪	口径(19.4) 残存高44.4	粘土経積み上げ成形。口縁部は短く直立する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒外-淡茶褐色 内-茶褐色	2/3。 覆土中出土。
2	甕	残存高 4.7cm	粘土経積み上げ成形。底部は不安定で丸底きみである。	底部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外-茶褐色	1/4。 覆土中出土。
3	甕	底径 5.8cm	粘土経積み上げ成形。底部は突出せず、外面は窪む。	底部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外-明茶褐色	底部のみ。 覆土中出土。



0 10 cm

第42图 第16号满跡出土遺物(1)



第43図 第16号溝跡出土遺物 (2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	大形瓶	底径 (8.0cm)	粘土経積み上げ成形。	外面ケズリの後下端ナデ、内面匏ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-明茶褐色	1/2。 覆土中出土。
5	小形甕	口径 10.8 器高 12.0 底径 6.3	粘土経積み上げ成形。口縁部は短く直立する。胴部は張り、底部は突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外-淡褐色 内-明茶褐色	1/2。 覆土中出土。 外面黒斑あり。
6	坏	口径 12.0 器高 4.9	口縁部は外反ぎみに開く。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒 内外-明橙褐色	1/4。 覆土中出土。
7	坏	口径 12.0 器高 4.9	口縁部は外反ぎみに開く。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒 内外-明橙褐色	1/4。 覆土中出土。
8	大形短頸甕	口径 (21.0) 残存高38.5	粘土経積み上げ成形。口縁部は短く外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外-淡茶褐色 内-暗茶褐色	1/4。 覆土中出土。

#### 第17号溝跡 (第46図)

調査区中央部のⅢ区東側に位置し、西側には第29号住居跡が近接している。流路は、北東方向に向いているが、その延長にあたるⅢ区北側及びⅣ区南側では検出されていないため、Ⅲ区北側の第18-19号溝跡を中心とする複数の溝跡に関連するものと推測される。

形態は、上幅63cmの均一で直線的な形態を呈している。壁は、直線的でやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。底面は、比較的広く平坦をなしている。覆土は、ローム粒子や小石を微量含む暗褐色土を主体としている。遺物が何も出土していないため、本溝跡の明確な時期は不明である。

#### 第18号溝跡（第47図、図版15）

調査区中央部のⅢ区東側とⅢ区北側で検出されており、Ⅲ区東側では重複する第30号住居跡を切っている。また本溝跡の西側には、本溝跡と形態や規模の類似した第19号溝跡が近接してほぼ併走している。流路は、Ⅲ区東側ではほぼ北東方向を向いているが、Ⅲ区北側では東西方向に近い向きをしている。

形態は、上幅が最大で4.60mあるが均一ではなく、Ⅲ区東側の調査区内では重複する第30号住居跡の軟弱な覆土を抉り取ったような状態で、またやや蛇行しそうな様相も見られる。壁は、湾曲しながら非常に緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは52cmある。底面は、広くやや丸みをもつが、小さな砂利の詰まった細かな凹凸が顕著に見られる。覆土は、小石を顕著に含む暗灰褐色土を主体とするが、最下層の第5層には砂や小礫が多量に見られ、一時的に大量の水が流れていたことが伺える。本溝跡は、その不均一な形態や覆土の状態から見て、人工的に掘削された水路とは考えがたく、おそらくは河川や湧き水などの氾濫による大量の出水が開析した自然流路と推測される。

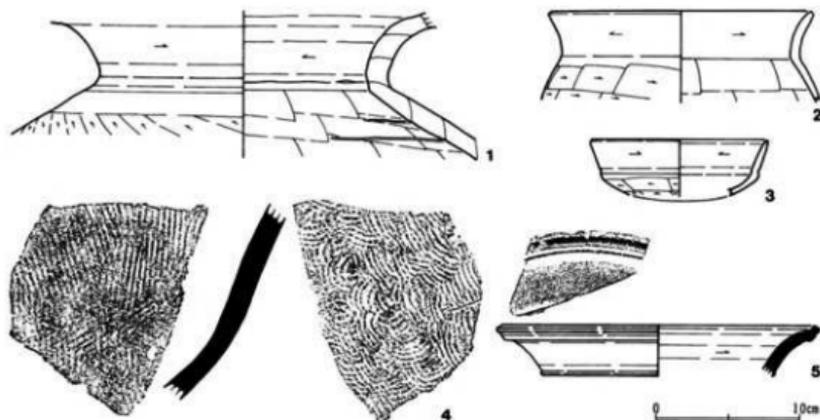
本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、併走する第19号溝跡と同一時期のものと思われ、真間期以降と考えられる。

#### 第19号溝跡（第47図、図版15）

調査区中央部のⅢ区東側とⅢ区北側で検出されており、Ⅲ区東側では重複する第31号住居跡を切っている。また本溝跡の東側には、第18号溝跡が近接してほぼ併走している。流路は、第18号住居跡と同じくⅢ区東側ではほぼ北東方向を向いているが、Ⅲ区北側では東西方向に近い向きをしている。形態は、上幅が4 m程度あるが整然としていない。壁は、湾曲しながら非常に緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cm～40cmある。底面は、凹凸が激しく小さな砂利の詰まった筋状の窪みが多く見られる。覆土は、小石を顕著に含む暗灰色土を主体とするが、最下層の第6層には小石が多量に見られ、堆積状態も第18号溝跡と類似している。本溝跡も、その不均一な形態や覆土の状態から見て、人工的に掘削された水路とは考えがたく、第18号溝跡と同じく自然流路と推測される。出土遺物は、覆土中より古墳時代後期を主体とする土器片が比較的多く出土しているが、内屈口縁坏を伴う第31号住居跡を切っていることから、真間期以降と考えられる。

第19号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大形収口罐		粘土紐積み上げ成形。口縁部は広く緩やかに外反する。胴部は強く張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面匏ナデ。	片岩粒・赤色粒 外一暗茶褐色 内一茶褐色	1/2。 溝底面出土。



第44図 第19号溝跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	甕	口縁部径 (18.2cm)	粘土経積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
3	坏	口縁部径 (12.2cm)	口縁部は直線的に外傾する。体部は比較的浅い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒 内外一明橙褐色	口縁部1/4。 覆土中出土。
4	須恵器 甕		粘土経積み上げ成形。	外面平行叩きの後下半ナデ、内面当て道具痕(青海波文)。	白色粒 内外一暗灰色	破片。 覆土中出土。
5	須恵器 甕	口縁部径 (22.2cm)	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は上方に向く。頸部中位に凸帯をもつ。	口縁部内外面回転ナデの後、外面に14本歯の櫛描波状文を施す。	白色粒 内外一暗灰色	口縁部1/6。 ロクロ回転右回り。 覆土中出土。

#### 第20号溝跡 (第47図)

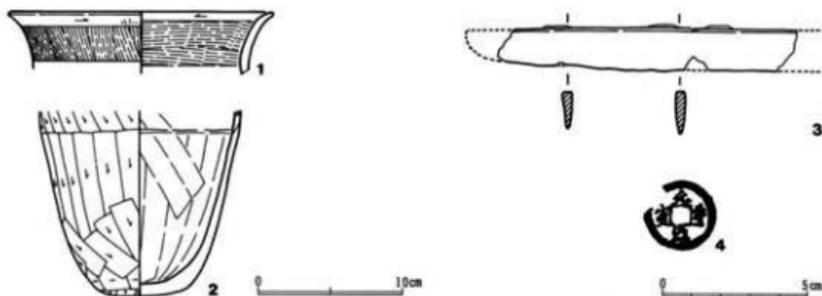
調査区中央部のⅢ区北側に位置し、南側に第18号溝跡と第19号溝跡が近接している。流路は、ほぼ東西方向に向いており、近接する第18号溝跡と第19号溝跡に併走するような様相が伺える。

形態は、上幅40cm～80cmと均一的ではなく、若干蛇行さみみである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは5cm程度である。底面はやや丸みをもち、壁との境は不明瞭である。覆土は、砂利や細砂を多量に含む暗灰色土で、近接する第19号溝跡等と同一であり、本溝跡もそれらの氾濫による自然流路と関係するものと推測される。

#### 第21号溝跡 (第48図、図版14)

調査区東側のⅣ区南端に位置し、南側約8mにはⅢ区の第20号溝跡がある。調査区内で検出されたのは、溝跡の北側半分だけであるため本溝跡の全容は不明であるが、覆土の差異と形態から見て、中世の溝跡(第1・2層)と古墳時代後期の溝跡(第4・5層)が重複しているものと推測される。流路は、調査区内ではいずれもほぼ北西方向に向いている。

上半の中世の溝跡は、確認面からの深さが44cmあり、壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦面をなしている。覆土中には砂利を顕著に含み、遺物は刀子(第45図No3)と古銭(第45図No4)が出土している。下半の古墳時代後期の溝跡は、確認面からの深さが68cmあり、壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦面をなしている。覆土中には小石を含み、遺物は鬼高式土器の破片を主体的に出土している。



第45図 第21号溝跡出土遺物

第21号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土粗積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ハケの後ナデ。 口唇部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外一暗茶褐色	1/4。 覆土中出土。
2	甕	底部径 5.8cm	粘土粗積み上げ成形。胴部は張らず、底部は不安定な平底を呈する。	胴部外面ケズリ、内面艶ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡茶褐色	1/3。 覆土中出土。
3	鉄製品 (刀子)	残存長10.4 幅 1.5	背部は直線的でやや広い平坦面をなしている。両端部欠失。覆土中出土。	地金は錆が進行し、やや膨らんでいる。		
4	古銭	直径 2.4	「元豊通寶」(行書)。1078年初鑄。			

第22号溝跡 (第48図)

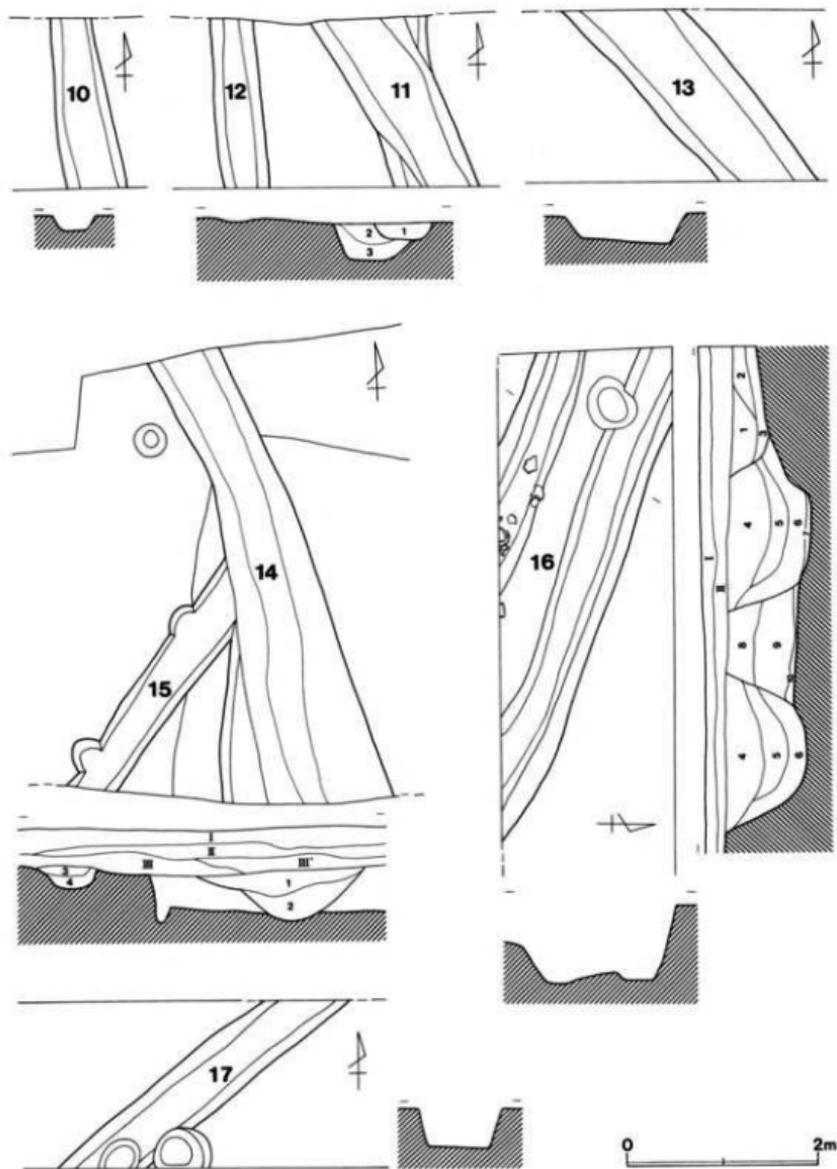
調査区東側のV区西端に位置し、流路はほぼ北西方向に向いている。

形態は、上幅56cmの均一で直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度と浅い。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、B軽石を含む暗灰褐色土を主体にしている。本溝跡の時期は、覆土の状態より中世のものと同推測される。

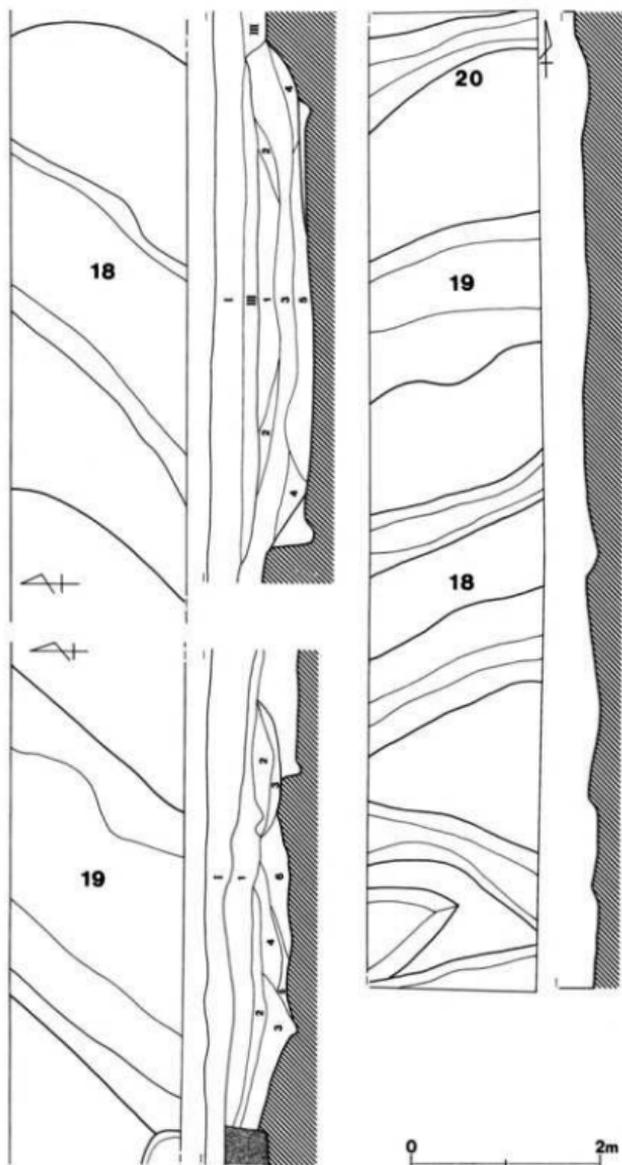
第23号溝跡 (第48図)

調査区東側のV区中央部に位置し、東側1.5mには第24号溝跡が近接している。流路は、ほぼ北西方向に向いている。

形態は、上幅が50cm~70cmあるが、比較的直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して



第46図 溝 跡 (1)



第46图 沟 迹 (2)

立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、B軽石を含む暗灰褐色土を主体にし、第22号溝跡の覆土と類似している。遺物は何も出土していないため本溝跡の時期は明確ではないが、覆土の状態より中世のものと推測される。

#### 第11号溝跡土層説明

- 第1層：淡褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第14・15号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第16号溝跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（鉄斑・小石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・小石を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰色土層（鉄斑・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗灰色土層（鉄斑・小石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第8層：暗灰褐色土層（鉄斑・小石を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第9層：暗灰色土層（小石・鉄斑を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第10層：茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊を多量に含む。粘性・しまりともない。）

#### 第18号溝跡土層説明

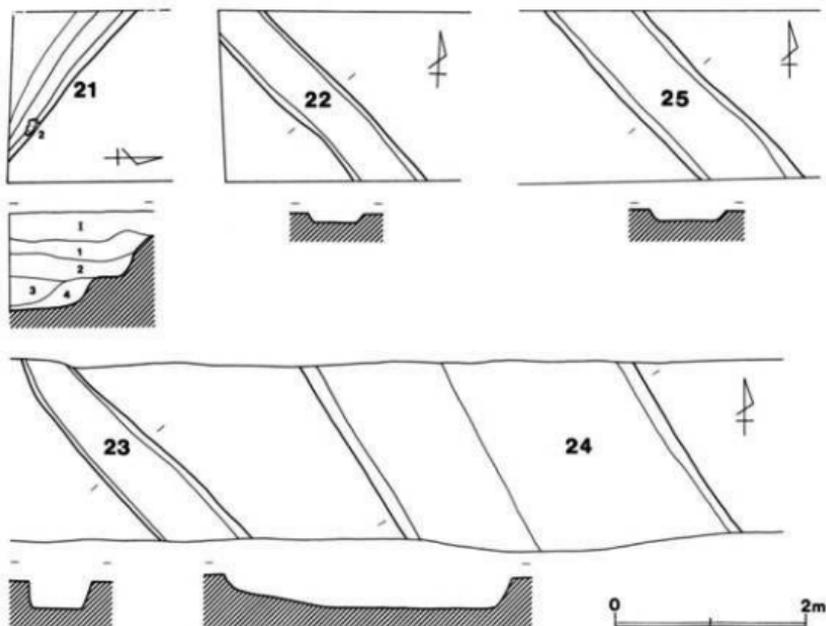
- 第1層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、マンガン塊・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（鉄斑・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：淡灰褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、細砂・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：淡灰褐色土層（細砂を均一に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第5層：暗灰褐色土層（小石を多量に、細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）

#### 第19号溝跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（小石を多量に、細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗灰色土層（細砂を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰色土層（細砂・小石を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第5層：暗灰色土層（細砂・小石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：暗灰色土層（小石を多量含む。粘性・しまりともない。）

#### 第21号溝跡土層説明

- 第1層：淡灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（B軽石・小石を均一に含む。ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒灰色土層（鉄斑・ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第48図 溝 跡 (3)

#### 第24号溝跡 (第48図)

調査区東側のV区中央部に位置し、西側1.5mには第23号溝跡が近接している。流路は、ほぼ北西方向を向いている。

形態は、上幅が約3mと広い直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。底面は、広く平坦をなしているが、西側半分はやや傾斜して徐々に浅くなっている。覆土は黒褐色土を主体にし、遺物は古墳時代の土器片が少量出土している。本溝跡の時期は明確ではないが、覆土の状態からは古墳時代の可能性が高いと思われる。

#### 第25号溝跡 (第48図)

調査区東側のV区東側に位置し、西側約23mには第24号溝跡がある。流路は、ほぼ北西方向を向いている。

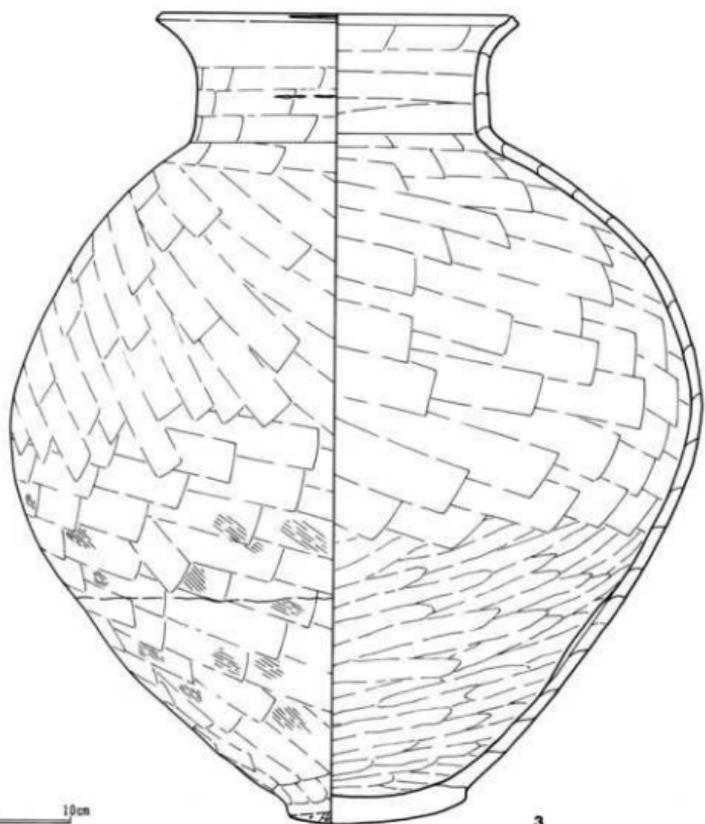
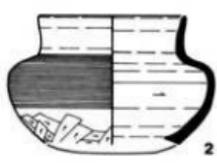
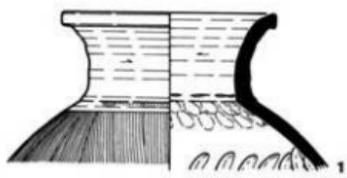
形態は、上幅80cmの均一で直線的な形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度と浅い。底面は、広い平坦面をなしている。覆土は、B軽石を含む暗灰褐色土を主体にし、第22号溝跡や第23号溝跡の覆土と類似している。遺物は何も出土していないため本溝跡の時期は明確ではないが、覆土の状態より中世のものとして推測される。

## 第5節 河川跡

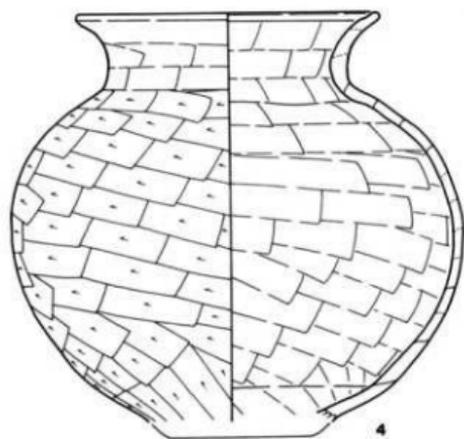
調査区中央部のⅡ区東端に位置している。流路は、調査区内では南西から北東方向を向いてる。その南西側延長にあたるD地点南端部でも第52号住居跡を切る比較的規模の大きな砂利層が確認されているが、同一のものか不明である。また、その北東側延長にあたるライスセンター敷地内(蛭川坊田遺跡)の試掘調査では、同様の河川跡は確認されていない。本河川跡は、その東端が調査区外に位置するため全容は不明であるが、Ⅲ区西端では検出されていないことから、幅は15m前後の規模であろうと思われる。深さは、全掘できなかつたため不明であるが、おそらく1m前後の比較的浅いものと思われる。覆土は、砂利層と砂層が互層をなし、覆土中からは鬼高式土器や須恵器の破片が多量に出土している。本河川跡は、周囲の地形や発掘調査の状況から見て、恒常的に大量の水が流れているような河川ではなく、大雨や氾濫等により一時的に大水が集まるようなものであったと思われ、その源は本遺跡の南側の吉田林に多く見られる湧水やそれを利用した溜池であったと思われる。

河川跡出土遺物観察表

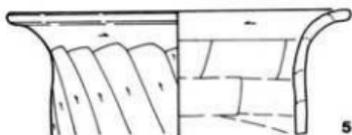
No	器種	法量	形態・成形手の特徴	調整手の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器壺	口縁部径 (14.6cm)	粘土継積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部外面に平坦面をもつ。	口縁部内外面回転ナデ。胴部外面平行叩きの後ハケ、内面当て道具痕。	白色粒 内外一暗灰色	1/2。 覆土中出土。
2	須恵器短頸壺	口縁部径 (10.0cm)	ロクロ成形。口縁部は短く直立ぎみに立つ。胴部は強く張り、扁平をなす。	口縁部内外面回転ナデ。胴部外面上半カキ目、下半ナデの後手持ち篋ケズリ。	白色粒 内外一暗灰色覆土中出土。	1/2。
3	大形壺	口縁部径 24.8cm 器高 55.9cm 底部径 12.2cm	粘土継積み上げ成形。頸部は直立ぎみに立ち、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦面をもち、部分的に沈線を施す。胴部はやや長胴儀身で最大径を中位にもつ。底部は突出する。	口縁部内外面篋ナデの後上半ヨコナデ。胴部外面上半ケズリの後ナデ、下半ハケの後ナデ。胴部内面上半篋ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡茶褐色	2/3。 外面黒斑あり。 覆土中出土。
4	広口壺	口縁部径 (20.8cm) 残存長 28.2cm	粘土継積み上げ成形。口縁部は短く緩やかに外反し、口唇部内面は若干窪む。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ。	口唇部内外面ヨコナデ。口縁部内外面篋ナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一暗茶褐色	4/5。 覆土中出土。
5	壺	口縁部径 (18.6cm)	粘土継積み上げ成形。口縁部は強らず、長胴を呈する。底部は小さな平底をなす。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。	片岩粒・赤色粒 外一明茶褐色 内一淡茶褐色	1/2。 覆土中出土。
6	壺	底部径 3.6cm	粘土継積み上げ成形。胴部はやや張る。	胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 外一淡褐色 内一淡橙褐色	胴下半のみ。 覆土中出土。
7	壺	口縁部径 (17.2cm)		口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篋ナデ。	片岩粒・赤色粒 外一淡茶褐色 内一淡褐色	1/3。 覆土中出土。



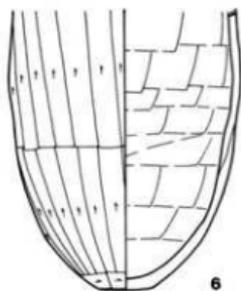
第49圖 河川跡出土遺物 (1)



4



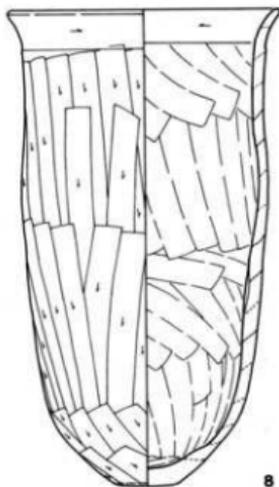
5



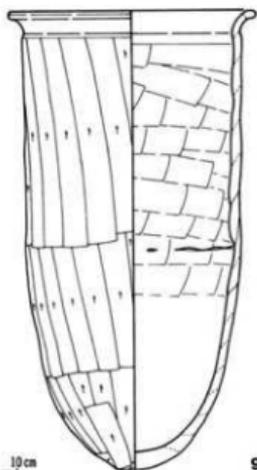
6



7

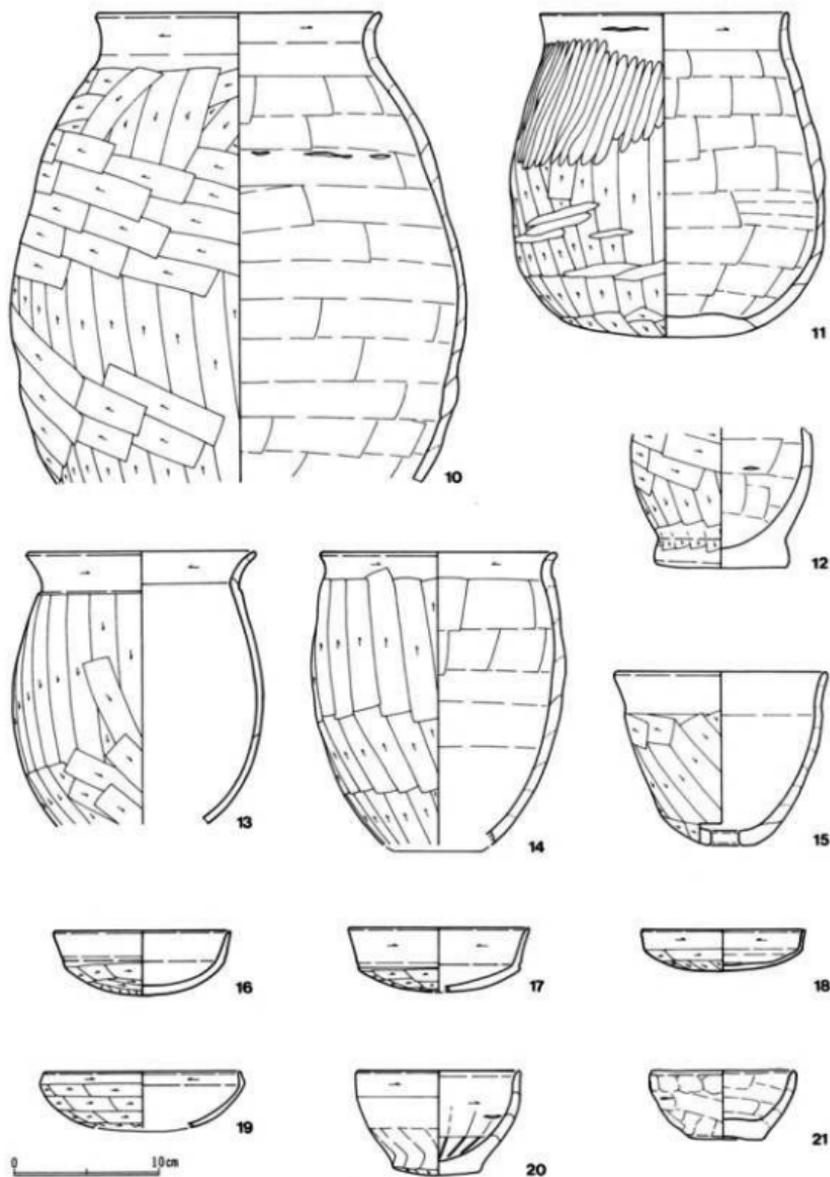


8



9

第50図 河川跡出土遺物 (2)



第51図 河川跡出土遺物 (3)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	甕	口径(18.8) 器高(33.0) 底径(4.2)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外反する。胴部は長胴を呈し、底部は小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部分的に外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外一暗茶褐色 内一淡茶褐色	1/2。 胴部上半と下半は接合しない。器形は腹上腹元、覆土中出土。
9	甕	口縁部径(17.0cm) 器高(31.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く緩やかに外反する。胴部は張らず長胴を呈する。底部は小さく不安定。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ。内面上半匏ナデ、下半ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 白色粒 内外一明茶褐色	1/4。 胴部上半と下半は接合しない。器形は腹上腹元、覆土中出土。
10	甕	口縁部径19.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一茶褐色	2/3。 覆土中出土。
11	甕	口縁部径(17.0cm) 器高22.5cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直立ぎみに若干外反する。胴部は張り、底部は厚く大きい。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後部分的なナデ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡茶褐色	2/3。 底部外面に黒斑あり。 覆土中出土。
12	小形甕	底部径9.2cm	粘土紐積み上げ成形。胴部は若干張る。底部は厚く突出した大きな平底を呈する。	胴部外面ナデの後ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一淡橙褐色	底部のみ。 外面黒斑あり。 覆土中出土。
13	小形甕	口縁部径15.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部はやや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外一淡茶褐色	2/3。 覆土中出土。
14	小形甕	口縁部径(16.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外反する。胴部はやや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外一明茶褐色	1/3。 覆土中出土。
15	小形瓶	口縁部径14.6cm 器高12.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干外反する。胴部は張らず、底部に大きな穿孔を1孔もつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 白色粒 外一淡橙褐色 内一明橙褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 二穴に1孔開いて、 覆土中出土。
16	坏	口径12.1 器高4.4	口縁部は直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 白色粒 内外一明橙褐色	1/2。 覆土中出土。
17	坏	口径(12.4) 器高(4.4)	口縁部は直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 白色粒 内外一明橙褐色	1/4。 外面黒斑あり。 覆土中出土。
18	坏	口径(11.2) 器高(2.8)	口縁部は短く直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 白色粒 内外一明橙褐色	1/4。 覆土中出土。
19	坏	口縁部径(13.4cm)	口縁部は短く直線的に内屈する。体部はやや深い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外一明橙褐色	1/4。 覆土中出土。
20	碗	口径(11.2) 器高7.2 底径5.9	口縁部は退部より短く直立ぎみに若干外反する。体部はやや深く、底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面匏ナデ。	赤色粒・白色粒 白色粒 内外一暗茶褐色	3/4。 覆土中出土。
21	碗	口径9.8 器高4.8 底径5.3	粘土紐巻き上げ成形。体部内湾しながら開く。底部は厚い平底を呈する。	体部外面匏ナデの後口縁部外面指押さえ。内面指ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 内外一茶褐色	3/4。 覆土中出土。

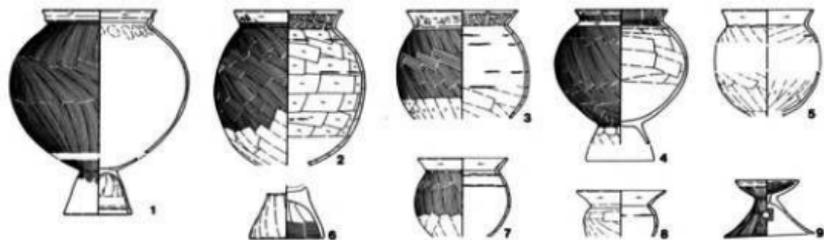
## 第V章 ま と め

本遺跡は、古墳時代中期から後期にかけて概ね継続的に営まれたと推測される集落跡である。本遺跡の現在までの発掘調査では、本報告のB地点とともにほぼ同時に調査されたA・C・D地点と、本遺跡とは連続する同一遺跡と考えられる南街道遺跡のA～D地点(恋河内1996)を合わせると、調査区域が狭いにもかかわらず、100軒にも及ぶ住居跡が検出されている。辻堂・南街道遺跡各地点の調査面積を合わせても、遺跡全体の5%に満たない面積であり、集落の様相を具体的に知るには不十分であるが、各地点から住居跡を主体とする多くの遺構が検出され、長期間にわたってほぼ継続的に営まれていることは、当地域の中心的大規模集落の一つとして、本遺跡を位置付けることができよう。ここでは、この女堀川中流域南部の中心的集落と推測される本遺跡の現時点での様相を把握するため、本報告のB地点以外の各地点や南街道遺跡も含めて、本遺跡の古墳時代集落の時期的な展開を概観することにしたい。

### 第1節 辻堂・南街道遺跡出土の古墳時代土器の様相

辻堂・南街道遺跡における現在までの発掘調査では、古墳時代前期後半から後期末までの土器が出土している。前期については遺構に伴うものはないが、中期以降では遺構に伴う比較的良好な一括遺物も多く見られる。以下、これらの土器を便宜的にⅠ期～Ⅶ期に分け、各時期の土器様相について概観したい。なお、この時期区分は時間的制約からとりあえず本遺跡出土の一括遺物を相対的に配列しただけのものであり、一括遺物中の古い特徴をもつ土器についても、あえて意識的に削除せずに提示している。そのため、各器種の系統別の型式組列による検証に基づいて抽象化された概念規定による時期区分とは異なるものであり、当然ながら当地域における該期の土器編年を目的としたものでもない。また、本報告以外の土器については、続刊の「辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡」(恋河内1996)を参照していただきたい。

第Ⅰ期の土器(第52図)は、南街道遺跡B地点の第15号住居跡で、覆土中に一括投棄された多量の和泉式土器に混在して出土したものだけである。土器は、甕・小形鉢・器台の3器種が見られるだけである。甕は、S字状口縁台付甕と単純口縁(台付)甕がある。S字状口縁台付甕は、胴部が球形に



第52図 第Ⅰ期の土器

強く張るが、頸部は収縮して口縁部上段はやや高く外反の弱い形態であり、諏訪遺跡第25号住居跡(柿沼1979)出土のものに類似している。単純口縁(台付)甕は、分量差によって概ね大形・中形・小形の3タイプがあり、大形と中形の大半はおそらく台付甕と思われる。この単純口縁(台付)甕の外周調整には、ハケを主体とするものとナデを主体とするものがあるが、前者のハケ調整の台付甕には、胴部下半に篋ケズリやナデを、上部にはナデを施すものが多く見られ、当地域の前期後半段階の単純口縁台付甕の一つの特徴と言える。また、この段階以降の単純口縁(台付)甕には、内面篋ケズリ技法も多く見られ、当地域の単純口縁(台付)甕の一つの系譜を考えるうえで重要と思われる。

見玉地方の前期の土器は、外来系土器の流入を契機として、その強い影響を受けて在地化した土器群が展開する複雑な様相を示している。特に甕では、初頭段階から在地の樽式や吉ヶ谷(赤井戸)式及び北陸系やあるいは畿内の伝統的V様式甕(恋河内1993)などの影響による平底甕と、東海西部やあるいは南関東の影響による台付甕の異なった煮沸形態の甕が、系統的に錯綜した状態で見られる。この中で当地域は、S字状口縁台付甕が比較的多く見られることから、隣接する群馬県地方の石田川式土器との共通性が指摘されている。しかしながら、細かな時期的な変化や遺跡差または集落内での住居差なども考慮されるが、当地域において資料が充実している前期後半段階では、このS字状口縁台付甕は確かに多くなるが、必ずしも当地域の台付甕の主体を占めるとは言えず、量的には単純口縁(台付)甕と大差ない状況であり、相互の補完的な関係を伺うことができる。

第II期の土器(第53図)は、辻堂遺跡D地点の第43号住居跡の覆土中から出土したS字状口縁台付甕の破片だけである。このS字状口縁台付甕



第53図 第II期の土器

は、頸部の収縮が強く胴部外面のハケ調整が省略されて篋ケズリのままのものであるが、口縁部は口唇部内側に沈線を施す整った形態で、器内も非常に薄く均整のとれた作りであることから、和泉期までは下らないものと思われる。

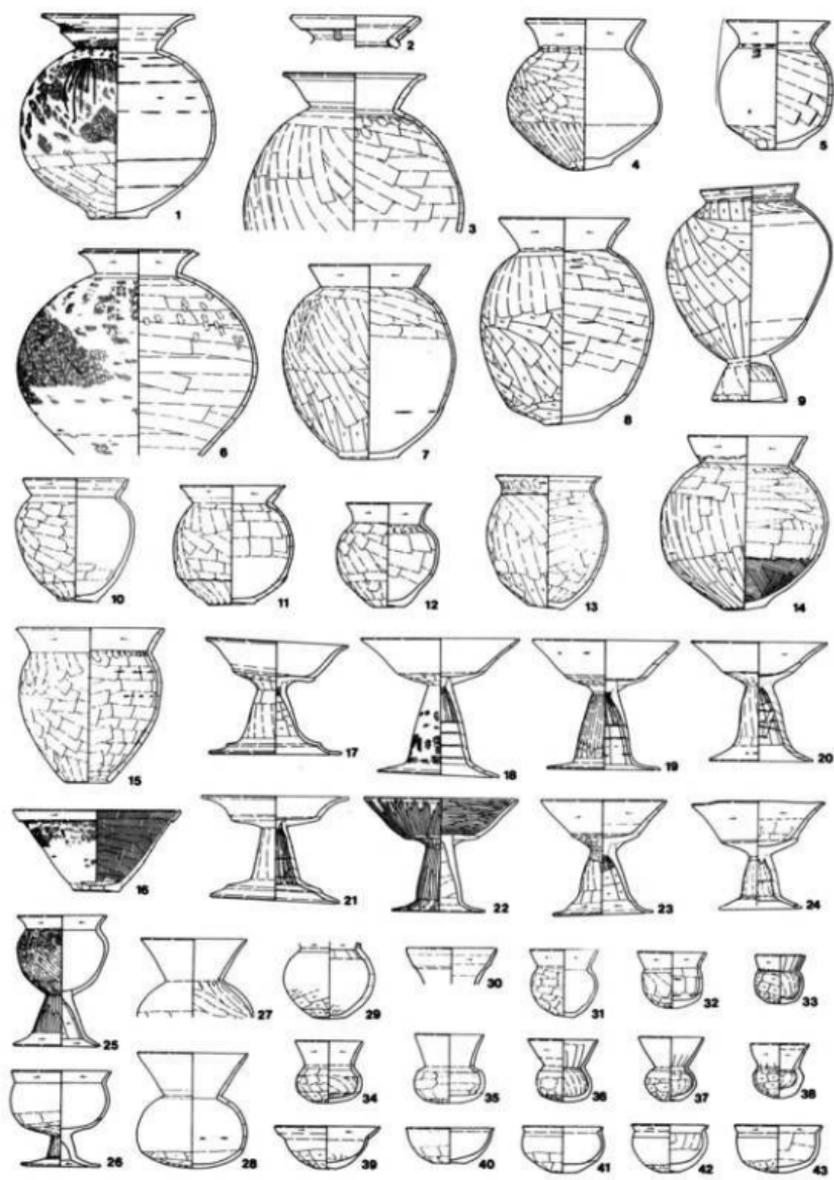
第III期の土器は、II期とは時期的に連続せず、時間的な断絶が認められる。該期の土器は、南街遺跡のA地点を主体に、比較的良好な一括資料が多くある。いくつかの器種に古相と新相が見られると思われるため、一応1期(第54図)と2期(第55図)に分けて考えたが、該期の遺構から出土した一括遺物には漸移的な様相のものが多く、現状では遺構の重複関係もないことから、区分は明確とは言い難い。

第III-1期の土器(第54図)は、辻堂遺跡第3号住居跡、南街遺跡第14号住居跡・第29号住居跡出土土器と第41号住居跡覆土一括土器がある。器種は、壺・甕・甔・高坏・台付鉢・小形壺・小形丸底壺・椀などが見られる。壺は、二重口縁壺・複合口縁壺・単純口縁壺がある。二重口縁壺(No1)は、前段階と考えられる梅沢遺跡第37号住居跡(恋河内1995)のものよりも口縁部の外反が強く、屈曲の位置も低くなっている。複

第54図土器一覧表

合口縁壺(No2)は、いわゆる折り返し口縁を呈するものであるが、頸部に縦方向の貼付隆帯をもつや

辻堂3号住	10・22・27・31・33
辻堂41号住	36
辻堂43号住	24・29・42
南街遺14号住	1・4・7・11・14・15・16・17・23・25・26・30・38・39・40・41
南街遺29号住	3・5・6・8・9・12・34・37・43
南街遺41号住	2・13・18・19・20・21・28・32・35



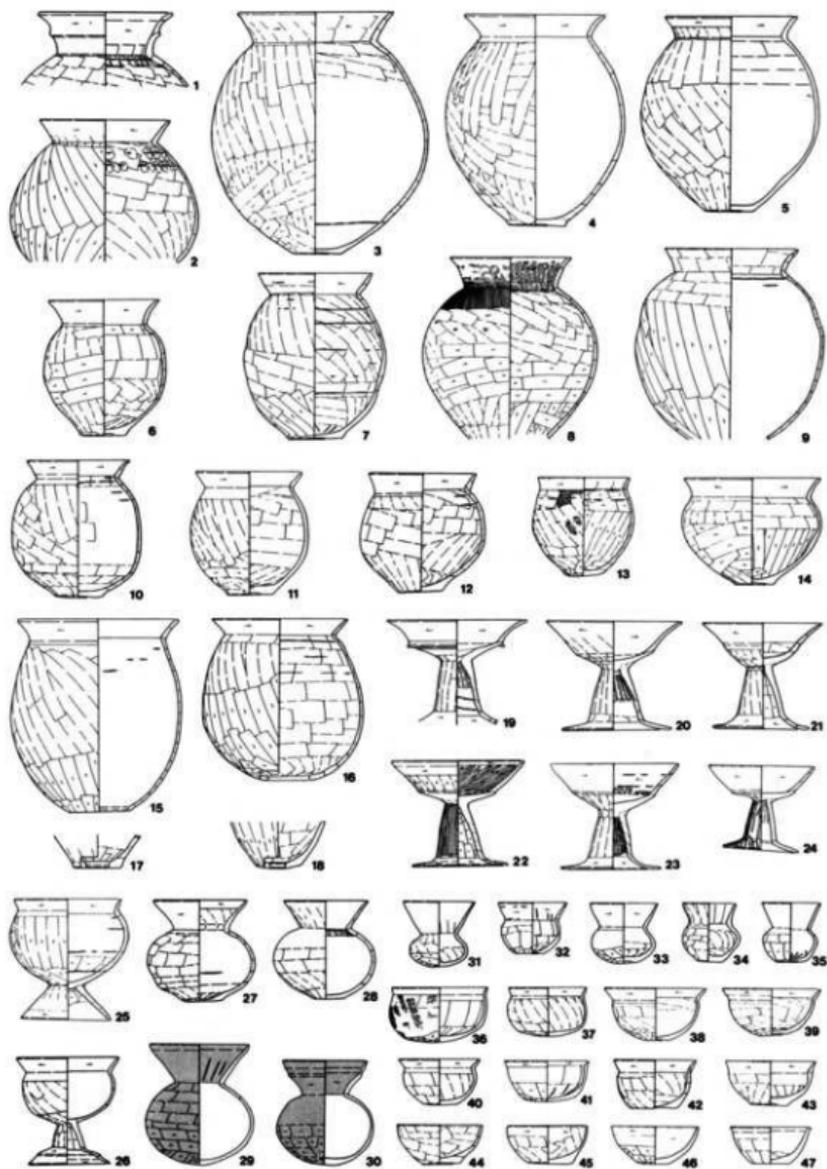
第54図 第Ⅲ-1期の土器

や特異なものである。単純口縁壺(No3)も、前段階の後張遺跡第136号住居跡(立石1982)のものに比べて口縁部の外反が強くなっている。No6の壺は、口唇部両側を上下につまみ出す非常に丁寧な作りのもので、坂野和信氏の韓式・須恵器系広口壺A(坂野1991)と同一手法のものであり、それに比べると口縁部は短く外反も強くなっている。甕は、平底甕(No7・8)とS字状口縁台付甕(No9)がある。平底甕は、和泉期初頭のものに比べて胴部の張りがやや弱く、若干肩が張った長胴ぎみの形態である。S字状口縁台付甕は、口縁部の形骸化が著しく、台部は小形化してハの字にやや強く開く形態を呈し、胴部外面もハケ調整が省略されてケズリだけになっている。また、和泉期では前期末のものに比べて器内が厚くなったり、器形が歪んでいるものも多く見られる。中形や小形の甕はパラエティーに富み、壺との区別が困難なものも見られる。瓶は、南街道遺跡第14号住居跡で甕形の大形瓶(No15)と鉢形の小形瓶(No16)が出土しており、大形瓶は口縁部に最大径をもち、小形瓶は複合口縁を呈している。高坏(No17~24)は、前段階に特徴的な坏部が大きく脚部の高いものもあるが、全体的にやや法量が小さくなり、ミガキ調整も少ない傾向にある。有段高坏(No17・21)は、脚端部だけに段をもつもので、段はやや低い。台付鉢(No25・26)は、台部が高くミガキ調整が施されるものと、台部が低くナデ調整されるものがある。小形壺(No27~30)は、口縁部が大きいのが特徴であり、No28は胴部下半に稜をもっている。No30は、複合口縁を呈し、坂野氏が甕の模倣とされたものに類似している(坂野1991)。小形丸底壺は、口縁部が短く低い鉢形のもの(No31~33)と、口縁部の長い埴形のもの(No34~38)があり、後者の一部には胴部の扁平化と丸底化が見られる。椀(No39~43)は、口縁部が短く外傾する平底のものであり、第三—二期以降のものに比べて、やや小ぶりである。これらには、体部が浅いもの(No39・40)とやや深いもの(No41・42)があるが、南街道遺跡第29号住居跡出土のNo43は、住居跡から出土した他の一括土器と異なって覆土中から出土したもので、あるいは本時期よりも新しい可能性もある。

第三—二期の土器(第55図)は、辻堂遺跡第57号住居跡・第3号土壌、南街道遺跡第27号住居跡・第30号住居跡・第31号住居跡出土土器及び第15号住居跡覆土一括出土土器がある。器種は、壺・甕・大形鉢・瓶・高坏・台付鉢・小形壺・小形丸底壺・椀などが見られる。壺は、南街道遺跡第27号住居跡から出土した二重口縁壺(No1)だけである。中村倉司氏が「Ⅱ期」(中村1989)とした古川端遺跡第22号住居跡(小久保1978)のものに類似しており、口縁部の屈曲はさらに下位に下がり形骸化している。甕(No2~9)は、No8やNo9のように前段階の特徴をもつものもあるが、胴部は撫で肩になり最大径を中位にもつものが主体的である。小形甕は、前段階と同様の器形のものもあり、壺との区別が困難なものも見られる。大形鉢(No14)は、和泉期前半ではあまり類例がないが、鬼高Ⅰ期前半の諏訪遺跡第45号住居跡の大形鉢と形態的には繋がる可能性が高いものであろう。瓶は、大形瓶(No15・16)と小形瓶(No17・18)があるが、前段階に比べて大形瓶は甕と同様に撫で肩で最大径を中位にもち、小形瓶は体部の傾きが強くなるようである。高坏(No19~24)は、前段階に比べて法量が小形化したものが主体を占め、形態的には脚端部の外反が低くなっているものが多く

#### 第55図土器一覽表

辻堂57号住—	7・8・14
辻堂3号土壌—	3・13・23・36
南街道15号住—	2・6・9・10・16・19・20・22・32・33・34・35・42
南街道27号住—	1・5・12・26・27・28・30・43・44・45・46・47
南街道30号住—	21・31・37・40
南街道31号住—	4・11・15・17・18・24・25・29・38・39・41



第55図 第Ⅲ-2期の土器

見られる。No19は、有段高坏と思われる。台付鉢は、ハの字に開く台が付くもの(No25)と、脚状の台が付くもの(No26)があるが、後者は前段階のもの(第54図No26)と大差ない。小形壺(No27~30)は、口縁部の縮小化が見られ、南街道遺跡第27号住居跡出土のNo27とNo28や南街道遺跡第15号住居跡出土のものには胴部の偏平化が認められる。南街道遺跡第27号住居跡出土のNo30は、有段口縁を呈するものであり、内外面とも赤彩が施されている。小形丸底壺(No31~35)は、前段階と同様に鉢形のもの(No32)と埴形のもの(No31・33~35)があるが、いずれも前段階よりもやや胴部の偏平化が見られるようである。椀は、口縁部が短く外傾する平底のもの(No36~43・47)と、口縁部が内湾ぎみに開く平底のもの(No44~46)がある。前者は、前段階に比べて口縁部がやや長く器内も薄い法量のやや大きなものが見られる。後者は、坂野氏が韓式系平底坏B種とされたものに類似している(坂野1991)。

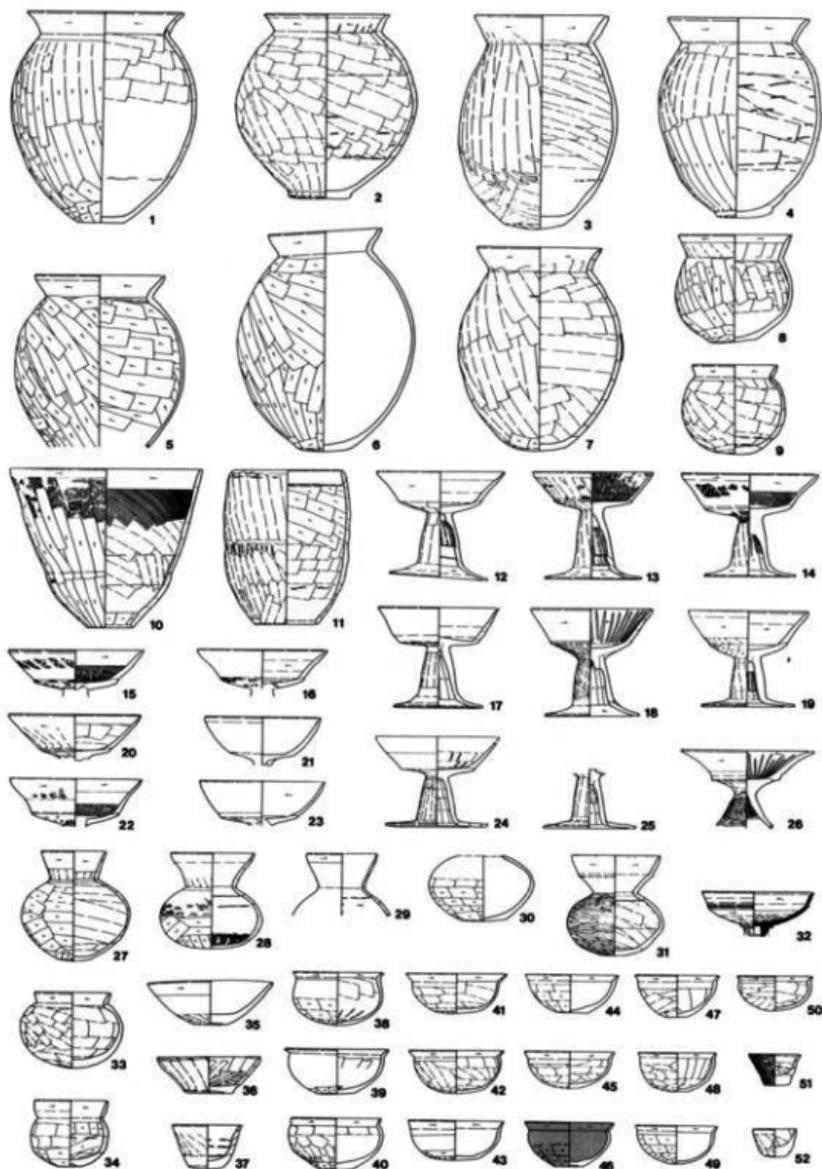
第Ⅳ期の土器(第56図)は、辻堂遺跡第4号住居跡・第5号住居跡・第21号住居跡・第23号住居跡・第29号住居跡・第51号住居跡・第52号住居跡、南街道遺跡第40号住居跡出土土器などがあり、該期の住居跡にはカマドが付設されている。器種は、壺・瓶・高坏・小形壺・鉢・椀が見られる。壺(No1~7)は、No1・2・5のような前段階の特徴をもつものもあるが、前段階に比べて胴部の張りが弱くなり、長胴ぎみで不安定な平底を呈するものが主体である。小形壺(No8・9)は、第Ⅲ期に比べて口縁部が広く器高が低い。該期までの大形瓶は、壺形を基調としながらも比較的多様な形態のものが見られるが、本遺跡の大形瓶も胴部と口縁部の境がない鉢形のもの(No10)や樽形のもの(No11)など、あまり一般的な形態とは言えないものである。高坏(No12~26)は、脚部が長い長脚系のもので脚部が短く脚端部の高さが短い短脚系のものである。本遺跡では、いずれも坏部がやや浅く坏底部が広いものが主体的である。小形壺(No27~31)は、第Ⅲ期に比べて口縁部の小規模化と胴部の偏平化及び底部の丸底化が進んでいる。鉢(No33~36)は、口縁部が短く外反する短頸壺のような形態のもの(No33・34)と、平底で口縁部が体部からそのまま開く形態のもの(No35・36)がある。椀(No38~50)は、器内が薄く均一で、体部が浅く丸底のものが多く見られる。辻堂遺跡第23号住居跡から出土したNo38は、体部の深いものであるが、おそらく諏訪遺跡第30号住居跡の体部の深い椀から変化してくるものと思われる。南街道遺跡第40号住居跡出土のNo46は、唯一内外面とも赤彩されたものである。

第Ⅴ期の土器(第57図)は、辻堂遺跡第28号住居跡や宮田遺跡第1号住居跡出土土器などがある。器種的には十分ではないが、壺・瓶・甕・坏・椀が見られる。辻堂遺跡第33号住居跡出土のNo1の壺は、口縁部の外反が強く、口縁部下方に段をもつもので、該期かその直後のものと思われる。壺(No2~4)は、胴部がやや張り最大径を中位に有する古い特徴をもつもの(No3)と、胴部の張りが弱く最大径を下位にもつもの(No4)がある。第Ⅳ期までの壺は、胴部外面の調整にケズリの後に全面もしくは上半にナデを加えるものが

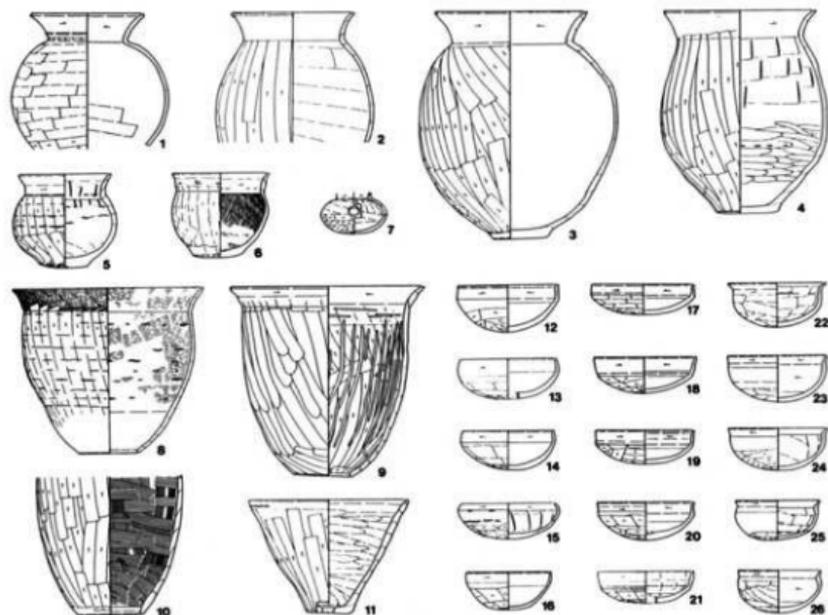
主体であるが、該期では全面ケズリ調整のものも多く見られる。小形壺(No5・6)も壺と同様に胴部外面のナデが省略され、ケズリだけとなる傾向がある。瓶は、大形瓶(No

#### 第56図土器一覧表

辻堂4号住	5・6・17・20・21・32・37・39・43
辻堂5号住	3・4・10・13・14・15・16・28・29
辻堂21号住	1・8・26・30
辻堂23号住	2・18・38
辻堂29号住	11・19・34・35
辻堂51号住	12・31
辻堂52号住	22・23・24・25・41・42・45
南街道40号住	7・9・27・33・36・40・44・46・47・48・49・50・51・52



第56図 第IV期の土器



第57図 第V期の土器

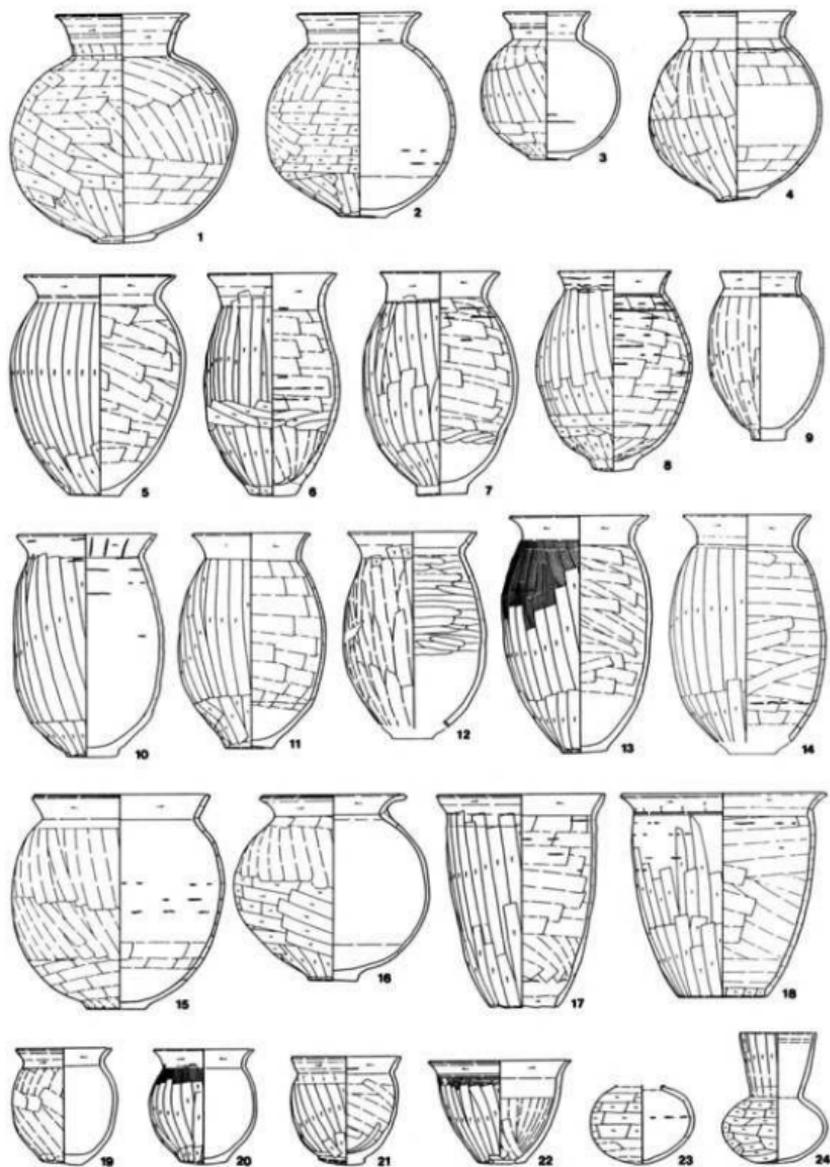
8～10)と小形甕(No11)がある。宮田遺跡第1号住居跡から出土した大形甕(No8)と小形甕(No11)は、小形甕の底部穿孔の形態に差異があるが、離濠遺跡第2号住居跡(坂野1988)出土のもの

に類似している。宮田遺跡の大形甕の方が、器高が高くやや長胴ぎみであることから後出的と思われる。甕(No7)は、小形丸底の胴部が扁平化したもので、胴部中位に焼成前の穿孔が施されている。杯(No12～21)は、丸底の体部から口縁部が内傾もしくは直立する「模倣杯」である。体部の深いもの(No12～16・20)と浅いもの(No17～19・21)があり、後者は体部と口縁部の境に浅い凹線状のナゾリを施して稜を強調しており、前者よりも模倣性が高い。椀(No22～26)は、体部の浅い丸底形態が主体であるが、第IV期のものにくらべて器内が厚く、口縁部もやや鈍くなっており、退化的傾向が伺える。

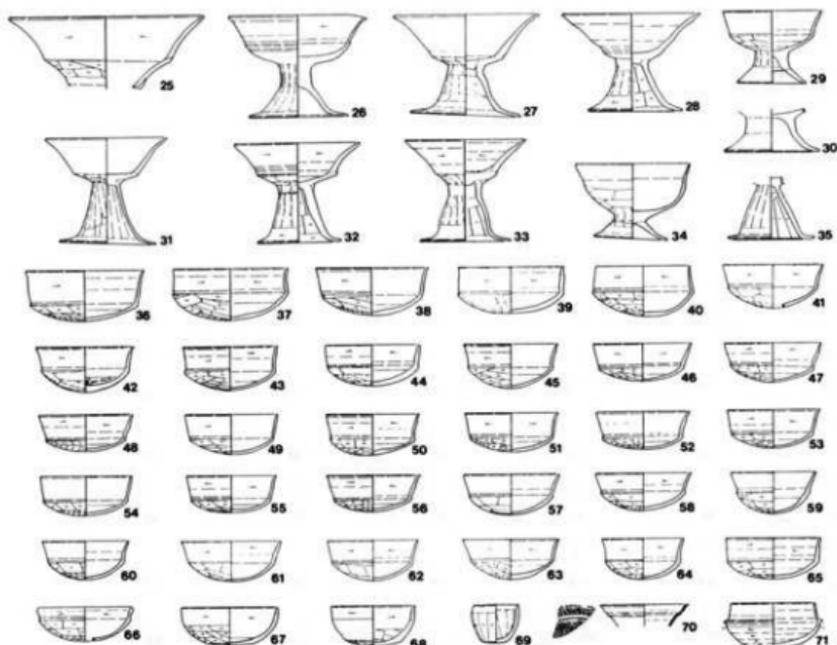
第VI期の土器(第58・59図)は、辻堂遺跡第8号住居跡覆土一括土器・第11号住居跡・第13号住居跡・第49号住居跡出土土器などがある。該期は、第V期とは時間的に連続せず、断絶が認められる。器種は、壺・甕・甕・小形壺・高杯・杯・椀がある。壺(No1～3)は、口縁部の外反が弱く、中位に浅い凹線を1条施して段を描出するものであるが、辻堂遺跡第11号住居跡では2条施すものもある。甕は、

第57図土器一覧表

辻堂28号住—3・4・9・12・17・18・19・20・23・24・26
辻堂33号住—1
辻堂36号住—10・16・22・25
宮田1号住—2・5・6・7・8・11・13・14・15・21



第58図 第Ⅵ期の土器(1)



第59図 第Ⅵ期の土器②

第58・59図土器一覧表

辻堂8号住	1・2・3・4・8・9・11・15・16・27・31・34・40・41・57・58・59・60・66・67・69
辻堂11号住	5・6・7・10・12・13・17・19・20・21・22・23・24・25・26・28・29・30・32・33・35・36・37・38・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・68・70・71
辻堂13号住	39・61・62
辻堂47号住	65 (掘り方内)
辻堂49号住	14・18・63・64

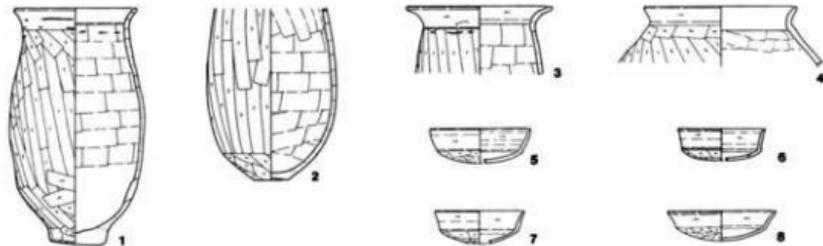
長胴甕・胴張甕・小形甕がある。長胴甕(No5~14)は、No5のような古い特徴をもつものもあるが、主体は胴部の張りが弱く最大径を中位かやや下位にもつものである。これらは底部形態が突出あるいはやや突出する平底をもつ特徴があり、外面調整はケズリが主体であるが、No12のようにナデ調整も見られる。胴張甕(No4・15・16)は、形態が様々でNo4やNo16のように、壺との区別が難しいものもある。小形甕(No19~21)は、長胴甕と同様に胴部の張りが弱くなり、口縁部径と胴部最大径の差が小さくなる。甕は、大形甕(No17・18)と小形甕(No22)がある。大形甕は、胴部の張りがほとんどなくなり、胴部外面と底部(穿孔部)内側がケズリ調整され、形態や技法もほぼ定型化している。小形甕(No23・24)は、胴部が偏平化した丸底のもので、No24のような口縁部が直立するものが主体である。小形甕自体は該期から次期頃にかけて衰退し、以後は広口短頸甕が主流となる。高坏は、法量

差により大形(No25)・中形(No26~28・31~33)・小形(No29~30・34)のものがある。大形の高坏は、下田遺跡第24号住居跡(柿沼1979)出土の高坏のように、「和泉型高坏」(中村1979)をそのまま大形化したものが第Ⅴ期頃より出現し、集落内で数個程度と少量ながら該期頃まで存続する。辻堂遺跡第11号住居跡出土のNo25は、やや特異な形態の坏部だけであるため、器形の全容は不明である。中形の高坏は、3形態のものがある。No26は、大ぶりの模倣坏に台を付けたような形態であるが、口縁部の外反が強く、また口縁部と体部の境の稜の描出も異なることから、あるいは須恵器無蓋高坏を意識したものかもしれない。No27とNo28は、坏部がやや大きく脚部が短く開きぎみのものであり、No31~33は坏部が若干小さく脚部がやや高いものである。これらは増田一裕氏が違う意味で「中形高坏」(増田1989)と呼称されたものであるが、その見解には形態や技法的な面からも従えない。小形の高坏は、No29の該期の模倣坏に台を付けた「鬼高型高坏」(中村1979)と、No34の腕に台を付けた形態のものがある。坏は、口縁部が長くやや外反し口唇部が尖る模倣坏が主体で、口縁部径が14cm~15cmのやや大ぶりのもの(No36~40)や、No40のように口縁部がやや内傾するものも客体的に存在する。No66は、口縁部が短く古い特徴をもつものであり、第57図No20の系譜を引くものであろう。碗(No68)は、やや小形で底部をケズリ落とした形態のもので、当地域では該期から次期によく見られる。この他には、辻堂遺跡第11号住居跡から須恵器甕の破片(No70)と坏身(No71)が出土している。No71の坏は、ロクロ使用であるが、焼成は酸化焰である。形態的にはTK47型式に類似しているが、口唇部や器受部の作りに精緻さがなく、また体部寛ケズリの範囲が広いなど、本来の須恵器とは異なる点が多い。

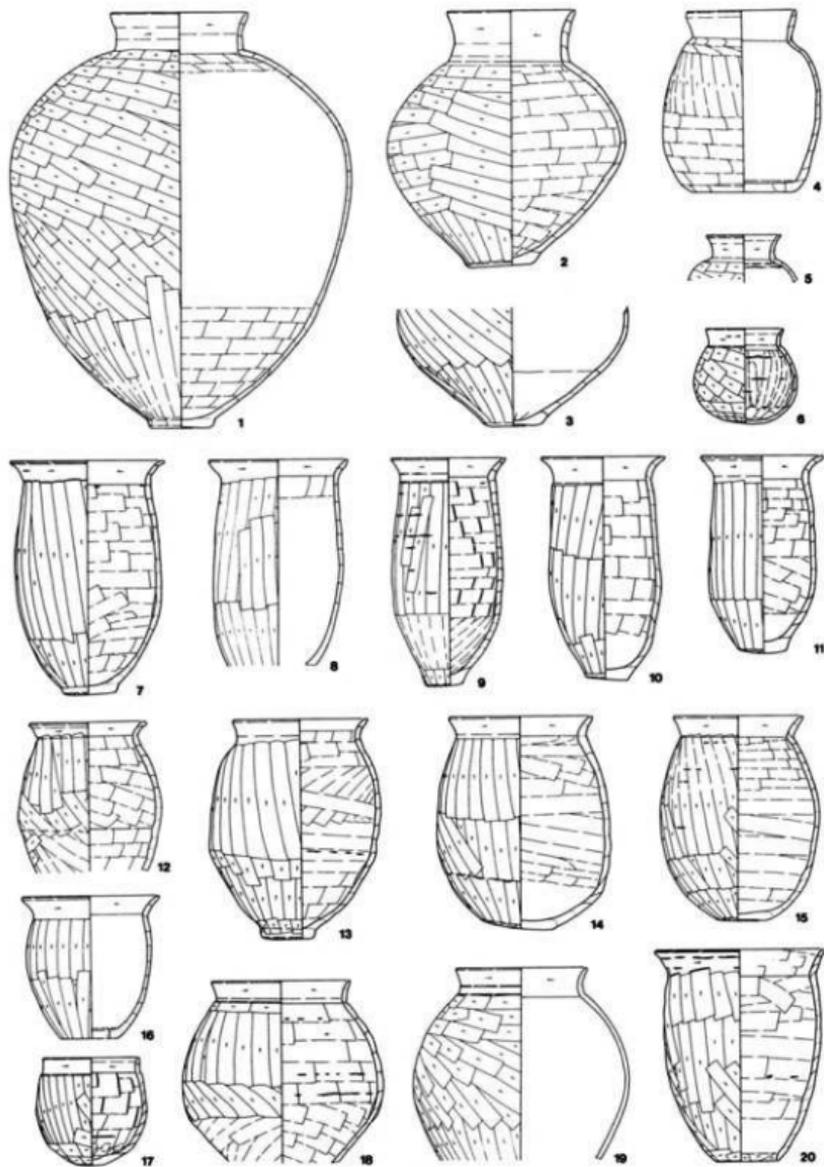
第Ⅶ期の土器(第60図)は、辻堂遺跡第2号住居跡、南街道遺跡第2号住居跡及び第44号住居跡覆土中出土土器などがあるが、良好な一括資料を欠くため、第Ⅶ期との区分は明確とは言えない。器種は、甕と坏が見られるだけである。甕は、長胴甕と胴張甕がある。長胴甕は、口縁部の外反がやや強いもの(No3)と、口縁部の外反が弱く胴部が下膨らみの特徴的な形態のもの(No1)がある。胴張甕(No4)は、口縁部が短く外反し、胴部の張りが強いものである。坏(No5~8)は、いずれも破片であるため資料的に良好ではないが、第Ⅵ期に比べて口縁部がやや短くなるのが特徴である。該期は、ミカド遺跡第4号住居跡(坂本他1981)や、南大通り線内遺跡第24号住居跡(増田1989)などと同時期と思われる、それらの住居跡出土の坏に見られるような、口縁部径が13cm~

第60図土器一覧表

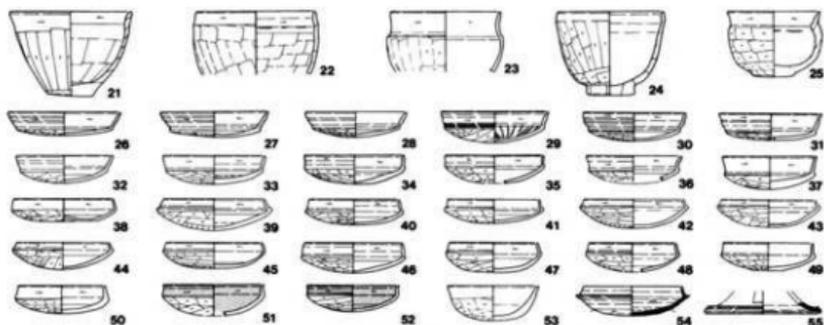
辻堂2号住	1・5・7
南街道2号住	1・4・8
南街道44号住	2・3・6



第60図 第Ⅶ期の土器



第61図 第Ⅲ期の土器(1)



第62図 第Ⅶ期の土器(2)

第61・62図土器一覧表

辻堂35号住	19・23・29・30・46・47・48・49・50・51
辻堂53号住	1・2・4・8・12・14・15・16・33・42・43・44・45
南街道34号住	10・11・21・26・27・28・34・35・36・37・39・40・52・54・55
南街道37号住	3・5・7・9・13・18・20・24・25・32・41・53
南街道43号住	6・17・22・31・38

14cmとやや大ぶりで、口縁部が緩やかに外反し、口縁部と体部がほぼ同じ高さの坏が顕著になる時期と推測される。No 8 は、口縁部の

外反が強く量量のやや大きなものであるが、覆土中からの出土であるため、該期より新しい可能性もある。

第Ⅶ期の土器(第61・62図)は、辻堂遺跡第35号住居跡・南街道遺跡第34号住居跡・第43号住居跡出土土器と、辻堂遺跡第53号住居跡・南街道遺跡第37号住居跡覆土一括土器などがある。器種は、壺・甕・甔・鉢・坏・碗などが見られる。壺は、大形短頸壺(No 1)・広口壺(No 2)・小形広口短頸壺(No 6)がある。大形短頸壺は、その直立する口縁部形態から須恵器の影響が伺えるが、本報告の第16号溝跡でも同様の大型壺が出土している。No 4 は、報告(恋河内1996)では甕としているが、その大きな平底形態は「平底短頸甔」(田口1995)等の須恵器の影響と考えられる。甕は、長胴甕(No 7~11)・胴張甕(No 12~15・18・19)・小形甕(No 16・17?)がある。長胴甕は、第Ⅵ期や第Ⅶ期に比べて口縁部の外反がやや強くなり、最大径が胴部から口縁部に移行する。胴部は、張りが弱くなるが、前段階の名残りとして下位に若干張りをもつ程度となる。底部は、厚めの突出底の外縁を削り落とした小さな平底が主体となる。胴張甕は、胴部の張りが弱く長胴甕との中間形態のようなもの(No 12~15)と、胴部の張りが強く口縁部の外反の弱い形態のもの(No 18・19)の二者がある。後者は、比較的作りが丁寧で均整のとれた形態を呈し、口縁部の作りは小形広口短頸壺と類似している。鉢(No 21~25)は、形態が様々でバラエティーに富む。この中でNo 24は、長胴甕の胴下半の形態と非常に類似するもので、長胴甕の分割成形の段階で甕の下半部を鉢に作り替えた可能性が考えられる。坏は、坏蓋型・坏身型とも大ぶりのものが主体である。坏蓋型は、「有段口縁坏」(田中1991)と単純口縁坏がある。「有段口縁坏」(No 26~32)は、口縁部の外反がやや強く、体部が浅く偏平なものが主体である。単純口縁坏(No 33~37)は、口縁部がやや短く直立もしくは緩やかに外反し、口縁部と体部の高さがほぼ同じものが主体である。坏身型(No 38~50)は、模倣した須恵器の違いや模倣段階の違いによると思われる形態

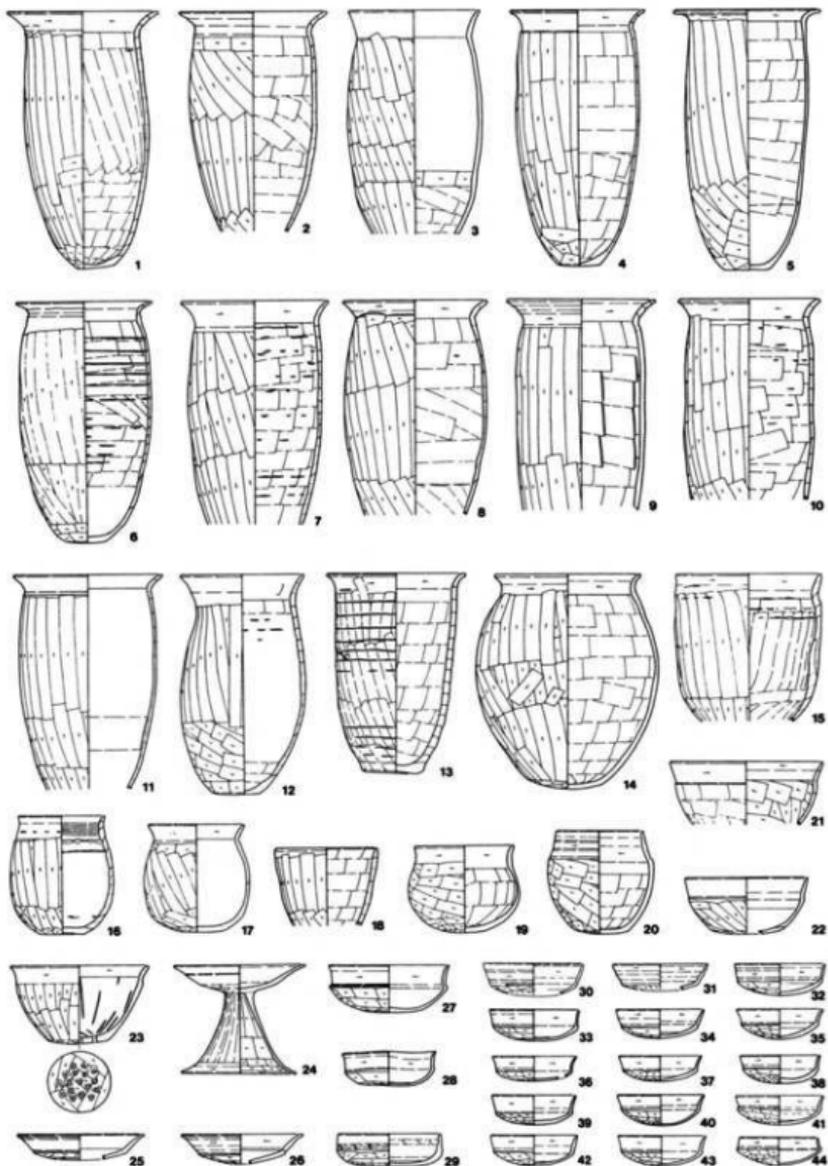
差が見られるが、法量が大きく比較的作りの丁寧なものは、TK-10～TK-43段階頃の須恵器坏身と形態的に類似している。なお、南街道遺跡第34号住居跡の覆土中からは、MT-85段階頃の須恵器坏身(No54)が出土している。No51とNo52は、いわゆる「比企型坏」(中村1979)で、水口由紀子氏のⅢ段階の第1～第2小期(水口1989)に該当するものであろう。

第Ⅷ期の土器(第63図)は、南街道遺跡第13号住居跡・第18号住居跡・第42号住居跡出土土器などがある。該期の遺構数は多いものの、良好な伴出関係やセット関係を示すものは少ない。器種は、甕・鉢・瓶・高坏・坏・皿が見られる。甕は、長胴甕・胴張甕・小形甕がある。長胴甕(No1～13)は、前段階に比べてさらに長胴化が顕著になる。口縁部は外反がさらに強くなる傾向が見られ、胴部は若干張りを残すが、長胴化に伴って張りは中位に上昇する。底部は、ケズリ調整が顕著になり、薄くやや広めの若干不安定な平底となり、突出底はほとんど見られなくなる。No12は、口縁部の外反が弱く、胴部下半に最大径をもつ第Ⅷ期～第Ⅶ期の古い形態の特徴を残すものであるが、底部形態は該期の特徴をもっている。No13は、外面が積層み痕を顕著に残すナデ調整で、底部が木葉痕をもつ突出底の形態であるが、これは外面のケズリ調整が省略され、整形段階のままで焼成されたものであろう。胴張甕(No14)は、第Ⅶ期のNo14やNo15(第61図)の系譜を引くものと思われるが、長胴甕と同様に胴部の張りが中位に移行している。No15は、器高が低くずん胴形で、器内が厚くやや雑な作りのものである。鉢(No18～22)は、大形鉢(No21)と小形のもの(No18～20)があり、小形のものは前段階と同様にバラエティーに富む。瓶(No23)は、多孔の小形瓶がある。高坏(No24)は、口縁部と脚部が大きく開き、坏部が浅く脚部の高い形態のものである。群馬県地方で鬼高期に多く見られる長脚高坏の系譜を引くものと思われ、上里町臺遺跡(中村1980)第3号住居跡出土の高坏の形態から変化してきたものであろう。辻堂遺跡第12号住居跡出土のNo25とNo26は、報告(恋河内1996)では一応皿としたものであるが、形態的には「小針型坏」(田中1991)に類似している。当地域では茶褐色のものが多く、客体的な存在である。坏は、有段口縁坏と単純口縁坏があり、いずれも前段階より小ぶりのものが多く、口縁部径は12cm前後のものが主体となる。有段口縁坏(No30～32)は、体部が浅く器高の多くを口縁部が占めるようになり、口縁部外面の段は2段のものが主流である。単純口縁坏(No27～29・33～43)は、前段階より口縁部がやや短く緩やかに外反し、口唇部が突るものが主体となる。また、口縁部と体部の境の段は、浅い凹線により描出するものが主体のようであるが、段を若干突出させて強調するものも見られる。No27～29は大形の坏であるが、No29は器内が厚く雑なつくりのものである。蓋身型の坏(No44)も法量が小さくなるが、量的にかなり減少するようである。

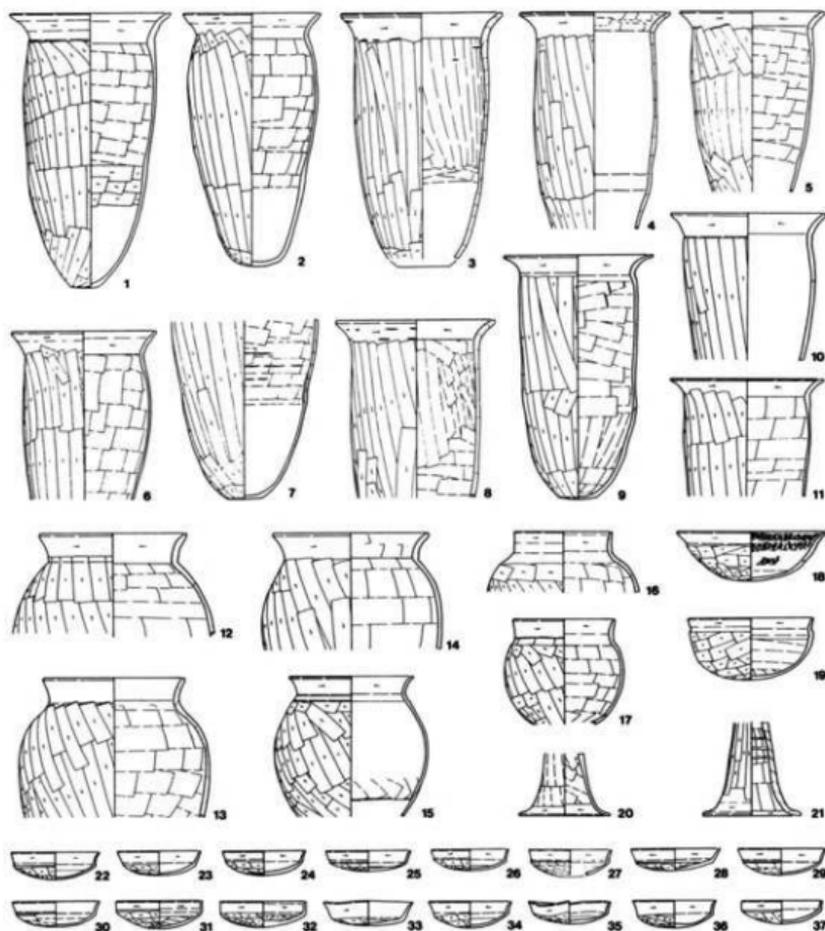
第Ⅸ期の土器(第64図)は、辻堂遺跡16号住居跡、南街道遺跡第9号住居跡・第10号住居跡・第21号住居跡・第26号住居跡出土土器や、辻堂遺跡9号住居跡・南街道遺跡第1号

#### 第63図土器一覽表

辻堂12号住—22・25・26
辻堂14号住—41
辻堂19号住—30
南街道13号住—1・2・7・13・14・19・23・24・33・34・35・36・37・38
南街道18号住—8・9・10・31・42
南街道24号住—11・21・32・44
南街道38号住—43
南街道42号住—3・6・12・15・16・17・29
南街道45号住—4・18・20・28
南街道5号溝—5・27・39・40



第63図 第Ⅰ期の土器



第64図 第Ⅷ期の土器

住居跡・第23号住居跡覆土出土土器などがあるが、セット関係が十分に把握できるような良好な一括資料が少ないため、共伴関係はやや不明確である。

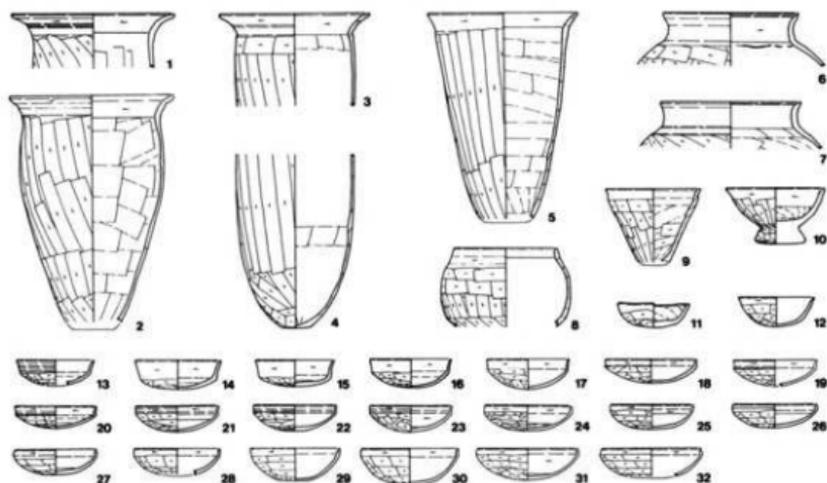
器種は、甕・鉢・高坏・坏などが見られる。甕は、長胴甕・胴張甕・小形甕がある。長胴甕(No1~11)は、胴部の長胴化がピークに達し、該期以降から8世紀にかけて、徐々に短胴化が進行する。形態は、前段

第64図土器一覧表

辻堂9号住	— 3・4・5・8・28・29・30・31
辻堂16号住	— 1・2・6・7・27
南街道1号住	— 15・32・33・34・35
南街道9号住	— 18・19
南街道10号住	— 10・11・14・36
南街道16号住	— 37
南街道21号住	— 9・21
南街道23号住	— 22・23
南街道26号住	— 12・13・16・25・26
南街道33号住	— 17・20・24

階に比べて胴部の張りが中位から上位に上昇し、胴下半の湾曲が弱まる傾向がある。この器形変化に伴って、外面の調整がやや斜方向の寛ケズリが主体となり、胴部上半にはさらに強い傾斜による斜方向寛ケズリが施されるものも見られるようになる。また、南街道遺跡第10号住居跡出土のNo11の甕の口縁部内面には、次期以降に一般化する口縁部内面の段や幅広の凹線状の窪みに通じるような、浅く幅の狭い沈線が施されている。胴張甕(No12~16)は、新たに最大径を胴部中位からやや上位にもつ若干肩の張ったような形態のもの(No13・14)が見られる。鉢(No18・19)は、いずれも南街道遺跡第9号住居跡から出土したもので、前段階の第63図No21の大形鉢の系譜を引くと考えられるもので、法量の小形化とともに器高を減じ、底部が丸底化している。高坏(No20・21)は、脚部の形態からは長脚高坏と考えられるが、前段階の第63図No24のような大きな坏部をもつものではなく、小形の坏部を有する系統のものと思われる。しかし、いずれも破片であるため該期に伴うものか判断は難しい。坏(No22~37)は、単純口縁坏しか見られないが、前段階に比べて法量がさらに小さくなり、口縁部径が11cm代のものが主体となり、器形の歪んでいるものが多く見られる。形態的には、口縁部がやや短く体部は浅く偏平化したものが多い。口縁部と体部の境の稜は、段を若干突出させるものや段を削り落とすものが主体であり、浅い凹線を施すものはほとんど見られない。

第Ⅷ期の土器(第65図)は、辻堂遺跡第10号住居跡・第31号住居跡、南街道遺跡第3号住居跡・第12号住居跡・第39号住居跡出土土器や、辻堂遺跡第9号住居跡・河川跡・南街道遺跡第21号住居跡・第22号住居跡覆土出土土器などがあるが、良好な一括資料がないため共伴関係はやや不明確である。器種は、甕・鉢・坏・椀などが見られる。甕は、長胴甕・胴張甕がある。長胴甕(No1~5)は、前段階に比べて胴部がやや短くなるようであり、口縁部内外面に寛による段や指による幅広の浅い凹線状の窪み及び弱い屈曲をもつのが特徴である。該期では良好な資料を欠くが、胴部外面の調整は斜方向の寛ケズリが多くなり、胴部上半にはNo1のような角度の強い斜方向寛ケズリを施すものが一般的になるものと思われる。胴張甕(No6・7)も、長胴甕と同様に口縁部内面に寛による段が見られる。鉢は、口縁部が短くやや内傾し胴部が張るもの(No8)と、口縁部と体部の境に稜をもち体部が直線的に深くなる鬼高的なもの(No9)がある。坏(No13~32)は、前段階からの系譜を引く単純口縁坏と新たに出現する「内屈口縁坏」(鈴木1984、田中1991)がある。No13の有段口縁坏は、南街道遺跡第39号住居跡の覆土中から出土した破片であるため、共伴関係が明確ではないが、口縁部が短く法量の小さなものであり、前段階が該期まで残存するものと思われる。単純口縁坏は、前段階と同様に口縁部径が11cm代のものが主体である。No14~17は、口縁部と体部の境の稜を削り落とすもので、前段階とあまり大差ないが、No16やNo17のように他に比べて体部の深いものがあり、内屈口縁坏の影響が伺える。No18~23は、若干突出した段を残すものであるが、これまでの単純口縁坏に比べて口縁部がかなり短く体部がやや深い形態である。この坏は、法量や体部の形態が共伴する小形の内屈口縁坏と比較的類似しており、内屈口縁坏の強い影響によって出現したものと考えられるが、焼成や色調は内屈口縁坏と異なるものが多い。内屈口縁坏(No24~32)は、小形(No24~28)と中形(No29~32)のものがある。いずれも口縁部の内屈がやや弱く、短く内湾するか直立ぎみのものであり、八幡太神南遺跡第1号住居跡(富田・赤熊1985)のものに類似している。椀(No10~12)は、口縁部が若干外反ぎみに開くもの(No10・12)と、甕の底部形態に類似したもの(No11)がある。No10は、調整がやや雑な



第65図 第Ⅶ期の土器

な中実の比較的高い突出底風の高台が付いているが、おそらく成形時の底部円柱を削り落とさず、そのまま若干調整を加えて台にしたものではないかと思われる。

以上のように、本遺跡及び宮田遺跡出土の土器をⅠ～Ⅷ期に分けて考えたが、これらの各時期の年代については、当地域の土器を扱った諸氏の編年と年代比定を参考にすると、第Ⅰ期と第Ⅱ期が4世紀後半、第Ⅲ期が5世紀前葉、第Ⅳ期が5世紀中葉、第Ⅴ期が5世紀後葉、第Ⅵ期が6世紀前葉、第Ⅶ期と第Ⅷ期が6世紀中葉～後葉、第Ⅸ期と第Ⅹ期が7世紀前半、第Ⅺ期が7世紀後半に概ね位置づけられるものと思われる。

第65図土器一覽表

辻堂9号住	1・19・25
辻堂10号住	21・22・23・24
辻堂31号住	31
辻堂河川跡	32
南街道3号住	2・6
南街道12号住	20・26・27
南街道21号住	12・14・18・30
南街道22号住	8・15・17・29
南街道36号住	28
南街道39号住	3・4・5・7・9・10・11・13・16

## 第Ⅱ節 辻堂・南街道遺跡の古墳時代集落の変遷

前述のように現在までの辻堂・南街道遺跡の発掘調査では、古墳時代中期前半から後期終末の遺構として、住居跡101軒・掘立柱建物跡3棟・円形周溝遺構1基・土壇11基・溝跡19条が検出されている。しかし、調査区域が狭いうえに遺構の重複が激しいため、その時期を特定することは困難なものが多い。そのため、集落の全体的な動態を把握することはできないが、出土遺物や遺構の重複関係から、土器による第Ⅲ期～第Ⅸ期の各時期に概ね比定できるものは、一応以下のとおりである。

第Ⅲ期—辻堂遺跡3住・7住・24住・26住・41住・43住・57住・2土壇・3土壇、南街道遺跡5住・7住・14住・15住・27住・29住・30住・31住・35住・41住

第Ⅳ期—辻堂遺跡4住・5住・21住・23住・29住・48住・51住・52住・56住、南街道遺跡40住

第Ⅴ期—辻堂遺跡28住・33住・36住・37住・39住

第Ⅵ期—辻堂遺跡8住・11住・13住・17住・32住・45住・49住

第Ⅶ期—辻堂遺跡2住・47住、南街道遺跡2住・44住

第Ⅷ期—辻堂遺跡35住・53住、南街道遺跡34住・37住・43住

第Ⅸ期—辻堂遺跡9住・12住・14住・19住・20住・27住・46住・54住・14溝・16溝・21(古)溝、南街道遺跡6住・8住・10住・13住・17住・18住・20住・24住・35住・42住・45住・20土塙・5溝・11溝

第Ⅹ期—辻堂遺跡16住・1掘立・11溝、南街道遺跡1住・4住・9住・10住・16住・21住・23住・26住・33住・3掘立・2溝

第Ⅺ期—辻堂遺跡1住・10住・31住、南街道遺跡3住・12住・22住・36住・39住

辻堂・南街道遺跡では、具体的に遺構が見られるのは中期前半の第Ⅲ期からであるが、前述のように南街道遺跡B地点の第15号住居跡の覆土中からは、第Ⅲ期の土器に混じって前期の土器(第Ⅰ期)が出土しており、その周辺に小規模な前期の集落が形成されていた可能性が高い。この前期集落が以後継続的に営まれて、第Ⅲ期の集落に発展するのかは現段階では不明である。

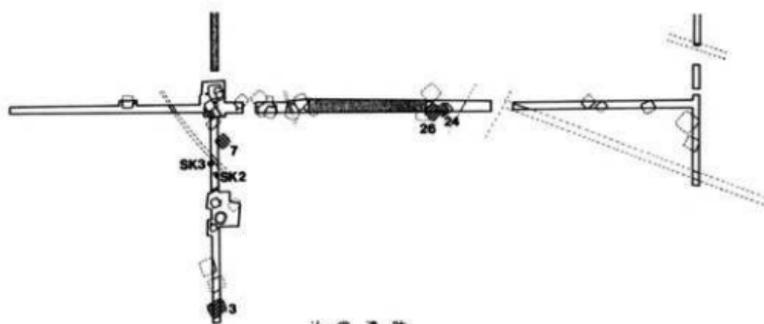
第Ⅲ期の集落(第66図)は、その当初から比較的広範囲に住居跡が分布しており、この時期からすでに複数の住居群によって構成される比較的大規模な集落の様相を示している。女堀川中流域では、諏訪遺跡(柿沼1979)や東牧西分遺跡(恋河内1995)のように、この時期から住居にカマドが付設される集落も見られるが、本遺跡ではこの時期にカマドが付設された住居跡はなく、第Ⅲ—Ⅰ期から2期にかけて炉が主体である。

第Ⅳ期の集落(第67図)は、遺跡南東側の南街道遺跡で住居跡の分布が希薄になり、集落の主体は北西側の辻堂遺跡の方に移行する傾向が見られる。本遺跡では、該期から各住居にカマドが急速に普及するようであり、その位置は住居の北東側から東側の壁に集中している。該期のカマドは、構造的には比較的整った形態を呈し、その構築材は粘質ロームブロックを混在させたものが主体で、中には灰色粘土を混入したものも見られるが、6世紀以降のカマドの構築材と違って、その混在量は少なく貧弱である。

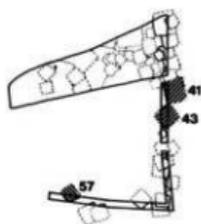
第Ⅴ期の集落(第67図)は、遺跡北西側の辻堂遺跡の方に住居跡が集中している。現状では、D地点北側とC地点の2箇所に見られるが、D地点の方では多くの住居跡が重複している。D地点の住居跡は、出土土器の良好な資料がないため明確ではないが、第33号住居跡と第39号住居跡は該期よりもやや新しい可能性もあり、第Ⅴ期と第Ⅵ期の間に位置付けられるかもしれない。

第Ⅵ期の集落(第68図)は、現状では第Ⅴ期と同様に遺跡北西側の辻堂遺跡の方に住居跡が集中し、A地点北側からB地点西側にかけてとD地点中央部の2箇所に分かれて分布している。カマドの位置は、南側以外の各方向にあり、規則性は見られない。構造的には第Ⅲ期や第Ⅳ期と大差ないが、該期にはすでに燃焼部が住居壁を掘り込んで構築されているもの(第32号住居跡)が存在することは注意される。また、第1号円形周溝遺構は、出土土器が極少量であるため明確な時期は不明であるが、遺構の配置関係から見て、おそらく該期か第Ⅶ期～第Ⅹ期の所産と推測される。

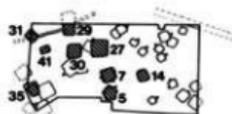
第Ⅶ期と第Ⅷ期の集落(第69図)は、住居数は少ないながらも再び広範囲に分布する傾向が見られ



辻堂遺跡

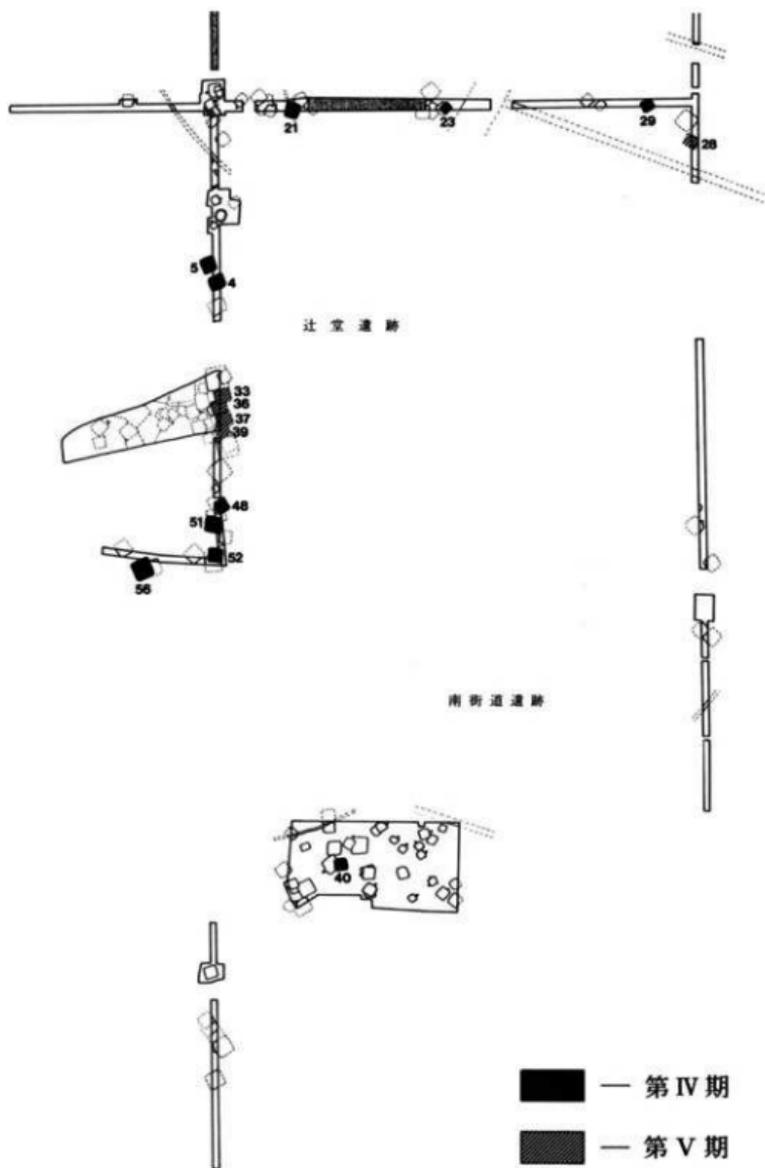


南街道遺跡

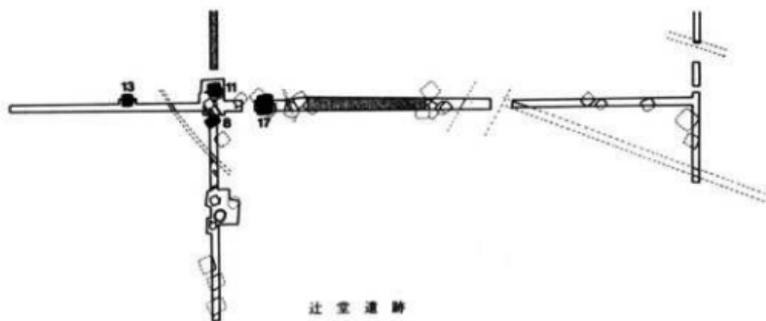


- 第Ⅲ-1期
- 第Ⅲ-2期

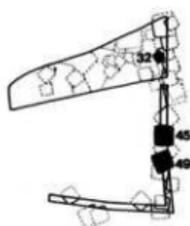
第66図 第Ⅲ期の遺構



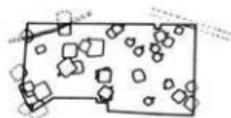
第67図 第IV・V期の遺構



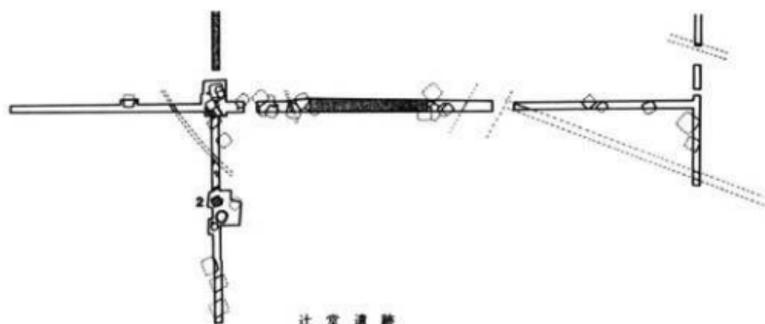
辻堂遺跡



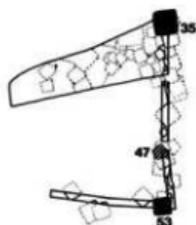
南街道遺跡



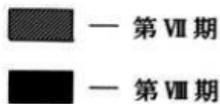
第68図 第VI期の遺構



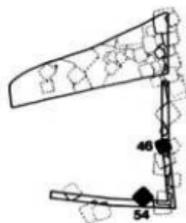
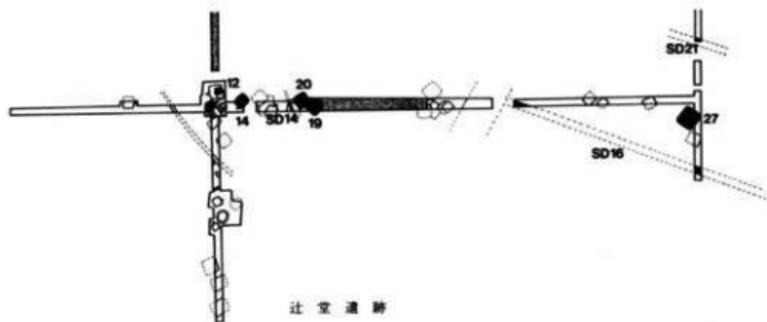
辻堂遺跡



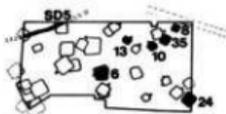
南街遺跡



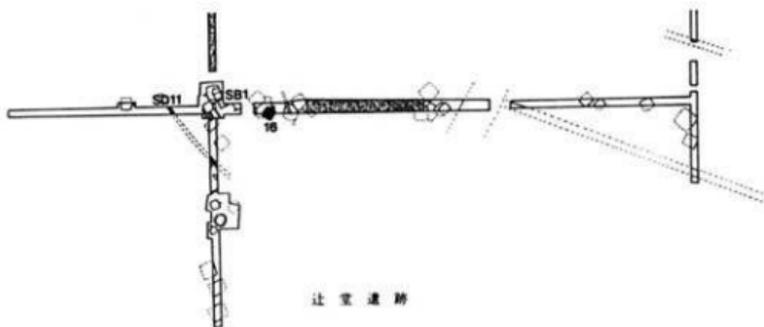
第69図 第Ⅶ・Ⅷ期の遺構



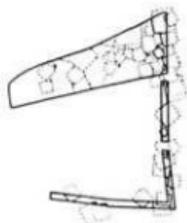
南街道遺跡



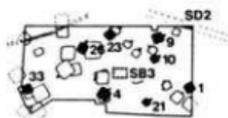
第70図 第Ⅹ期の遺構



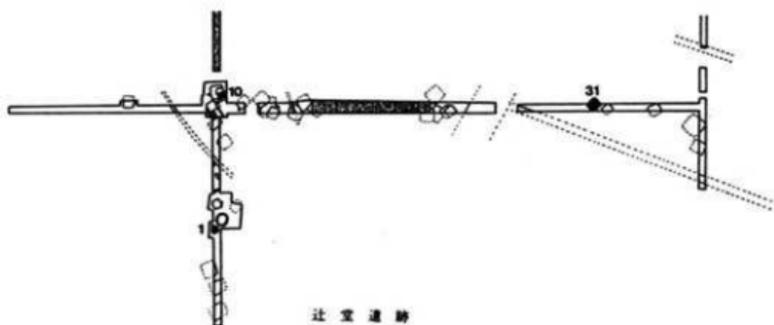
让堂遺跡



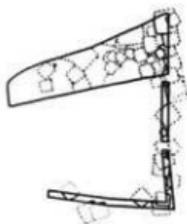
南街道遺跡



第71図 第X期の遺構



辻堂遺跡



南側遺跡



第72図 第五期の遺構

る。第Ⅷ期の辻堂遺跡D地点第35号住居跡は大形住居跡で、その西側にもう1軒大形住居跡が近接して存在していることが、遺構確認調査によって明らかになっている。

第Ⅸ期の集落(第70図)は、住居数が多くなり広範囲に分布している。住居跡の向きは画一的な様相が見られるが、カマドの位置は様々である。該期以降では、一般的な住居跡に比べて小規模な住居跡が集落内で多く見られるようになる。また、この時期以降から集落が立地する微高地上で溝の掘削が顕著になる。これらの溝は、集落北東端の辻堂遺跡第16号溝跡や第21号(古)溝跡のように、地形の等高線に並行した流路をとる灌漑水路と、南街道遺跡第5号溝跡や第11号溝跡の地形の等高線に直交する流路をとる排水的機能の溝が見られる。

第Ⅹ期の集落(第71図)は、辻堂遺跡B地点西側と南街道遺跡A・B地点の2箇所に分かれて住居跡が分布している。住居跡の向きは、第Ⅸ期と同様に画一的な様相を示し、カマドの位置は住居跡の北東側が主体となる。また、辻堂遺跡第1号掘立柱建物跡と南街道遺跡第3号掘立柱建物跡は、出土遺物や重複関係から見て、該期の可能性が高い。

第Ⅺ期の集落(第72図)は、第Ⅹ期と同様の分布が見られるが、住居跡の数は少なくなり、分散的な傾向が見られる。南街道遺跡A地点では、やや大形の第39号住居跡とその周辺の小規模ないくつかの住居跡によって、一つの住居群が構成される様相も伺える。

本遺跡の集落は、第Ⅺ期の7世紀後半をもって廃絶される。この時期は、女堀川流域の沖積低地縁辺部に新しく集落が形成され始める時期であり、おそらく本遺跡も多くの沖積低地内の集落と同様に、該期以降には沖積低地の縁辺部に移動したものと思われる。

## 参考文献

- 赤熊浩一(1988) 『将監塚・古井戸Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集  
井上尚明(1986) 『将監塚・古井戸Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集  
柿沼幹夫(1979) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集  
柿沼幹夫他(1986) 『神川村前組羽根倉遺跡の研究』 『埼玉県立博物館紀要』 12  
恋河内昭彦(1989) 『共和小学校校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第10集  
(1990) 『根田遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第12集  
(1991) 『真鏡寺後遺跡Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書 第14集  
(1993) 『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町遺跡調査会報告書 第5集  
(1995) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書 第17集  
(1996) 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第20集  
小久保 徹(1978) 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集  
駒宮史朗(1979) 『雷電下・飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集  
埼玉県(1982) 『新編埼玉県史』 資料編2  
坂本和俊(1984) 『埼玉県』 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会  
坂本和俊他(1981) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書 第2集  
(1986) 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室  
菅谷浩之(1969) 『本市市落合古墳調査報告書』 本市市文化財調査報告 第8集  
(1976) 『宮下・樋之口遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会  
(1978) 『日の森遺跡』 美里村教育委員会  
(1984) 『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町史資料調査報告 古代 第1集

- 菅谷浩之他(1973)「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」〔第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨〕 埼玉県考古学会  
埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
- 篠崎 潔(1995)「真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡」 神川町教育委員会文化財調査報告書 第12集
- 鈴木徳雄(1984)「いわゆる北武蔵系土師器環の動態」〔土曜考古〕第9号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄他(1991)「辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡」 児玉町文化財調査報告書 第15集
- 田口一郎(1995)「平底短頸瓶寛書」〔群馬考古学手帳〕5 群馬土器観会
- 立石聖詞(1982)「後張Ⅰ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集  
(1983)「後張Ⅱ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 田中広明(1991)「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」〔埼玉考古学論集〕 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
(1995)「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」〔東国土器研究〕第4号 東国土器研究会
- 徳山寿樹他(1994)「平塚・左口・児玉条里遺跡」 児玉町文化財調査報告書 第16集  
(1995)「堀向・藤塚・柿島・内手・児玉条里遺跡」 児玉町文化財調査報告書 第18集
- 富田和夫・赤熊浩一(1985)「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・北堀・一丁田・川越田・梅沢」  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
- 橋本博文他(1980)「有勝寺北裏遺跡」 有勝寺北裏遺跡調査会
- 中村倉司(1979)「児玉地方における鬼高式土器の編年について」〔宇佐久保遺跡〕 埼玉県遺跡調査会報告 第38集  
(1980)「墓道跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第41集  
(1989)「関東地方における甕・大形甕・須恵器出現時期の地域差」〔研究紀要〕第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川 勇(1979)「女堀遺跡群発掘調査概報」 本庄市教育委員会  
(1983)「二本松遺跡発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集1分冊  
(1985)「夏目遺跡発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集2分冊  
(1987)「辻具路遺跡発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集3分冊
- 坂野和信(1988)「寛永入期の土器群」〔本庄市立歴史民族資料館紀要〕第2号  
(1991)「和泉式土器の成立過程とその背景」〔埼玉考古学論集〕 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
(1991)「和泉式土器の成立について」〔土曜考古〕第16号 土曜考古学研究会
- 藤川繁彦他(1995)「大久保山Ⅲ」 早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 細田 勝(1984)「向田・権現塚・村後」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第38集
- 本 庄 市(1976)「本庄市史」資料編  
(1986)「本庄市史」通史編Ⅰ
- 増田一裕(1985)「本庄遺跡群発掘調査報告書一久下東遺跡・遺構編一」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第7集  
(1987)「東富田遺跡群発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第10集  
(1987)「南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第9集(第1分冊)  
(1989)「四方田・後張遺跡群発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第14集  
(1989)「南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第9集(第2分冊)  
(1990)「山根遺跡発掘調査報告書」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第18集  
(1991)「南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 本庄市埋蔵文化財調査報告 第9集(第3分冊)  
(1992)「児玉地域の旧石器時代」〔児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要—平成3年度後期文化財担当者会議資料—〕  
埼玉県教育局指導部文化財保護課 児玉郡市文化財担当者会
- 増田逸朗(1977)「塚本山古墳群」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集
- 丸山 修(1991)「往來北遺跡発掘調査報告書」 上里町教育委員会
- 美 里 町(1986)「美里町史」通史編
- 水口由紀子(1989)「いわゆる“比企型環”の再検討」〔東京考古〕7 東京考古談話会
- 柳 進(1961)「児玉町八幡山輪軸焼場窯跡発掘調査報告書」 県立児玉高等学校
- 柳田敏司(1964)「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報」〔上代文化〕第34輯
- 山川守男(1984)「北武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」〔第5回三県シンポジウム—古墳出現期の地域性—〕  
北武蔵古代文化研究会 群馬県考古学談話会 千曲川水系古代文化研究所

# 写 真 图 版



図版 1



1. 辻堂遺跡B地点発掘調査風景



2. 辻堂遺跡B地点発掘調査風景



1. 第13号住居跡



2. 第13号住居跡カマド



1. 第14号住居跡

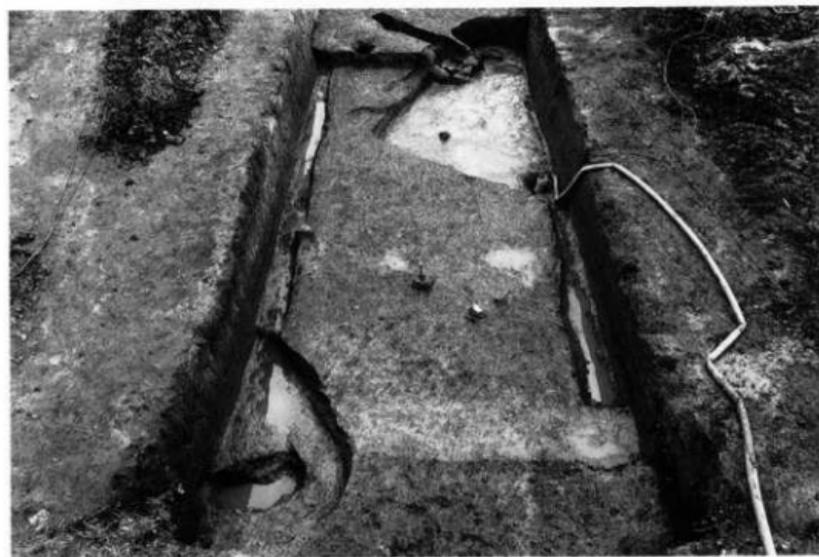


2. 第14号住居跡カマド

图版 4



1. 第15号住居跡



2. 第15~18号住居跡



1. 第16号住居跡



2. 第16号住居跡カマド



1. 第19~21号住居跡



2. 第19号住居跡



1. 第20号住居跡



2. 第20号住居跡カマド



1. 第21号住居跡



2. 第22~26号住居跡



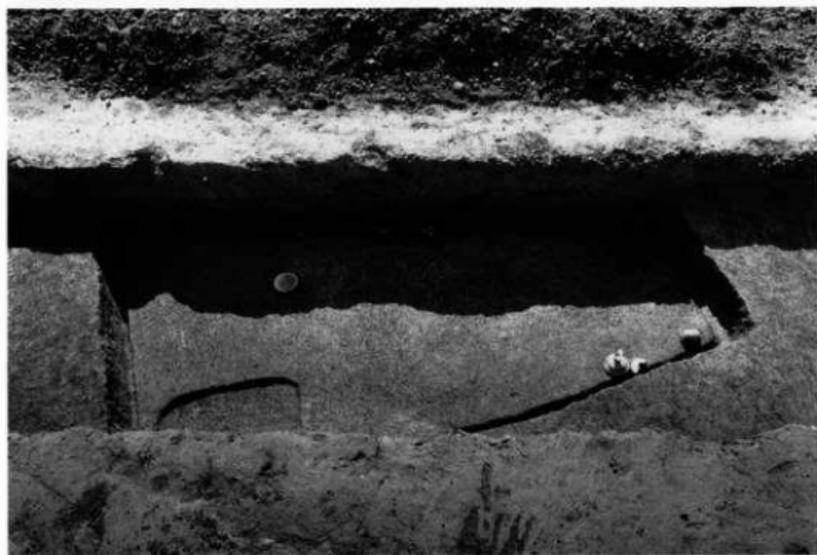
1. 第23・24号住居跡



2. 第23号住居跡カマド



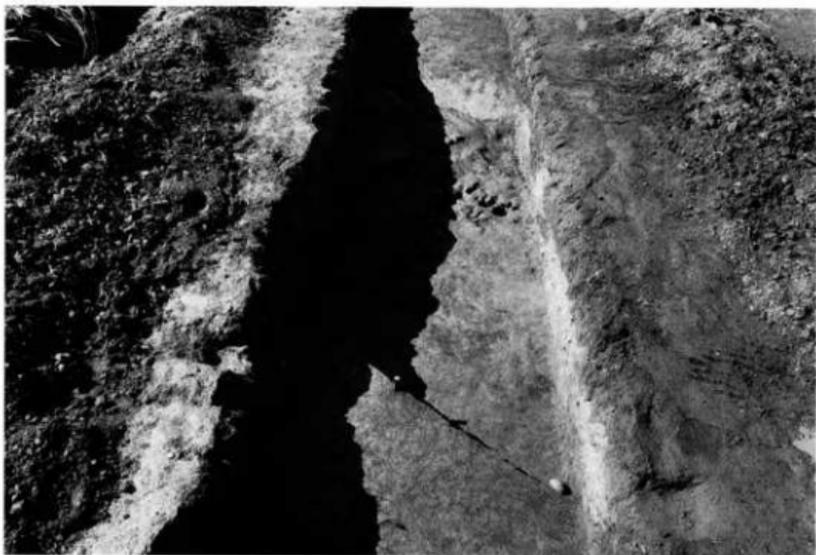
1. 第22·25·26号住居跡



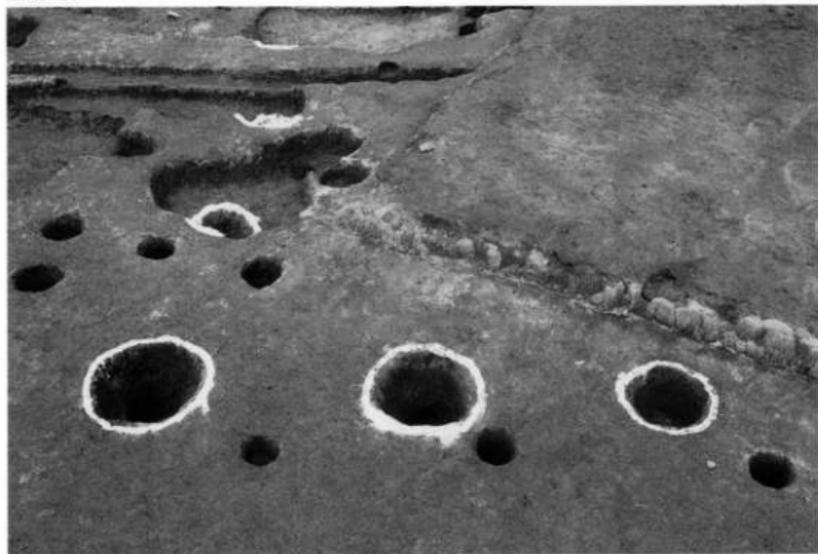
2. 第29号住居跡



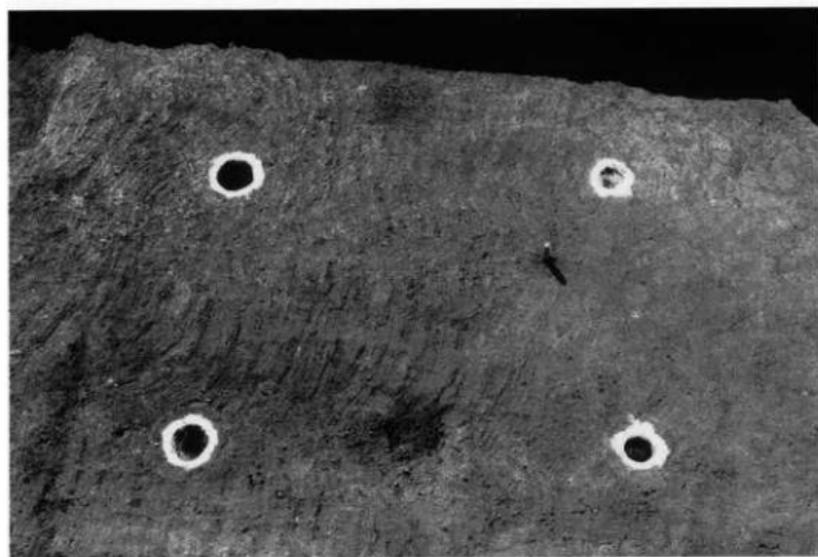
1. 第30号住居跡



2. 第31号住居跡



1. 第1号掘立柱建物跡



2. 第2号掘立柱建物跡



1. 第13号土坑



2. 第16号土坑



1. 第16号沟迹



2. 第21号沟迹



1. Ⅲ区北侧第18·19号沟迹



2. Ⅳ区南侧全景



13住-4



13住-6



13住-7



13住-8



14住-1



17住-1



17住-2



19住-1



16住-1



16住-2



16住-3



16住-4



21住-1



21住-3



21住-4



21住-6



21住-8



21住-9



21住-10



21住-11



21住-12



21住-13



23住-1

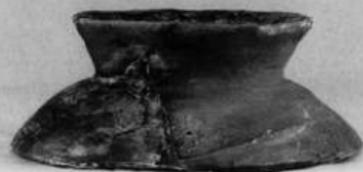


23住-4





14清-1



14清-2



14清-3



14清-5



14清-7



16清-1



16清-5



16溝-8



河川-2



河川-1



河川-4



河川-3



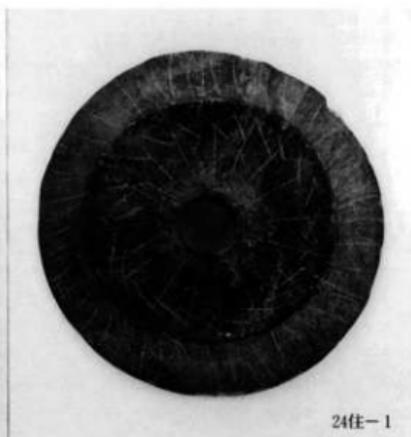
河川-11



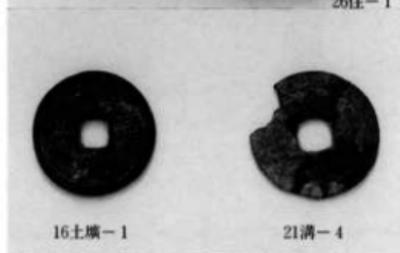




26住-1

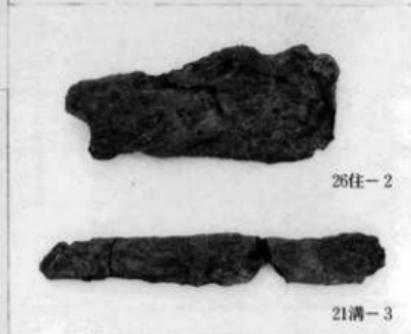


24住-1



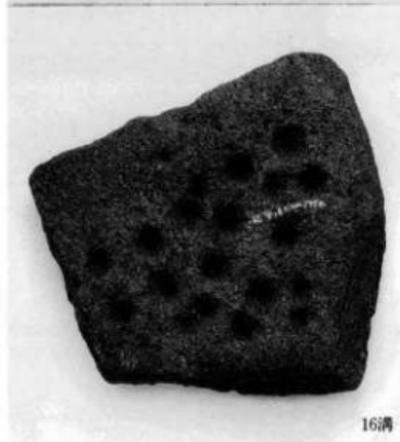
16土填-1

21清-4



26住-2

21清-3



16清



表採



児玉町文化財調査報告書第19集

## 辻堂遺跡 I

県営水田農業確立排水対策特別事業(やほり川地区)に伴う辻堂遺跡の地点発掘調査報告書

平成8年2月22日印刷

平成8年2月29日発行

**発行者** 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

**印刷所** たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356



